風の魔法使い

まるさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風の魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ７５１０Ｘ

【作者名】
まるさん

【あらすじ】
海鳴市に住まう少年、天馬御風（テンマミカゼ）にはある秘密があった。
風の中にある魔力を組み替え、新たな風を、そして翼を生み出す力『魔法（マテリアルパズル）』。
その力を周囲に隠していた御風は、ある夜見たこともない異形に襲われるとともに、もう一つの『魔法』に出会う。
魔法と魔法がぶつかり合い、少年の否応なしの冒険が今始まる！

滅びた後のプロローグ（前書き）

初投稿です。至らぬ点は多々あるでしょうが、なるべく温かい目で見てやってください。

滅びた後のプロローグ

次元の海に無限の泡沫のごとく浮かぶ世界。
起こっては滅ぶそれらの世界は、時として様々な存在を後に残す。
それは人であったり物であったりするのだが、その中でも特に強力な力を持つ物を、次元のほんの一部に手をかけるある組織は「ロストロギア」と呼んでいる。
ではそれが、形のない、そう「世界の記憶」とも言うべき物ならば、彼らはそれを何と呼ぶのだろうか。

※

一つの世界があった。
大地と共に命が溢れ、文明と共に人が生活する、そこだけ見れば当たり前の世界。
だが、その世界は唐突に滅びた。
全てが無に帰した今では、その世界に何が起こったのか知る者は誰もいない。
虚しく散逸していくその世界は、形ある物を一切残してはいかなかったのだから。
ゆえに、金色の輝きに包まれた一片の羽が「世界の記憶」のひとかけを宿し、虚空の海に消えていった事も、誰にも知られる事はなかった。

※

ある病院の一室は、喜びが満ちていた。
ベッドに横たわる女は、少し疲労した様子であったが幸せそうに。
その傍らにの椅子に腰掛けた男もとても嬉しそうな様子で。

両者の視線が向かう先には、男の腕の中に抱かれた、一人の赤ん坊の姿があった。
つい数時間ほど前に生まれたばかりの、二人の愛の結晶である。
「それにしても病院から連絡を受けたときはびっくりしたよ」
予定していた日よりも１０日も早くの出産であったためどうなる事かと思っていた男だが、母子ともに健康との医者のお墨付きを受けて大きく安堵していた。
「当事者だった私が一番驚いたわ。でも、何となく予感はしてたの」
「どうしてだい？」
苦笑しつつ言った妻の言葉に夫である男は首をかしげた。
「この子が生まれる前の日に夢を見たの」
「夢？」
「そう。眠っている私の上にね、空から金色の羽が一枚落ちて来るの。その羽が私のお腹の中に吸い込まれると同時に、とても温かくて、そして柔らかな風が吹いたの。その後眼が覚めたら何だかお腹がじんわりとしててね、ああ、これは今日あたり生まれるのかなって思った」
「ふ～ん」
母ともなればそのような暗示的な夢も見るのかと、男は感心したように頷いた。
「ねぇ、あなた。この子の名前、もう決めた？」
「いや、まだだよ。もう少し先だと思ってたから、ギリギリまで考えてみるつもりだったからね」
夫の言葉に、女は少し安堵したように笑った。
「じゃあ、私がつけてもいい？あの夢を見たときから、ずっと考えてた名前があるのよ」
そう言いつつ身を起こした女の動きから察した男は、腕の中の赤ん坊を妻に渡しながら尋ねた。
「どんな名前？」
受け取った赤ん坊をあやしながら、女は嬉しそうに答える。

「あのとき感じた温かな風。その風に祝福された子、そしてそんな風のようにやさしくなるような願いを込めて、御風（ミカゼ）。そう名付けたいの」

「御風、御風か…。うん、いいね」

妻のつけた名前を口の中で転がしていた男は、大きく頷いて賛成の意を表した。

「よし、決まりだ。この子は御風、天馬御風（テンマミカゼ）だ」

夫の言葉を満面の笑みと共に受け取った女は、己が胸中の赤ん坊―御風の頬を指で軽くくすぐった。

「これからよろしくね、御風」

赤ん坊はその慈愛のこもった言葉に何を感じるでもなく、ただその小さな口を開けて一つ、欠伸をした。

滅びた後のプロローグ（後書き）

本編が始まる前に一つ言っておきます。
この小説内におきましては、マテパの世界は既に滅んでいるという設定になっております。
ファンの方々、申し訳ありません。

少年と翼（前書き）

随所にマテパっぽさが出ていれば幸いです。

少年と翼

遮光カーテンに遮られ、薄闇漂う部屋。
目を凝らせば、教科書や辞書の詰め込まれた勉強机や漫画の並んだ本棚といった、いかにも子供らしい有り様の内装が見える。
そんな部屋の窓際、子供サイズのベッドに一人の少年が眠っている。
年の頃は9～10歳ほど。顔立ちこそそれなりに整ってはいるものの、それ以外はごく普通の小学生といった様子の少年である。
「…ぜ。…かぜっ。…御風っ！」
どこからか自分を呼ぶ声がする。
その声に導かれるように、少年―御風（ミカゼ）はゆっくり覚醒した。
枕元にある目覚まし時計に手を伸ばせば、そこに表示されている時刻は「午前2時」。
「…空耳…、じゃなきゃお化け…」
ボーっとした声でむにゃむにゃと呟いた御風は、時計を放り出して再び夢の世界へ旅立った。
それから10分後、何者かが走り込んで来る足音と共に御風の部屋の扉がばぁんっと勢いよく開かれた。
「御風っ！いつまで寝てるの!?遅刻するわよ!」
部屋に乗り込んできたのは御風の母であった。
「御風!早く起きなきゃ、本当に遅刻するわよ!」
布団を引っぺがしながらの母の言葉に、御風は寝ぼけ眼を擦りながらもぞもぞと起きあがった。
「…まだ夜中の2時だよ?こんな時間に学校行く奴なんかいないよ…」
大きく欠伸をしながらのたまう御風に、母は遮光カーテンに手をかけ、それをしゃっと払った。
途端、午前2時にはあり得ない強い日の光が御風の目を焼いた。
「うぉっ、まぶしっ!?」

思わぬ刺激に目を押さえる御風に、母は呆れたように嘆息した。
「いい天気ねぇ。こんなお日様の出ている時間のどこが夜中の2時なのかしら？」
その言葉にようやく意識のはっきりした御風は、先程放り投げた時計ではなく携帯電話を手に取り、恐る恐るそれを開いた。
次の瞬間、驚愕と恐慌に塗れた悲鳴が御風の喉から迸った。

※

「いってきますっ！」
あの後、洗顔、歯磨き、朝食をわずか１５分で済ませた御風は、己の通う私立聖祥大附属小学校の制服に身を包み、家を飛び出していた（因みに、件の目覚まし時計は電池切れであったらしい）。
車に気を付けるのよー、という母の言葉を背に走る御風は、本気で焦っていた。
このままではどう頑張ってもバスの時間に間に合わない。
現在の時刻、バス停から今いる位置までの距離、己が体力、様々な条件から導き出したそれが御風の結論であった。
これが普通の人間ならば諦めて先生に怒られる覚悟を固めるところであるが、御風にはまだ何とかできる手段があった。
御風は不意に立ち止まると、あたりをきょろきょろと見回し、人影がないことを確認した。そして、遅刻寸前だというのに人気のない路地裏にその身を滑り込ませた。
そこでも尚辺りを見回し、誰かいないかを確認する。いやに念のいった仕草である。
右を見て左を見て、上に視線を滑らせた時、御風は塀の上に一匹の猫がいることに気がついた。
妙に丸っこい体の、すごく緩い顔をしたその猫はこの距離まで近づいてもまだ逃げようとしない。
しばしその猫と見つめ合っていた御風だが、

「まぁ、お前ならいいか…」
と、猫のことをスルーした。
猫以外に周囲に何物も居ないことを改めて確認した御風は、己の中に眠る【力】を解き放つ。
「魔法（マテリアル・パズル）・エンゼルフェザー！」
その名と共に立ち上がった御風の魔力が、周囲の風を取り込み始めた。
御風の背中に巻き起こった風は、かちゃかちゃと何かを組み上げるような音と共にその形を変えていく。
数秒後、御風の背には光で構成されたかのような一対の白色に輝く翼が生えていた。
これが御風に秘められた力、【魔法（マテリアル・パズル）】、その中でも風を操り、翼を生み出す【エンゼルフェザー】である。

※

幼い頃から、御風の目にはいつも不思議なもの映っていた。
風の中に舞う、光の粒。自身の体から立ち上るもやのようなもの。
ある時、御風は母にこれは何なのだと尋ねたことがあった。
しかし、母はその両者共見えることはなかった。それはほかの者、父であったり、友達であったりも同様であった。
ここにきて御風は、これらの現象は自分にしか認識できないものであるということを理解した。
次に御風がしたことは、それに触れてみるということであった。だが、ただ触るだけでは光の粒ももやのようなものも空しくすり抜けるだけであった。
考えた御風は、この二つが同じようなものであると仮定して、もやをまとったまま光の粒に触れてみた。
すると、光の粒は吸い込まれるようにもやと混じり合い、かちゃかちゃと音を立てその姿を変えていったのである。

これに驚いた御風は手の中で形を変えるそれを近くにあった石ころに擦り付けて消そうとした。
それが功を奏したのか、手の中のそれは果たして石に移り、数秒後、その石を包み込むように羽となって顕れた。
その有様を見た瞬間、御風の中に唐突のそれの正体が浮かび上がってきた。
「マテリアル…パズル…」
マテリアル・パズル―あらゆる存在に宿る【魔力（マテリアル・パワー）】をパズルのように分解／再構築することで別のエネルギーを作り出し、この世に新たな法則を生み出す力。これを【マテリアル・パズル】と呼び、【マテリアル・パズル】を操る者を【魔法使い】と呼ぶ。
なぜそのような知識が己の中にあるのか、当時の御風は全く疑問に思わなかった。そのことは、自分にとってごく当たり前のようになぜか思えたからである。
【魔法（マテリアル・パズル）】を知った御風は、最後にこの力をどうするかを考えた。
本音を言えば、両親や友達に自慢したい気持ちもあった。しかし、その当時の年齢にしては聡明（漫画や、母に読み聞かせてもらった童話などの知識）であった御風は、このような力を不用意に見せつければ、周囲に恐れられてしまうのではと思った。
大好きな両親や仲のいい友達からそんな態度を取られたらと考えただけで、御風は血の冷えるような気持ちになった。
故に御風がこの力を周りから隠し通そうという結論に至ったのは、当然の流れであった。
それでも、まぁ、隠れてこっそりと練習し、力の把握に努めたりもしたのだが。
そして現在、御風は己の【魔法】を完全にものにしていた。

※

己の生み出した羽をニ、三度羽ばたかせた御風は、その構成に何の

問題もないことを確認していた。
使い始めたばかりの頃は、十分な魔力を込められていなかったのか、羽がいきなり飛び散ったりと危ない目にもあったのである。
余談であるが、別に魔法は呪文のようにその名前を呼ぶ必要はない。ただ、御風の場合ちゃんと口に出したほうが【魔法】の構成がしっかりする気がするのでそうしているだけである。
「よーし、行くぞぉっ！」
気合い一発、御風は大きく跳躍すると同時に背中の羽を羽ばたかせる。ばさりばさりと音を立てる翼は、御風の体をあっという間に空へ舞いあげた。
その様子を、ただ猫だけが相変わらずの緩い顔で見送っていた。
猫を後にした御風は、一直線にバス停の方角へ飛んだ。それなりに高い位置で飛んでいるせいか、誰かに見つかるようなことはない。よしんば見つかったところで、人間が飛んでいるなどと思わないであろう者ならば、大きめの鳥か何かだと勘違いしてくれるはずである。
御風は空を飛ぶのが好きだ。重力の頸木を離れて舞うこの感覚は、正に自由そのものである。
このままずっと飛んでいたい気分ではあるがそうもいかない。御風はバス停を視認すると同時にその近くにある公園に降り立った。もちろん、周囲に誰も居ないことは確認済みである。ここからならば、バス停まで歩いてほんの数分で着く。携帯電話の時刻を確認した御風は、まだ時間に余裕があることを知り、ほっと一息ついた。
しばらくのち、何食わぬ顔でバスに乗り込んだ御風は、今日は一体何をして遊ぼうか、と小学生らしい思考に没頭した。
この世界にただ一人の【魔法使い】、天馬御風の何気ない日常は、こうして今日も平和に幕を開ける。

少年と翼（後書き）

本編開幕です。
タイトルなどから分かって下さる方もいらしたでしょうが、主人公「御風」の使う【魔法】は【エンゼルフェザー】となりました。
御風少年の容姿に関してですが、ゼロクロイツのベルジを幼くしたものを想像していただけるとわかりやすいです。
次回はついに御風が異世界の【魔法】と出会います。当然どこぞのフェレットと幼き白い魔王様も登場します。

【魔法】と【魔法】（前書き）

無印開始です。

【魔法】と【魔法】

夜。

一日を無事に過ごした御風は、自室の勉強机にて宿題に挑んでいた。

時折悩みながらカリカリと手を進めるその姿は、風と翼を操る【魔法使い】と思えぬ、いかにも小学生らしいものであった。

「…ん？」

シャープペンシルの中身を交換しようとした御風は、筆箱の中にある芯のケースが空であることに気付いた。

「どうするかね」

別に鉛筆が無い訳でもないし、もう少しで宿題も終わる。だが、御風はこれを口実に夜の街を散歩してみたい気になった。

いつもどうりの一日の締めに、本の少し刺激が欲しくなったのである。

思い立てば吉日。御風は上着を手にすると、母に外出と目的を告げた。

「大丈夫？もう、真っ暗よ？」

心配そうに言う母に、御風は笑って首を振る。

「大丈夫だって。コンビニはすぐそこだし、なるべく明るい場所を通って行くしね」

（それにいざとなれば【魔法】もあるし）

胸中でこっそりそう呟いた御風は、いまだ渋る母を置いて、夜の海鳴へ繰り出した。

※

「あじゃじゃしたー」

おざなり極まりないバイト店員の声を背に、御風はコンビニを出た。

その手の袋の中にはシャープペンシルの芯以外に、アイスの袋が３

つ（自分・父・母の分）が入っている。
「ま、こんなもんだろうねー…」
当然ながら、道中特に目立ったことはなく、御風はほんの少しがっかりした気分をため息とともに吐き出した。
市街地ならともかく、閑静な住宅街であるこのあたりには、こんな遅い時間帯を歩いているような人影は御風以外にいない。
取り残されたかのような静けさの中、御風は天を仰ぎ見ながら思い耽っていた。
当たり前の日常。
これからも続いていくであろう平和な日々。
そのことに不満はない。ただ。
「なーんか、退屈。なんだよなぁ…」
退屈を吹き飛ばす非日常はココにある。しかし、それを人に晒すことはできない。
己に課した枷が蝕むジレンマは、少年にほんの少しだけ、訳もわからぬ焦燥感を与えていた。
そんなうっ屈した思いを意地悪な神が叶えてくれたのか、御風の人生を揺るがす福音の鐘が、鈍い轟音という形を取って響き渡った。
…ごぉんっ…。
「…なんだ？」
静寂の元、やけに大きく聞こえたその音に御風は思わず足を止めた。
（あっちには確か、動物病院ぐらいしか目立った建物はないはずなんだが）
己の境遇に僅かな不満を抱きつつあった御風が、何かありうるであろうそちらの方向に足を向けたのは無理からぬことであった。
（行ってみよう）
そう思って、御風は音のした方へ歩き出した。

※

高町なのはは走っていた。今まで生きてきた中でも、一番頑張って走っていたかもしれない。
それはそうだろう、なのはの背後には［黒いナニカ］としか表現できないものが迫って来ているのだから。
「何!?何なの!?あの化け物!?あれは一体何なの!?」
なのはは息を切らせながら、己の腕の中にいるフェレットに尋ねた。
このフェレットは、なのはが今日の夕刻に傷だらけで倒れていたの助けたものである。
その夜、なのはは突如頭の中に響いた助けを求める声に従ってこっそりと家を抜け出し、声のする方向に走って行った。
声の発信源に到着すると、そこはフェレットを預けた動物病院が有った所だった。なぜ過去形なのかというと、そこに在るべき病院は廃墟と呼ぶにふさわしい瓦礫の山になっていたからだ。
「…一体何が起きているの?」
茫然と辺りを見回していたなのはは、そこに昼間助けたフェレットが倒れているのを見た。
慌ててフェレットの傍まで近づき、抱きかかえると、
「…ありがとう。来てくれたんだね…」
突然フェレットが話し始めた。
そのことに驚くなのはだったが、追い打ちをかけるように廃墟と化した病院の壁がいきなり砕け散り、中から［黒いナニカ］が現れた。
そして、今に至る。
「僕の名前はユーノ・スクライア。いきなりで申し訳ない。でも貴女には資質が有る。お願いです、力を貸して下さい!」
なのはの質問には答えず、フェレット―ユーノは言葉を紡ぐ。
「し、資質って?」
「僕はある探し物の為に、ここではない世界から来たんです。でも、この探し物は僕一人の力では、想いを遂げられないかもしれない」
ユーノの真剣な口調に、なのはは足を動かしながら黙って話を聞く。
「お礼はします。必ずします。ですから、僕の持っている力を、【

魔法】の力を、貴女に使って欲しいんです！」
「【魔法】？きゃあっ！？」
どかっ！。
聴き慣れぬ単語に思わず聞き返した瞬間、なのはは角を曲がってきた何者かと派手にぶつかり思いきり尻餅をついた。
「いったぁ～…」
思わず涙目になるなのはだが、それでもユーノ落とさなかったのは見上げたものである。
一方、ぶつかられた方も吹き飛ばされた拍子にどこか打ったのか、その場に蹲り苦悶の声を上げていた。どうやら、自分と同じくらいの年頃の少年の様である。
「ご、ごめんなさいっ。…って、に、逃げてー！！」
少年を助け起こそうとしたその時、なのはは己の置かれていた状況を思い出し、焦燥に満ちた声を上げた。

※

どかっ！。
音のする方へ向かっていた御風は、角を曲がった瞬間猛然と走ってきた何者かに体当たりでわき腹を痛打されて吹き飛んだ。
「んぐぉぉぉぉ…！！」
不意の衝撃に肺の中の空気は吐き出され、御風は軽い呼吸困難に見舞われながら凄まじく痛むわき腹を押さえて蹲った。
「ご、ごめんなさいっ。…って、に、逃げてー！」
その焦りまくった声に顔を上げると、そこには何か小動物を抱えた御風と同い年くらいの少女が立っていた。
栗色の髪をツインテールにした、なかなかの美少女である。
だが、御風はそんな少女の可愛らしい容姿を把握する前に、その背後に迫る［黒いナニカ］に目が釘付けになった。
「な、なんじゃありゃーっ！？」

どこぞのジーパン刑事の真っ青な声量で叫んだ御風は、慌てて起きあがって目の前にいる少女の手を取って逃げ出した。
「うひゃあっ!?じ、自分で走ります!大丈夫ですからー!」
いきなり引っ張られて驚いたのだろう、少女はつんのめり掛けた体のバランスを取って走り始めた。
少女から手を離した御風は、背後に迫る驚異の正体を少女に尋ねた。
「ありゃ、一体なんだ!?新種の生物か!?どこかの研究所から逃げ出した実験体か!?」
「そ、それを今から聞く所だったの!」
並走する少女は息も切れ切れに答えてくれた。
「聞くって…、誰に!?」
「え、えーと、この子に…」
そう言って少女が差し出したのは、その腕の中にいた小動物。
「は、はじめまして…」
絶句した御風の鼻先で、件の小動物が片手を挙げて挨拶してきた。
「…なんじゃそりゃーっ!?」
御風の声が再びあたりに響き渡った。
「と、とにかく!貴女の力を貸してください!」
フェレットが混乱に満ちた場を制するかのような大きな声で叫ぶ。
「そ、その【魔法】の力があれば、あれを何とかできるの?」
「【魔法】?」
御風にとって決して無視できない単語に、思わず聞き返した。
「あんた、【魔法】が使えるのか?」
「え、いや、その…」
思わず鋭くなった御風の言葉に、少女は口ごもってしまった。
「この人はまだ【魔法】は使えません。僕がこれからその術を渡します」
少女を慮ってか、小動物の方が答えてきた。
(今は使えねぇってのはどういうことだ?俺の使う【魔法(マテリアル・パズル)】とは違うのか?)

困惑するする御風を余所に、少女と小動物の話は進んでいく。
「わかった。じゃあ私は何をすればいいの？」
「これを！」
小動物は首に掛けられていた赤いビー玉を、少女に見せるように掲げる。
「何か温かい…。これは？」
「インテリジェントデバイス。魔法を使うための杖です」
「これが……？」
杖と言われても、それはただの赤いビー玉にしか見えない。
「今は待機モードの状態なんです。ですから、貴女の力で目覚めさせて下さい」
「え、どうやって？」
そこまで着た瞬間、御風は後方の化け物が大きく跳躍するのを感じた。
「おいっ！来るぞ！！」
「えっ！？」
跳躍した化け物はそのまま御風と少女を飛び越え、その眼前に躍り出た。
「ちっ…。回り込まれたか…」
「ど、どうしよう」
苦々しく顔を歪める御風の横で、少女がおろおろとうろたえている。
「おい、そこの小動物」
「へ？ぼ、僕ですか？」
「いや、他にいねぇだろ」
御風は眼前の化け物から目を離さず、
「お前とこの子がなにかすりゃ、この化け物をどうにかできるんだな？」
「は、はい…。でも…」
そのような時間を目の前に化け物が与えてくれるだろうか？爛々と好戦的に輝く赤い両眼を見る限り、望みは薄そうだ。

「…わかった。その時間、おれが稼いでやる」
「えぇっ!?」
「無茶ですっ!ただの人間があれをどうにかしようなんて!」
驚きの声を上げる少女と慌てて止める小動物。両者を尻目に、御風は己の【魔法】を開放する。
「何、心配するなよ。こっちもただの人間のつもりはねぇよ」
立ち上る魔力が周囲の風を取り込み、かちゃかちゃと音を立てて御風の背中に集まり始める。
「【魔法(マテリアル・パズル)】、エンゼルフェザー!」
高らかに紡がれる名前と共に、御風の背中に一対の光輝く翼が出現する。
「なっ!?」
驚愕に固まる小動物。そしてその横でやはり驚きに眼を見開く少女の口から思わず言葉が漏れた。
「…天使?」
「いや、違うな」
その魂が抜けたかのような声に、御風は不敵な笑みで応えた。
「俺は、【魔法使い】だ!」

【魔法】と【魔法】（後書き）

なのはとの初邂逅の話でした。
本格的な戦闘はまた次回。

風の翼と不屈の勇気（前書き）

御風にとって初の戦闘ですが、いろんな技を修行で開発しています。

風の翼と不屈の勇気

ユーノ・スクライアは目の前で起こった状況に驚愕していた。
成り行きで刹那の行動を共にした少年には、魔力の源である「リンカーコア」は存在していなかったはずである。
にも拘らず、少年は魔力を操り、見たこともない魔法を行使している。
（この世界独自の魔法!?それにしてもデバイスはおろかリンカーコアもいらない魔法なんて聞いたこともないぞ!?）
刻々と変化してゆく事態に比例するかのように、ユーノの混乱もその度合いを深めていった。
高町なのはは目の前の少年に目を奪われていた。
その背中に輝く純白の羽。その姿に思わずこぼれ出た言葉を不敵に笑って否定した少年は、己を【魔法使い】と嘯いた。
平凡な小学生だったはずの自分に、突如巻き起こった異常な事態。
刻々と変化してゆく事態を、今現在のなのはは目を逸らさずにいることしかできなかった。

※

後ろの一人と一匹が茫然としているのが御風にはわかった。
まぁ黒い怪物に続いて、偶然出会った少年の背中から羽が生えれば、そうなるのも無理はないだろう。
だが目の前の状況が状況である。いつまでも両者を呆けさせておくつもりは御風にはなかった。
「何ボーっとしてんだ!なにかするなら早くしろ!」
御風の叱咤の声に、少女と小動物はようやく我に帰ったようである。
慌てて両者が先程の続きを始めるのを尻目に、御風は怪物に向き直った。

「わりぃな。少し相手して貰うぜ」
黒い怪物は、不敵な表情でそう言い放った、目の前の生意気な子供を唸りと共に睨みつけた。
しかし、当の子どもに怯えた様子はない。
その巨体に溢れる凶暴な性質を大いに刺激された怪物は、雄叫びを上げて少年に躍りかかった。
「甘い」
しかし、哀れな犠牲者を押し潰さんとしたその巨体は、御風の目の前にぎゃろんっ！と巻き起こった強風の壁に遮られ届くことはなかった。
風の壁を破らんと圧力をかける怪物だが、逆のその体が巻き起こる風に押されじりじりと後退していく。
「せー、のっと！」
御風の気合いの声と共にさらに勢いを上げた旋風が、怪物の体を弾き飛ばした。
地響きを立てて落下した怪物だが、すぐに何事もなかったかのように起きあがり、牙をむき出して御風を威嚇した。
「生半可な攻撃じゃびくともしない、か」
ノーダメージな怪物の様子に、御風は眉をしかめた。
どうするかと思案する御風の目に、何やらぐっと力を込める怪物の様子が映った。
何を、と思う間もなく、次の瞬間、怪物の体から無数の触手がびゅぅっと空気を切り裂き、矢のように御風に向かって迸った。
「ぅおぉっ！？」
思わぬ反撃に、御風はとっさに背中の翼を羽ばたかせ、空中へ逃れた。
だが、触手はその御風を追って空へと伸びる。その姿はまるで蛇の様である。
「なめんなっ！」
御風は周囲の風を瞬時に変換、鋭利なかまいたちを生み出して触手

の群れを切り払った。
「体当たりだけが能じゃないのか」
見下ろす御風と、見上げる怪物。御風の目にはこちらを見る怪物の視線に嘲弄が混じったように感じた。
「…上等！」
御風はぴきりと額に青筋を浮かべると、己の掌に風を集め始めた。唸りを上げる豪風が、どんどんと勢いよく圧縮されてゆき、やがてそれは光の球とも見紛うべき物へ変化した。
「ほらよ」
御風はその風の塊を無造作に怪物に向かって放り投げた。
勢いも何もない、見た目はただの球であるそれに何の脅威も感じなかったのか、怪物は避ける素振りもせずそれを受け、
どごんっ！！
突如発生した凄まじい負荷に、怪物はその巨体を地面にめり込ませた。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『大圧縮球（ツザンメン・ドリュッケン）』」
ずぶりずぶりと怪物の不定形の体にめり込んでいく球を見届けていた御風は、それが完全に埋没したのを見計らい、己の魔法を解除した。
次の瞬間、
ばおぉぉぉぉぉぉっ！！！！！
体内で解放された風が暴発し、怪物の体がその巨体の数倍以上に膨張した。内部で荒れ狂う風に体を破裂させまいと、怪物は必死に己の体の維持に努める。
「頑張ってんな。でも、幕だ」
御風は指をピンっと弾くとその先から先程の物とは比べるべくもない、小さなかまいたちを怪物に放った。
それが怪物の体を僅かに切り裂いた刹那、
どごぉぉぉぉぉぉぉぉんっ！！！！！！！！！
爆弾でも爆発したかのような轟音と共に、怪物の体は割れた風船の

ごとく散り散りに爆ぜた。
後に残ったのは、怪物の核なのか青く輝く小さな石だけである。
「（あの石、とんでもない魔力を感じる。）…って、おい、うそだろ？」
御風は己の目を疑った。驚くべきことに、粉々に散ったはずの怪物の黒い肉片が、青い石を目指して集まり始めたのである。
（このまま放って置いたら確実に復活するな。どうする？あの石をぶっ壊してみるか！？）
その時、思わぬ事態に悩む御風の背後で、桃色の光の柱が立ち上がった。
「な、何だぁ！？」
驚いて振り向いた御風の目に飛び込んできたのは、自分の通う小学校の女子の制服によく似た服をまとい、長い杖を持った栗色の髪の少女であった。
それを見た御風の口から、先程の少女のように思わず言葉が漏れた。
「…魔法少女？」
「そ、そうみたいなの…」
御風の言葉を聞きつけた少女は己の姿に困惑しながらコクコクと頷いた。

※

怪物を少年に任せたユーノとなのはは、渡されたデバイス――レイジングハートを起動させようとしていた。
「目を閉じて、心を澄ませて、僕の後に続いて唱えてください」
「あ、うん」
ユーノに促され、なのはは目を閉じる。
「我、使命を受けし者なり」
「…わ、我、使命を受けし者なり」
少しどもりながらも、なのはは答える。

「契約の下、その力を解き放て」
「契約の下、その力を解き放て」
ドクン、と手に持つ赤い宝玉が、脈打ったかのようになのはは感じた。
「風は空に、星は天に」
「風は空に、星は天に」
唱えていると、手の中の宝玉はドンドンと熱を帯びていく。
火傷しそうな熱さを感じながらも、なのははそれを手放すことができなかった。
何故ならば、それと同時に、手の中の熱と同種の熱が、身体の奥底から湧き上がるのを感じたからである。
「「そして、不屈の心は」」
いつの間にか、なのははユーノの言葉に追いついていた。
聞かずとも、自然と、何を言えばいいのかが分かる。抑えられぬ衝動のまま、なのはは詠唱の最後を口にした。
「「この胸に！！」」
「この手に魔法を！レイジングハート！セットアップ！！」
『スタンバイ・レディ、セットアップ』
唱え終わると同時に、柔らかな女性の声が宝玉から響く。そして桃色の光が天へ向かって迸った。
その様はまるで光の柱のように見えた。
「凄い……。なんて魔力だ……」
ユーノは予想以上のなのはの魔力に驚いていた。そしてなのはは自分の様子に焦る。
「えっ！？こ、これ、どうすればいいの！？」
その言葉にユーノはハッとして、なのはに声を掛ける。
「落ち着いて下さい！　それは貴女の魔力です。落ち着いて、イメージして下さい」
「イメージって何を！？」
自分の身体に起こる異変のせいで、なのははもういっぱいいっぱい

であった。
「貴女の魔法を制御する、魔法の杖の姿を。そして、貴女の身を守る、強い衣服の姿を！」
「つ、強い衣服って…」
「なんでもいいんです！後で変更出来ますから！貴女が馴染みのある格好で構いませんから！」
「そんな、急に言われても…。えっと、え～っと…」
その時、なのはの脳裏にいつも自分が来ている小学校の制服が浮かんだ。
「と、とりあえずこれで！」
なのはがそう言った瞬間、手の中の宝玉が輝く。
なのはの身体が光に包まれ、次の瞬間には姿が変わっていた。
所々意匠は変わっているが、白と青で構成された、胸元の赤いリボンタイがチャームポイントの己の小学校の制服に酷似した服へと。
そして手にしていた赤い宝玉は、桜色の柄の先端に金色のパーツ、そしてそこに宝玉が納まるという長い杖へと。
「な、何なのこれ～！？」
杖―レイジングハートを手にしたなのはが、自分の姿に驚きの声を上げた瞬間、先程まで怪物と戦っていた少年がいつの間にかこちらを振り返り、なのはとばっちり目が合ってしまった。
「…魔法少女？」
ぽろりと漏れた言葉に、
「そ、そうみたいなの…」
今だ事態を把握できないなのはは、
（やっぱりそう見えるよね…）
とその部分だけ把握して頷いていた。

※

しばし間抜けた感じで見つめ合うなのはと少年。だが、ユーノはそ

んな状況をとりあえず置いておいて、
「彼のおかげ今ジュエルシードは剥き出しの状態です。今の内に封印を！」
いまだ宙に浮かんで青く輝く石を指し、なのはを促した。
「ふ、封印！？って、どうすればいいの！？」
「さっきみたいに、心を澄ませてください。心の中に、あなたの呪文が浮かぶはずです！」
「う、うん…」
なのはは再び目を閉じた。周囲の音が消え、心の中へ深く潜っていくような、そんな不思議な感覚をなのはは覚えた。
そして、なのはの心に言葉が浮かび上がる。
それに導かれるまま、なのはは杖を青い石に向けた。
「リリカル・マジカル！封印すべきは忌まわしき器、ジュエル・シード！」
杖の先端が桜色に輝く。
「ジュエル・シード封印！」
『シーリングモードセットアップ』
杖から現れた、幾筋もの光が青い石に絡みつく。
『スタン・バイ・レディ』
「リリカル・マジカル…ジュエル・シード・シリアル２１、封印！」
『封印！』
杖から更に溢れた光がジュエルシードを包み込む。その途端、ジュエルシードから放出されていた凄まじい魔力が一気に霧散する。
「レイジングハートでジュエルシードに触れて下さい」
ユーノの声に従って、なのはレイジングハートの先端でジュエルシードに触れる。
すると、ジュエルシードは音もなくレイジングハートの宝玉部に吸い込まれていった。
『シリアルＮｏ．２１封印完了』
レジングハートがそう告げた瞬間、なのはは元着ていた服に戻り、

レイジングハートも最初の赤い宝玉の形態に戻った。
「これで……おわったの？」
「うん……ありがとう」
ユーノが弱弱しく礼を告げる。どうやら、体力、気力的に底値にいるらしい。
「それが、お前らの【魔法】か…。俺以外でそんなの見たの、生まれて初めてだぜ」
「「あ…」」
その声に、なのはとユーノはようやく少年の事を思い出した。
興味深げにこちらを見る少年。
未知の魔法の使い手に、わずかな警戒心と困惑を見せるユーノ。
そしてなのはは、今だ終わらぬ夜に、本の少しため息をついた。

風の翼と不屈の勇気（後書き）

疾走感のある戦闘シーンが書きたかったのに…ｏｒｚ。
何かやたらと擬音の多い戦闘になってしまった。
今回御風が使った、『大圧縮球（ツザンメン・ドリュッケン）』はマテパのリュシカが使った『クリームパン』と同種の魔法です。多少の違いはありますが。
次回はようやくそれぞれが自己紹介します。

自己紹介と夢の樹の残滓（前書き）

前回、暴走体一号を少し強めに書いてみましたがどうだったでしょうか？
他のリリカルＳＳ内ではほんの2、3行でやられてしまう彼が不憫なだけだったんです。

自己紹介と夢の樹の残滓

破壊の痕跡の残る場で見つめ合う三人。
一人は少年、天馬御風。
一人は少女、高町なのは。
そして最後のひと…、もとい、一匹、ユーノ・スクライア。
【魔法】という特殊な事情に関わる三名は、それぞれがその素性を知らぬ故、何を話してよいものかと、微妙な緊張感と気まずさを含んだ空間を形成していた。
「あの…、先程はありがとうございました」
それを破って最初に口を開いたのはユーノ・スクライアであった。
彼はその小さな頭をぴょこんと下げ、御風に礼を述べてきた。
「もしあなたの助力が無ければ、こうも簡単にジュエルシードを封印する事はできなったはずです」
「あ、いや、それは別にいいよ。俺もやばい状況だったし。それよりもちょっと聞きたいんだけど…」
まっすぐな感謝の言葉が照れくさかったのか、少しぶっきらぼうな態度をとる御風だったが、すぐに目の前の小動物に聞きたかった事があるのを思い出し問うてみた。
「?はい、なんでしょう?」
「え～っと、その姿はフェレット、かな?何でフェレットが喋ってんだ?」
「あ、それ私も聞きたい」
それまで口を挟めなかったなのはが手を上げて自己主張した。
「あれ?あなたと会った時って、僕もうこの姿でしたか?」
ユーノはなのはを振り返り首を傾げた。
「うん、そうだよ。傷だらけで倒れてたところを、私と友達三人で助けたの」
「そういえば、あの時わざわざ病院にまで連れていってくれて、あ

りがとうございました。おかげで、残った魔力で傷の治療に専念することができました」
今度はなのはに頭を下げるユーノ。その姿を内心でかわいい、と思いつつ、なのははいいよいいよと手を振った。
「話が先に進まねぇ。それより、どっかに移動しねぇか？ここに長居するのはまずい気がするんだけど」
「「え」」
御風の言葉に、なのはとユーノは辺りを見回す。
怪物が暴れ回った跡、御風の魔法で傷ついたところなど、誰かに見られたら下手な言い訳ができない光景が目の前に広がっていた
「ど、どうしよう！」
「いや、逃げるしかねぇだろ。俺は物を直す魔法なんて使えねぇ」
そっちは？と目で促した御風に、なのはとユーノは揃って首を横に振る。
「ならとっととずらかろう」
御風は二人にそう告げると、背中を向けてその場から逃げ出した。
そんな御風の背中におろおろしていたなのはの耳に、遠くから聞こえるパトカーや消防車等のサイレンが届いた。
「と、とりあえず、ごめんなさ～い！」
誰に謝っているのか、なのはは少し泣きそうになりながらユーノを抱えて御風の後を追った。

※

その場を離れた御風達は、少し離れたところにある公園のベンチに腰をおろしていた。
息を整えていた御風は、二人が落ち着いてきた頃を見計らって、
「それで、さっきの続き何だが――」
「その前に、自己紹介しない？私たち、お互いの名前も知らないんだよ？」

確かに、この中でかろうじてなのはがユーノの名前を知っているが、御風の名前は知らない。
御風も二人の名前など知らない。
ユーノも、自身は名乗った割には、なのはの名前は知らないし、当然御風の事も知らない。
「じゃあ、俺から。俺は御風、天馬御風だ」
御風が名乗るとなのはも笑顔で自己紹介する。
「私、高町なのは。なのはでいいよ」
「なら、俺も御風でいい。んで、最後が…」
御風がちろりとフェレットに目をやると、
「僕はユーノ・スクライアといいます。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です。それで、先程の質問なんですが…」
「あー…、それ何だが、たぶん長くなるよな？」
御風の質問に答えようとしたユーノを、御風自身が手で制した。
「あ、はい。僕の事情もそうですけど、あなたの事も聞きたいんで…」
ユーノは御風の使う【魔法（マテリアル・パズル）】の正体を知りたいと思っていた。
リンカーコアを用いない魔法というのは、ユーノの知的好奇心を大いに刺激するものの様であった。
「その辺の事も含めて、また後日って訳にはいかないか？家の人間にすぐ戻るって出てきてるんだ。あんまり遅くなると余計な心配をさせちまう」
御風でそういうと、なのはも恐る恐るといった様子で追従する。
「わ、私も、こっそり家を出てきてるから、ばれない内に戻らなくちゃいけないの」
「じゃ、じゃあどうすれば…」
二人の言葉に困惑するユーノに、御風は軽く答えた。
「何、簡単な事だ。高町「なのは、だよ」…なのは、ユーノはお前が預かれ。そんでもって、今晩の内に詳しい話を聞いておくんだ。それを明日俺に話してくれりゃあいい。俺の話もその時に一緒にす

る」
「明日って、どこかで待ち合わせでもするの？」
首をかしげるなのはに、御風は鼻を鳴らして、
「何言ってんだ。あの妙な服「あ、あれはバリアジャケットと言いまして、魔導師の防護服なんです」…バリアジャケットからして、なのはも聖祥だろ？」
「う、うん。そうだけど、もしかして御風くんも聖祥なの！？」
驚き、眼をまん丸にするなのは。
「おお。俺は3年3組だ。なのはは？」
「私は3年1組！わ～、御風くんが同じ学校だったなんて全然知らなかったよ～」
「いや、ついさっきまで名前も知らない他人同士だったろうが」
どこか抜けた事を言うなのはに、御風は丁寧に突っ込んだ。
「まぁ、そういう訳だが、ユーノは構わないか？」
置いてけぼりにされていたユーノに御風が水を向けると、ユーノは慌てたように頷いた。
「ぼ、僕は全然構いませんけど、なのはさんが…」
「なのは、でいいってば。ウチなら大丈夫。ユーノくんも今日は疲れてるだろうし、ゆっくり休んでね」
「ここは好意に甘えておけ。それに、なのはも自分が使った魔法の事とか、ユーノに聞きたい事は俺以上にあるだろう？」
御風の言葉になのははこくりと頷いた。
魔法の事、ジュエルシードの事、レイジングハートの事等、聞きたい事はいくらでもある。
先程はゆっくり休めと言ったなのはだが、これら全てを説明させるとなるととてもじゃないがユーノがゆっくり等できない事にまだ気付いてなかった。
「よし、話は決まったな。じゃ、明日学校でな」
御風はそう言って立ち上がり、その場を後にしようとした。
「あ、御風くん！」

踵を返そうとした刹那、なのはが御風の名を呼ぶ。
「ん？なんだ？」
振り返った御風の視線の先で、なのはがにっこり微笑み、
「今日は、助けてくれてありがとう！」
その笑顔にちょっと顔を赤くした御風は、それを隠すかの様に背を向けて、
「ま、気にすんな」
ひらひらと手を振ってそのまま去って行った。
その背中を、なのははしばらくの間見送っていた。

※

帰り道。
「しかし、これどうすっかねぇ…」
情けない表情で呟いた御風の手の中で、すっかり溶けてたぷたぷとした感触を伝えるアイスの袋があった。
最後まで締まらない御風であった。

※

その夜、ベッドに潜り込んだ御風は強い興奮状態のせいで中々寝付けなかった。
その中で強く感じるのは二つ。
（初めて、全力で魔法を使って戦った）
今まで、御風は己の力を決して周囲に漏らさないという枷を自ら嵌めていた。そのため、人目を忍んで行っていた魔法の修練もまた、派手な事が出来ずジレンマを感じていたのである。
だが、先の戦いにおいて全力で力を振るった事で、大きな充足感を得ていたのである。
（なんか、やばい人みたい。いかんいかん、自重しないと）

一歩間違えればバトルジャンキーの様な物騒な思考に陥り掛けていた事を察して、御風は無理矢理その思考を払った。
（それに）
脳裏に浮かぶのは二人の姿。
喋るフェレット、ユーノ・スクライア。
種類が違うものの、自分同様魔法を使う少女、高町なのは。
（誰かに自分の【魔法（マテリアル・パズル）】を見せたのも、初めてだった）
人に話せぬ、見せる事も出来ぬジレンマ。
その二つが今日だけで解消されていた。
（明日、どんな話が聞けるんだろうな…）
少しわくわくしながら、御風はゆっくりと眠りに落ちて行った。

※

「またこの夢か」
御風は今、己の夢の世界に立っていた。
なぜその場所が夢である事が分かるのか、それは御風にもうまく説明できない。
ただ初めて見た時から、夢だ、と思ったのである。
そこは何もない真っ白な地平線が続く世界の中で、ただ一本の天まで届くような高さの樹が立っているだけの、何とも寂しい風景である。
加えて、その樹も幻のごとく儚い、霞のように揺らいだものであった。
普段ならば、この幻想的な風景にただ佇むだけで夢は終わるのだが、今日に限ってはいつもと様子が違った。
「あ…」
樹の枝の一本に、誰かが座っているのが見えた。そして、その人物がこちらを見つめているであろう事も。
「自分以外で【魔法】を使う人を観た感想はどうだい？」

おそらくは男性、自分よりも少し年上だろうか。
そのような曖昧な表現しかできないのも、その人影がやはり巨大樹同様、儚く、朧な存在だったからである。
「びっくりした。こんなにびっくりしたのは、初めて魔法を使った時以来だな」
御風は人影を初めて目にしたにもかかわらず、当たり前の様に受け答えをしていた。
「そうだろうね。あんな魔法は俺たちも見た事はなかった」
人影はどうやら笑った様であった。
「なぁ、あんた一体誰なんだ？俺はあんたを初めて見たはずなのに、何故か知っているような気がするんだ」
御風の問い掛けに、人影は軽く肩をすくめた。
「俺たちの事はどうだっていいさ。所詮、『終わってしまった世界』の元住人が、無様に記憶の残滓にしがみついてるだけなんだから」
「何言ってんのかさっぱりわからねぇ」
容赦なくバッサリ切った御風に人影は肩を震わせて笑い始めた。
「くっくっくっく…。いいね、元気に大きくなっているようだ」
久しぶりにあった親戚の様な言葉に、御風はますます人影の正体が分からなくなった。
「言ったろ、俺たちの事なんて気にしなくていいんだ。俺たちは、君が元気に大きく育っているの見るだけで、十分なんだよ」
「はぁ？」
既に御風の頭の中ははてな一色だ。
「さて、そろそろ目覚める時間だ。元気に育つんだ、俺たちの――『終わってしまった世界』の記憶のかけらを受け継ぐ、唯一の子」
「あんた、一体…」
疑問の声を上げる御風の前で、夢の世界が薄れていく。樹の上の人影もだんだんと霞んでいく。
「頑張れ、御風」
その声を最後に、御風の意識は覚醒した。

※

「…夢、か」

かなり遅めの就寝になったにも拘らず、御風は少しの眠気も見せずに起き上った。

御風があの夢を初めて見たのは、【魔法（マテリアル・パズル）】を初めて使った時である。以来、ひと月に一回ぐらいの割合であの夢を見ている。

「誰か出てきたのは初めてだな」

御風はあの儚い人影を思い出していた。

こうして改めて考えても、やはりあのような人物に心当たりはない。ないはずなのだが、

「なんか、懐かしいような気がするんだよな」

あれは一体、誰なんだろう、と再び思案する御風の横で、5分遅れで目覚ましが鳴る。

そろそろ、学校へ行く時間である。

「ま、いいか。あの人（？）も気にしなくていいって言ってたし」

御風は頭を振って夢の事を忘れた。

さぁ、気持ちを切り替えよう。今日は、彼らの話を聞けるのだから。

昨夜眠る直前に感じたわくわくを蘇らせた御風は、勢いよくベッドから抜け出した。

自己紹介と夢の樹の残滓（後書き）

夢の樹の人物は特定しません。彼はこれからも偶に御風の夢に出てきます。

次回は状況説明編＆ＶＳ犬。

信じられるかい？もう５話だってのに、まだ原作２話の真ん中ぐらいなんだぜ。

ジュエルシードとマテリアル・パズル（前書き）

初めに謝罪します。
ＶＳ犬まで行けなかったぁぁぁぁ！ｏｒｚ

ジュエルシードとマテリアル・パズル

翌朝、携帯電話のアラームで目覚めた高町なのはが最初にした事は、昨晩から同じ部屋で過ごす事になったユーノ・スクライアへ朝の挨拶をする事であった。

「おはよう、ユーノくん」

「あ、その、おはよう」

ユーノはまだ少し戸惑いながらも、なのはに挨拶を返した。

「とりあえず、昨日はお疲れ様」

「あ、うん、こちらこそ」

あの後、帰宅したなのはとユーノを待ち受けていたのは、なのはの兄、高町恭也のお説教とユーノを巡る家族のドタバタであった。その件もあって、昨日は結局詳しい話を聞く事が出来なかったのである。

「御風くんに謝らないとね。ユーノくんのお話、聞く事ができなかったし」

昨夜の少年と交わした約束を果たせないと思ったなのはが残念そうに言う。

「そうだね。彼――御風に『念話』を使えればもっと簡単なんだけど」

「『念話』？」

「離れていてもその人と心で会話ができる魔法だよ」

《こんな風に》

「あ、これ、私を呼んだ時の…」

突如脳裏に響いたユーノの声に、なのはは自分が【魔法】と関わるきっかけを思い出していた。

《なのはにも使えるよ。レイジングハートを身につけたまま、心で僕に喋ってみて》

ユーノに促されたなのはは、ハンカチの上に丁寧に置かれていた赤

い宝石――レイジングハートを手にとって、ユーノに心で話しかけてみた。
《――こう？》
その声が聞こえたユーノが軽く頷いた。
《そう、簡単でしょ？》
『念話』で会話する事を覚えたなのはが「わ～」と感嘆の声を上げた。
と、ここで一つの疑問。
「あれ？ユーノくんの口ぶりじゃ、御風くんは『念話』が使えないみたいだけど、どうして？」
「それは、彼にリンカーコアが無いからだよ」
「リンカーコア？」
ユーノの口からまた知らない単語が飛び出してきた。
「リンカーコアは、魔導師が魔法を使う際に必須となる、魔力を生成するための体内機関なんだ。この機関が無いと、人は魔法が使えない」
なのはの疑問に応えるべく、ユーノが丁寧に説明する。
「この世界の人達には、通常リンカーコアが無いみたいだ。なのはは、その、特別だね」
「ほぇ～」
自分の中にあった思わぬ【力】に、なのはは驚きの声を漏らした。
「でも、御風くんは昨日魔法らしいの使ってたよ？なのに、御風くんにはリンカーコアが無いの？」
なのはの言葉に、ユーノは頭を抱えた。
「そうなんだ。普通ならばあり得ない。彼の使う【魔法】は、もしかしたら僕たちの使う【魔法】とまったく別の物なのかもしれない」
初めて見た御風の【魔法（マテリアル・パズル）】は、聡明なユーノにしてみても全く理解不能なものであった。
思索に耽りそうになっていたユーノは、なのはが言葉の続きを待っているのを察して、慌ててそれを中断した。

「…まぁそれは置いといて。とにかくこの『念話』があれば遠くで何をしていても状況説明ができるんだけど…」
「リンカーコアのない御風くんには伝わらない、か」
なのははう～んと唸って手を組んだ。
「御風くんは昨日ああ言ってたけど、できればユーノくんが直接説明してくれる方がいいよね。私じゃうまく話せるかどうかわかんないし」
にゃはは、と少し困ったように頬を掻くなのは。
その言葉を聞いたユーノに、閃くものがあった。
そう、何も『念話』で話す事に拘らなくてもいいのである。
「なのは、図々しいとは思うけど、一つお願いがあるんだ」
「ふぇ？」
申し訳なさそうに言うユーノに、なのは首を傾げた。

※

その日、私立聖祥大学付属小学校3年3組の昼休み。
昼食を終えたばかりの御風に、クラスメートの一人が声をかけてきた。
「御風ー、お客さんだぜー」
「あ？」
そちらに目をやると、昨日知り合ったばかりの少女、高町なのはの姿があった。手にはお弁当なのかバスケットが一つあった。
「女子からの呼び出しだ！」
「ひゅーひゅー！」
「結婚式はいつですかー！？」
周りの男子が囃し立てる中、御風は彼らを見回し、ふっ、と口元を歪めた。
「――うらやましいのか？」
「「「「うらやましいに決まってんだろがぁぁぁぁっ！！」」」」

男子達は御風の言葉にｏｒｚの姿勢になって激しく落涙した。
「なぜだ！？なぜこの世には富める者と貧しいものが存在するのだ！？」
「リア充なんか消えてしまえ！」
「っていうか、あれ高町さんじゃねぇーか！我が学年で3本の指に入る美少女の！」
「っていうかその3本の指が全員一つのクラスに納まってるってどういう事だよ！ちなみに俺はバニングス派だ！」
「それは月村さん派の俺に対する挑戦だな！？ツンデレなんてもうはやんねぇんだよ！時代は清楚なお嬢様だ！」
「それこそ時代遅れとなぜわからん！？」
「っていうかその3人に限らず、1組って美少女が多いよな。ウチはちょっとあれだから」
「ちくしょう！神よ、校長よ！なぜ俺を1組にしてくれなかったんだぁ！ウチはちょっとあれなのに！」
「「「何だとこの男子共！！ぶっ殺す！！」」」
暗にこのクラスには美少女がいないと言われた3組女子達は、怒りの雄叫びと共に不用意な発言をした男子達に襲いかかった。
「さ、行こうぜ」
「あれ放っといていいの！？」
何事もなかったかのような御風に、なのはは阿鼻叫喚となった教室を指して突っ込んだ。
「あー、気にすんな。一日に一回はあんな感じだから」
「毎日なの！？」
自分の予想を遥かに超えたはっちゃけぶりを見せる3組に、なのはは目を白黒させた。
私立聖祥大学付属小学校3年3組。少しおませさんと活発な子が多い以外は、普通のクラスである。
※

混乱の坩堝となった教室を後にした二人が向かったのは、あまり人気のない、中庭の裏手であった。
「ところでなのは。昼がまだなら先食っちゃっていいぞ」
御風がなのはの持つバスケットを指して言うと、
「お昼ならもう食べたよ。これはお弁当じゃなくて――」
なのはがバスケットの蓋をひょいと開けると、そこから一匹のフェレットが顔を出した。
「ユーノ？よく学校に連れて来れたな」
「先生から隠すのがちょっと大変だったけど、アリサちゃんとすずかちゃん――お友達の二人が協力してくれたから」
その代償にユーノは二人にもみくちゃにされていた。
「んで、どうしたんだ。わざわざ学校まで来て」
御風の言葉に、少しくたびれた様子のユーノが答えた。
「う、うん。昨日は、色々ドタバタしてて結局なのはに事情を説明できなかったんだ」
「ほぅ、それじゃ、今日この場で俺達二人にまとめて説明するつもりだと？」
「いや、なのはにはもう『念話』で授業中とかに説明はしてるんだ」
「『念話』？」
朝のなのはのように首をひねる御風。
「それを説明する前に、ちょっと試したい事があるんだけど、いい？」
「お？おお」
御風が頷くと、ユーノは目を閉じて何かに集中するかの様な仕草を見せた。
「……やっぱり駄目だ。通じてない」
何の反応も示さない御風に、ユーノはがっくりと肩を落とした。
「？どういう事だ？」
困惑する御風に、ユーノが『念話』の事、リンカーコアの事等、朝

なのはにした説明を繰り返して御風に伝えた。
「リンカーコアねぇ」
「うん。だからリンカーコアも無しに使う御風の魔法は、僕達からすれば常識外れの代物なんだ」
同じ魔法使いから非常識だと言われた御風は、思わず渋面を作った。
「そんな事言われてもなぁ。俺の【魔法】はガキの頃から自然と使えるようになった物だし」
「だから、御風にその辺りを詳しく話してもらいたくて、ここに来たんだ」
好奇心に目を輝かせるユーノに、御風は落ち着かせるかのように手を翳した。
「まぁ、待て。それよりも、昨日の怪物とか、何でフェレットがしゃべってんだとか、そっちの事情を先に聞かせてくれないか」
御風の言葉に、ユーノは己の状況を思い出し、急にしょんぼりとした。
「……ごめん。昨日は巻き込んでしまったのに……」
「い、いや、それについてはもういいって言ったろ？だから、な？」
そのあまりに凹んだ様子を見かねた御風が、少し焦ったようにユーノを宥めた。
「……ありがとう。それじゃあ、まず僕の事だけど、今でこそフェレットの姿をしてるけど、僕は本当は人間なんだ」
「えーっ！？」
ユーノの言葉に何故かなのはが驚いた。
「いや、なのは。お前事情聞いたんじゃなかったのか」
「ユーノくんが人間だなんて聞いてないよ！」
「あ、あれ？言わなかったっけ？」
「言ってないよー！」
激しく混乱するなのはに、困惑するユーノ。
収拾が着かない二人の様子に、御風は溜息をついた。
「落ちつけ。……まったく、なのはが先に驚くから、俺が驚き損ね

ちまったじゃないか」
「ご、ごめんなの……」
「まぁ、そこはいい。とりあえず、ユーノがしゃべるのは、本当は人間で、今はフェレットになってるからなんだな？っつーか、それも【魔法】なのか。何でもありだな」
「み、御風に言われたくはないけど、まぁその通りだよ」
「ふーん、で、そんなお前は一体何者な訳なんだ」
「僕は、こことは違う次元世界からやって来たんだ」
「知らん単語ばかり出てくるな。次元世界って何だ？」
「次元世界とは、次元空間にある様々な『世界』のことを指すんだ。その世界は魔法がこの世界で言う科学の様に発達していて、僕もその恩恵に預かっている。そんな世界はそれぞれが独立した歴史を持っていて、並行して存在している。次元空間を海、次元世界を島と考えて頂ければ解りやすいかな？」
ふむふむと頷く御風。その横で、何故かなのはも頷いている。どうやら一度の説明では把握できていなかったようだ。
「そしてその次元世界には、余りにも文明が発達しすぎてしまい戦争等が起こった時に、その進化し過ぎた技術が周辺の世界までも巻き込んで滅ぼしてしまう事が時折ある。そんな高高度文明、超古代文明が残した遺産。それを『ロストロギア』と僕達は呼んでいるんだ。このロストロギアは、遺産と呼ばれるだけあって現在の科学、魔法文明等では到底理解の出来ない程の超技術で作られていて、物によっては、それ単体で世界を滅ぼす事が出来るような物まであるんだ」
ユーノの長広舌をそこまで聞いた御風が、得心いったかの様に手をぽんと叩いた。
「なるほど、読めたぜ。昨日の青い石、あれがお前の言うロストロギアなんだな？」
御風の言葉に、ユーノは満足げに頷く。
「その通り。あれの名は『ジュエルシード』。手にした者の願いを

叶える、魔法の石。……本来はね」
その含みのある言葉に、御風は怪訝な顔になる。
「本来はって……、今は違うのか？」
「うん。力の発動が不安定で、単体で暴走した揚句、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるんだ」
御風は昨日に黒い怪物を思い出した。
「昨日の奴の事か」
「そう、それにたまたま見つけた人や動物が間違って使用してしまって、それを取り込んで暴走する事もある」
ユーノの言葉に、御風の額に冷や汗が浮かぶ。
「なんつー危ない代物だよ……。でも、そんなのが何でうちの町にあったんだ？」
それを聞いた途端、ユーノは先程よりも更に落ち込んで項垂れた。
「……僕の……所為なんだ」
「え？」
「僕は故郷で、遺跡発掘を仕事にしているんだけど、ある日、古い遺跡の中でアレを発掘して……。調査団に依頼して、保管してもらう事になっていたんだけど、運んでいた時空間船が、事故か、何らかの人為的災害に会ってしまって、２１個のジュエルシードがその時に近くのこの世界に降り注いでしまったんだ」
「２１個もあんのか……」
「今まで回収できたのは、昨日の物と合わせても２つだけ。残りは１９個。１つでも発動し、暴走を始めてしまえばこの世界は滅びてしまう……」
「予想以上のヤバさだな……」
予想を遥かに超えて逼迫した状況に、御風は思わず息を呑んだ。
「でもよ、その話のどこにお前の所為だって部分があるんだ？」
「アレを発掘したのは僕だから……。全部見つけて、ちゃんと有るべき場所に返さないといけないから……」
固い決意を込めたユーノに御風は、

「てい」
「あだっ！？」
「ゆ、ユーノくん！？」
でこピンを食らわせた。
額を押さえて悶絶するユーノを、なのはが慌てて介抱する。
それを横目に、御風は言葉を紡ぐ。
「あのな、真面目なのもいいけど、度が過ぎるとただの独り善がりになっちまうぜ？お前はこの世界を見捨てる事だってできたんだ。それをしなかったのはお前が凄ぇいい奴だからだと思う。でもそれと一人で無茶しようとしたのは別だぜ」
「それは、そうだけど……」
御風の言葉にユーノ口ごもる。
「それに、その遺跡発掘とやらをしてんのは、別にお前一人じゃないんだろ？もしかしたら、別の奴が見つけてた可能性もあるんだ。そいつが独善的な奴なら、この世界は見捨てられて、訳も分からないまま滅んでたかもしれん。それを考えりゃ、ユーノが発掘したのは不幸中の幸いって奴だ」
「でも……」
「そうだよ、ユーノくん」
なおも言い募ろうとするユーノを、今度はなのはが押し留めた。なのははユーノを目の高さまで抱き上げると、目をまっすぐに合わせて言った。
「ユーノくんは悪くなんかないよ。それに、過程はどうあれ、昨日みたいな事が度々あったら、ご近所の迷惑になっちゃうから、ね」
「ご近所で済む問題じゃねぇと思うが、まぁそういう事だ。この世界にジュエルシードがある以上、もう他人事じゃねぇ。ここまで来たんだ。ユーノ、お前は黙って俺達に助けを求めりゃいいのさ」
そう言って笑う御風と、ニコニコしながらこちらを見つめるなのは。
二人を交互に見たユーノはしばらくの後、
「……ありがとう。そして改めてお願いします。僕に力を貸して下

さい！」
それを聞いた二人の答えは、言うまでもない。

※

「さて、今度は俺の番だな」
即席ながら『海鳴ジュエルシード探索隊』が結成された後、御風が自分の魔法について語り始めた。
ユーノとなのはは、何故か正座してそれを聞いている。
「この世界には、地にも水にも、花にも樹にも、ありとあらゆるものにその根源的なエネルギー、『魔力（マテリアルパワー）』が宿っている――」
世界の神秘を語るかのような御風の静かな語り口に、なのはとユーノは知らずに引き込まれていた。
そして、当の御風自身はというと、内心で少し驚いていた。
自分にとって魔法とは感覚的に使っている代物であり、このように筋道を立てて説明できるとは思ってなかったのである。
まるで、御風の口を借りて、何者かが喋っているかのような、そんな感覚であった。
「そんな魔力を己が魔力を持ってパズルのように分解／再構成する事により、まったく新しい法則を生み出す。それが、【魔法（マテリアル・パズル）】」
「マテリアル……パズル……」
ユーノは呆けた様に呟いた。
「そしてこれが俺の【魔法（マテリアル・パズル）】」
なのはとユーノが見ている前で、御風は【魔法】を発動させる。
二人の眼前で風が逆巻き、御風に集っていく。かちゃかちゃと何かが組み合わさる音と共に、それは形を整えていく。
「風の中に流れる魔力を組み替え、新たな風を、そして自在に天を舞う翼を生み出す魔法、その名も『エンゼルフェザー』だ」
御風の背に昨夜見た白光の双翼が顕現していた。
再びそれを見たユーノとなのはは昨日同様目を見開いて、食い入る

ように見つめた。
「ま、何でそんな事が出来るのかと、そういうのは勘弁な。さっきも言った通り、ガキの頃にいつの間にか使えるようになってたんだから」
そう軽く言う御風に、なのはとユーノは気を抜かれたのか、大きく息を吐いた。
「昨日はバタバタしててよく見れなかったけど、すっごくきれいだねー」
なのはが、生み出された翼の美しさに目を輝かせる。
「不思議だ、見れば見るほど不思議だ。どうすればこんな事が出来るようになるんだろう?」
ユーノはしきりに首を傾げながらぶつぶつと呟いている。
御風は自分の翼を誰かに見せた事などなかったため、そんな風にじろじろ見られるのは当然初めてであり、なんだか気恥かしい思いをしていた。
その時、御風の背中が軽く粟立った。
何かが、常人には感じ取れない何かが、大気を揺らしたのを感じたのである。
その方向に目をやれば、なのはもユーノもそれに気付いたのか同じ方向を見ていた。
「おい、これってまさか……」
「うん、間違いない!ジュエルシードが発動したんだ!」
「た、大変!」
三人の絆は結ばれた。そして、再び戦いの幕が開く。

ジュエルシードとマテリアル・パズル（後書き）

説明回でした。
本来ならこの辺をもっと短くして神社で犬と戦わせようと思ってたんですが、予想以上に長くなったしまったので、次に回します。
次回は（Ｕ＾ω＾）わんわんお！をお楽しみ下さい。

神社と犬（前書き）

（Ｕ＾ω＾）わんわんお！（Ｕ＾ω＾）わんわんお！

神社と犬

緑に囲まれた静かな神社の境内。
その中で、一人の女性が恐怖に身を震わせていた。
その目の前で、獅子か虎並みの黒い巨躯を持つ、四つ目の四足獣が牙を剥き出して唸りを上げていた。
女性は己の目が信じられなかった。目の前にいるこの怪物は、ほんの数分前まで自身が散歩に連れていた小さな犬だったのだ。
恐怖と混乱の極みに達した女性は、目の前に迫る危機を前に自分の意識を手放した。
黒い魔犬は気絶した元飼い主に向かって、ゆっくりと歩を進めようとした。
だが、次の瞬間何処からか放たれた不可視の衝撃が、魔犬の巨躯を吹き飛ばした。
空中で身を捻り着地した魔犬は、四つの目に獰猛な光を浮かべて衝撃の放たれた方向に体を向けた。
果たしてそこには、一人の少年と一人の少女。そして一匹の小動物の姿があった。

※

十数分前。
私立聖祥大学付属小学校の裏庭にて、三人の人間が世界を揺るがす異変を感じていた。
一人はユーノ・スクライア。現在はフェレットの姿だが、歴とした人間。異世界より『ジュエルシード』を回収するためにこの世界に降り立った【魔導師】である。
一人は高町なのは。ほんの一日前まで平凡な小学3年生だった少女。
その身に秘められた特異な才能を見込まれて、ユーノを助けるため

に魔法の力を手にした【魔法少女】である。
そして最後の一人が天馬御風。【魔法（マテリアル・パズル）】と自身が呼ぶ特殊な力を使い、風を操り、翼を以って自在に天を駆ける【魔法使い】である。
「ジュエルシードが発動した……！」
ユーノが緊張に顔を強張らせる。
「す、すぐに回収しなきゃ！」
なのはが身を翻して校外へ出ようとすると、御風がその肩を掴んで止めた。
「待て。こんな時間から学校を出ようとすれば、確実に守衛に止められるぞ」
私立聖祥大学付属小学校には、裕福な家の者が多い。
よって、その安全を守るために校門には屈強な守衛が詰め所にて常駐している。
昼休みとは言え、校外へ出ようとすれば、確実に彼らに呼び止められてしまうだろう。
まさか世界の危機を救いに行くとも言えないので、なのはは頭を抱えた。
「じ、じゃあ、どうしよう！？」
「僕一人なら何とかできるだろうけど……」
ユーノも隣で同様に頭を抱えている。魔力を極限まで抑えるためにフェレットに変じている今の自分では、ジュエルシードを回収できるかわからない。最悪、返り討ち、という事も十分にありうる。
「お前ら、俺が誰か忘れてないか？」
うんうん唸る二人に、御風が不敵な笑みを見せる。
「なのは、ユーノ。ちょっと後ろ向け」
怪訝な顔をしながらも御風の言葉に従って後ろを向く二人。御風はそんな二人の背中にそれぞれ手を置き、己が【魔法（マテリアル・パズル）】を発動させる。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー！」
御風の手が置かれた部分から風が逆巻き、その魔力が組み替わっていく。

そしてその手が離れた時、なのはとユーノの背中には白い光で構成された一対の翼があった。
「は、羽が生えたの！」
「こ、これは！」
自分達の背中に顕れた翼に、なのはとユーノが驚愕の声を上げる。
「ここから飛んでいきゃ、守衛にも見つからねぇ」
同じように翼を出した御風が笑う。
「み、御風くん。私、空を飛んだ事なんてないんだけど……」
なのはが羽根を確認するためか、その場でクルクル回りながら言うと、
「心配すんな。羽の操作は俺がする。お前らは、力を抜いて身を委ねるんだ」
そう言うなり、三人の羽がそれぞればさりと羽ばたき、その体がふわりと浮かんだ。
「え？え？え？」
困惑するなのはに構わず、御風は羽に込めた魔力をさらに上げる。
「行くぞ！」
そして、三人は一気に空高く舞い上がった。
「にゃあぁぁぁぁぁぁ～っ！？」
なのはの悲鳴を後に残して。

※

耳元をびゅうびゅうと物凄い風切り音が過ぎていく。
その音といきなりかかった浮遊感に、なのはは思わずギュッと目を閉じ体を縮こまらせた。
「おい、なのは。何目ぇ閉じてんだ。もったいないから、開けてみな」
御風の声が聞こえる。その声に、なのはは恐る恐る閉じていた瞼を上げた。

そして、見た。
「うわぁ～……！」
通常ならば絶対にお目にかからないであろう、上空から見る海鳴市がそこにはあった。
自分の家、自分の通う小学校、、そして友達の家。
知ってる場所も知らない場所も、全てがなのはの眼下にあった。
「すごいすごいすご～い！」
先程の恐怖も忘れ、なのはは目の前に広がる景色に歓声を上げた。
「凄ぇだろ？俺が一番好きな景色なんだよ」
御風が得意げに言う。
実際、御風はこの景色を誰かと共有したかったのだ。一人で見るには、あまりにも贅沢すぎる光景だと、いつも思っていたのである。
『マスター』
わ～、わ～と騒いでいたなのはに、それまでずっと黙っていたデバイス『レイジングハート』が声をかけた。
「何？レイジングハート」
『私の中には飛行のための魔法もプログラムされています。これを習得すれば、マスターも空を飛ぶ事が可能です』
「ホント！？レイジングハート！」
『イエス』
レイジングハートの言葉に、なのはは大いに喜ぶ。
「ほぉ、そいつはいいな。なのは、飛べるようになったら一緒に飛んでみようぜ。面白そうだ」
「うん！」
御風の言葉に、なのはは嬉しそうに頷いた（因みにユーノは自身の状態に興味津津で、しきりに観察していた）。
なのはと共に笑っていた御風だが、ジュエルシードの魔力に近づいてきた事を感じて顔を引き締めた。
「さて、おしゃべりはここまでだ。そろそろ着くぞ」
「……うん！」

なのはとユーノも緊張の面持ちで頷く。
そして神社の上空まで差し掛かった時、三人は黒い獣の様な怪物が女性に襲い掛からんとする光景に出くわした。
「ひ、人が！」
「ちっ！」
御風は手を突き出し魔力を練り、周辺の風を組み替えて【魔法】を発動させる。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『風の砲撃（ヴィント・カノーネ）』！」
どごぉんっ！
発動した魔法は風の砲弾となって飛び、轟音と共に怪物に喰らいついた。
その衝撃に怪物は吹き飛び、女性から大きく離される。
そして怪物が怯んだその隙に、三人は神社の境内に降り立った。

※

対峙する魔犬と三人。
御風は残りの二人を守る様に一歩前に出た。
「昨日と同じパターンだ、なのは。俺が奴の足を止める。お前はその隙に封印しろ！」
「わかったの！」
なのははこくりと頷く。
「なのは、御風、気を付けて！昨日と違って、あいつは原住生物を取り込んでるみたいだ！」
「それって、昨日のよりも？」
「うん、実体がある分手強いはずだよ」
ユーノの注意勧告に、御風は改めて気を引き締める。
「じゃあ、ますます気張らねぇとな！」
御風の敵意に反応したのか、魔犬は咆哮と共に襲いかかってきた。
「うるぁっ！」

そして御風が展開した風の障壁と激突し、凄まじい衝突音を辺りに響かせる。
「なのは、今の内にレイジングハートの起動を！」
「うん！……って、起動ってなんだっけ？」
「え〜」
なのはのまさかの言葉に、ユーノは尻尾を逆立てて固まった。
「『我は使命を』から始まる起動パスワードだよ！」
「え〜っ！？あんな長いの覚えてないよ〜！」
「も、もう一回言うから繰り返して！」
「わ、わかった！」
その時、御風の焦燥に満ちた声が響いた。
「なのは、ユーノ！そっちに行ったぞ！！」
「「えっ」」
見れば、魔犬が御風の頭上を飛び越え、なのはとユーノに向かって駆けて来る。
どうやら手強いと判断した御風よりも、組み易しと思ったなのはとユーノを先に仕留めるつもりのようだ。
魔犬の鋭い牙と爪に引き裂かれてはもちろん、あの巨躯にぶつかられただけでも大けがでは済まないだろう。
「……きゃぁっ！」
小さな悲鳴を上げて、その身を強張らせるなのは。その体が吹き飛ばされると思われた刹那。
キィィンッ！
手に握りしめていたレイジングハートが光り輝く。
その輝きに気押されたのか、魔犬は自ら体を押し留める。
「レイジング……ハート？」
『スタンバイ・レディ。セット・アップ』
レイジングハートの声と共に、輝きがさらに強まる。そして、なのはの手の中に杖の形態に変化したレイジングハートが握られていた。
「パスワードもなしにレイジングハートを起動した！？」

ユーノが驚愕の声を上げる。
その時、様子見をやめた魔犬が、再びなのはに向かった突っ込んできた。
「なのは、防護服を！」
「へ？あ、はい！」
『バリア・ジャケット』
そして轟音と共に今度こそ魔犬がなのはに衝突した。
「なのは！」
ユーノが焦りに満ちた声でなのはを呼ぶ。
果たして土煙の晴れたそこには、白と青のバリアジャケットに身を包んだ無傷のなのはの姿があった。しかし、魔犬の姿はない。
慌てて周りを見回せば、鳥居の上に陣取りこちらを睥睨する魔犬がいた。そしてそのまま大きく跳躍し、高高度からの攻撃をなのはに繰り出す。
なのははとっさにレイジングハート翳した。するとそこからなのはの魔力光である桃色の魔力障壁が発生し、魔犬の攻撃を防いだ。
障壁と魔犬の間で火花が散る。必死に防ぐなのはの杖の先で、レイジングハートの冷静な声が響いた。
『プロテクティブ・コンディション・オールグリーン』
その声と共に一際強くなった障壁が、魔犬を大きく吹き飛ばす。
当然、なのははまたしても無傷である。
「あの衝撃をノーダメージで……。やっぱりだ。この子、凄い才能を持ってる」
ユーノがなのはの様子を感嘆の瞳で見る。
もんどりうって倒れる魔犬だが、すぐに起きあがり再度攻撃をしかけようとした瞬間、
「させるか、コラぁっ！」
やっと追いついて着た御風が、その横腹目掛けて羽のオーラを纏わせた蹴りを突き刺した。
威力の大きく増したこの一撃に、魔犬は三度吹き飛ばされる。

それでも尚、よろめきながら立ちあがった魔犬は、怒りに燃える四つ眼を御風達に向けその小さな体に牙と爪を突き立てんと飛び上がった。

だがしかし、飛び上がったその先で、魔犬の体が宙に浮く。その体からは、一対の白い羽が生えていた。

「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー！さっき蹴った瞬間に、お前の体に羽の魔力を流し込んで置いたんだ！」

そう言って得意気に笑う御風。

「凄い、あんな風に使う事も出来るのか」

ユーノ達の使う『バインド』にも似た効果を発揮する御風の魔法に、ユーノは感心したように呟く。

「なのは、今の内に早く封印しろ！」

「うん！レイジングハート、お願いね」

『オーライ。シーリング・フォーム・セット・アップ』

頷いたなのはは、レイジングハートをジュエルシードを封印するための形態へと変化させる。

杖の先端部、金色のパーツの根元が開き、そこから桃色の羽が飛び出す。

『スタンバイ・レディ』

なのはがレイジングハートを空中でもがく魔犬に向けると、そこから光の帯が伸び、魔犬の全身に絡みついた。魔犬の額にＸＶＩの文字が浮かび上がる。

「リリカルマジカル！ジュエルシード、シリアル１６、封印！」

『シーリング』

なのはとレイジングハートの声が響き渡り、魔犬は苦悶の声を上げながら光の中に消えていった。

その後に、青く小さく光るジュエルシードが浮かんでいた。

ジュエルシードが、レイジングハートの宝玉内に吸い込まれていく。

『レセプト・ナンバーＸＶＩ』

レイジングハートの静かな声が、ジュエルシードの封印が完了した

事を示していた。

※

「ぅうん……」

境内に寝転がっていた女性は、小さく呻きながら起きあがった。

「あれ？私一体……」

そこに、彼女が飼っている小型犬が甘えた声を出しながら駆け寄って来た。

「転んで、頭でも打ったかな？」

首を傾げながら、女性は犬を抱き上げて境内を後にした。

※

「行ったか……」

女性が立ち去ったのを確認して、御風達三人は隠れていた茂みから顔を出した。

「わんちゃんがぶじでよかったね」

取り憑かれていた犬に怪我一つなかった事に、なのはほっと胸を撫で下ろした。

「そうだな。後味の悪い思いをせずに済んだ」

御風も安堵の表情を浮かべている。

「封印魔法で、ジュエルシードの魔力の波動を完全にシャットアウトしたからね。その影響を受けていた犬はただ元に戻るだけなんだよ」

ユーノがなのはの肩に乗りながら言う。

「それにしても、なかなかいいチームワークだったな。即席チームにしちゃ」

「そうだね」

御風の言葉になのはが微笑む。

前衛を務める御風。
助言、及び補助を担当するユーノ。
そして後衛にて決めの一撃を放つなのは。
偶然ながら、それぞれの役割は上手く嵌っていたのである。
「これで、３つめ。残りは１８、か」
「うん、この調子で頑張ろうね！」
「……ご迷惑をお掛けします」
「いや、だからそれはもういいから」
ワイワイと談笑していたその時、ふと己の腕時計に目をやった御風が素っ頓狂な声を上げた。
「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！？」
その大声に、なのはとユーノはびっくりして目を丸くした。
「ど、どうしたの、御風くん？」
「どうしたじゃねーよ！あと５分で昼休みが終わっちまうじゃねーか！」
「へ？……あーっ！？」
気付いたなのはも思わず声を上げる。
「た、大変！遅刻しちゃう！」
「な、なのは！背中向け背中！すぐに飛んで戻るぞ！」
『マスター、この場で飛行魔法を覚えますか？』
「そ、そんな時間ないよー！」
「って、僕を置いていかないでー！？」
静かな神社の境内に、三人の声が響き渡った。

※

私、高町なのはが魔法使いになってからの長い一日がやっと終わっていきます。
新しくできた友達、ユーノくん、それに御風くんの事。魔法の事、不安な事やよくわからない事。

とにかく、たくさんあるんですが。
「急げ急げ！あと2分んんんっ！」
「にゃぁぁぁぁっ！？もっとスピード落としてー！？」
「落ちる、落ちる、落ちちゃうぅぅっ！？」
とりあえず、色々頑張っていかなきゃ、と思います。
「あ、ユーノが落ちた」
「にゃーっ！？」

神社と犬（後書き）

やっと原作第２話終了だよ……ｏｒｚ。
無印完結までにいつまでかかるんだろ、これ。
余談ですが、作中において事件の起きる時期が少し早い場合がありますが、極力整合性が取れるよう頑張りますので、ご容赦下さい。
さて、次回は少しキングクリムゾンッ！＆オリジナル回。
御風が一人でジュエルシードの回収に挑みます。
そして、運命の名を冠するあの子も登場！
それではまた。

餃ともう一人の魔法少女（前編）（前書き）

「……本当なのか、K林？」
「ああ、この小説のヒロインはなのはじゃない」
「！」
「そして作者にとって、『ユー×なの』こそが至高だったんだよー！！」
「な、なんだってー！？」
風の魔法使い、始まります。

餃ともう一人の魔法少女（前編）

力なく肩を落とした少女がいる。
時折その肩が震えるのは、涙を堪えているからだろうか？
少女の名は、高町なのは。
数日前まで、平凡な小学3年生だった少女。そして今は、この地に降り注いだ災厄を払うために、魔法の力を手にれた【魔法少女】である。
なのはの目に前に、傷ついた海鳴の町並みがあった。
件の災厄、『ジュエルシード』によってもたらされたそれは、なのはの心に深い自責の念を与えていた。
なのははこの惨状の原因となったジュエルシードに心当たりがあったのだ。だが、連日の探索による疲れ、久しぶりに訪れた心安らぐ時間。それらが、気づけたはずのそれを気のせいと割り切ってしまったのであった。
もしあの時こうしていたら。もしあの時ああしていたら。
いくつものｉｆは、現実の前では何の意味もない。
なのはは、ただひたすら己を責め、その小さな唇をかみしめていた。

※

そんなのはの背中を、二つの視線が見つめていた。
一人はユーノ・スクライア。
ジュエルシードを回収するために、違う次元からやって来た魔導師。
そしてもう一人は、天馬御風。
自身が【魔法（マテリアル・パズル）】と呼ぶ超常の力を振るう魔法使い。
共にジュエルシードを探索する三人であったが、今のなのはに対しては、どのように声をかけたらいいのか途方に暮れていた。
「……おい、ユーノ。お前がなのはを慰めて来い」

不意に御風が、ユーノ耳元に口を近づけ小さな声で囁いた。
「えっ、僕が!?」
ユーノが慌てて聞き返すが、御風は当然といった顔で頷いた。
「俺となのははまだ知り合って数日ぐらいしか経ってないし、クラスが違うせいで学校でもせいぜいが挨拶を交わす程度。今日みたいにジュエルシードを探索する時ぐらいしかつるんでない。だからこんな風になのはが落ち込んでたら、なんて言っていいのかわからねぇ」
「う、うん……」
知り合った期間云々を言ったら僕もなんだけど、と内心ユーノは思ったが、勢いよく話を続ける御風に口を挟めなかった。
「でも、お前は普段からなのはの家でも一緒だし、多少なりともなのはの事をわかってる筈だ。……少なくとも俺よりは」
因みに、二人ともやけになのはを慰める事に抵抗しているが、別になのはの事が嫌いなわけではない。ただ、心配なあまり、逆にどう声を掛けたらいいのかわからないのである。
「そ、そうかもしれないけど、僕も御風と似たり寄ったりだと思うよ」
ユーノが首をぶんぶん振る。
「そうでもねぇ。お前は【魔法】に関してなら、なのはにとって『師匠』みたいなもんだろ?俺にはない絆っつーもんがるはずだ」
「でも……」
なおも渋るユーノに、御風は業を煮やしたかのようにさらに言い募った。
「だーっ!はっきりしねぇな!弟子が失敗――つっても、別になのはに非はねぇが、ああやって落ち込んでんだ!師匠なら、なんとかしてやろうって気にはなんねぇのか!?」
その言葉に、ユーノの脳裏に何時かのなのはが思い浮かんだ。
ジュエルシードがこの町に降り注いだ原因に関して、自責の念に駆られた自分を慰めてくれたのはなのはであったはずだ(後、目の前

にいる御風も）。
ならば、今度は自分がなのはを慰める番ではないだろうか。
そう思い至ったユーノは、
「……わかった。僕が行ってくる！」
決意を眼に宿らせて、力強く頷いた。
そして、御風が見守る中なのはに近づいていき、その距離がほんの僅かになった時、ユーノの体が淡い燐光に包まれた。
それを見た御風は、驚きに目を丸くした。

※

「なのは」
なのはの耳に、ユーノの声が聞こえる。その場所がいつも聞こえている所よりも高いのは、御風の肩にでも乗っかっているのかもしれない。
なのはは小さな体をきゅっと強張らせた。
怒られるのだろうか。詰られるのだろうか。――嫌われて、しまうのだろうか。
恐る恐る振り向いたなのはは、予想外の光景に目を見張らせた。
そこに思っていた御風の姿はなく、代わりに一人の少年が立っていた。
年の頃は自分と同じくらいだろうか。民族衣装のような不思議な服に身を包んだ、淡い金髪に緑の瞳を持つ、少女と見紛うような顔立ちをした少年が。
見覚えが無いはずなのに、なのははその少年を知っている様な気がした。
「なのは」
そして、少年の口から自分の名前が呼ばれ、それがよく知る友達の声だと気付いた時、なのは再び驚いた。
「ユーノくん……なの？」

「この姿で会うのは初めてかな？」
少年――ユーノ少し照れたようにはにかんだ。
ユーノは、いまだ驚きに固まるなのはの横に立ち、損壊した街並みに目を落とした。
「ごめん、なのは。これも、僕のせいだ」
「違うよ！」
沈痛な面持ちのユーノに、なのは叫んだ。
「これは、私のせいだよ……。だって私、気づいてたんだ……。あの子がジュエルシードを持っているって事。でも、気のせいだって、思っちゃったんだ……」
そう言って、今にも泣き出しそうな顔をするなのは。
「……なのははあの時、僕がジュエルシードの事で落ち込んでいた時、僕のせいじゃないって言ってくれたね」
「それとこれとは……違うよ」
「違わないよ」
ユーノは静かに首を振った。
「今日のこれは、なのはのせいじゃないよ。でも君は優しいから、こんな言葉じゃ自分を許せないかもしれない。だから、なのは。君が今抱えている悲しみを、僕にも半分背負わせてほしい」
「え……」
俯いていたなのはが顔を上げる。
「君は否定したけど、やっぱりこの惨状の責任の一端は僕にある。だから、君が全部の責任を感じる事なんてないんだ」
「でも」
何か言おうとしたなのはを、ユーノが押し留める。
「元々は僕の責任なのに、今君に背負わせてしまっている事自体、僕にとっては心苦しいんだ」
ユーノは悔しそうに顔を歪めた。
「僕は、弱い。僕がもっと強かったら、そもそもなのはにこんな悲しい思いをさせる事なんてなかった」

そしてユーノは、なのはと真っ直ぐ目を合わせた。その力強い瞳に、なのはの鼓動が一瞬高鳴る。
「今の僕はこんな慰めしかできない。でも、いつか僕はもっと強くなる。心も、体も。もうなのはが傷つかないように。もうなのはを傷つけないように」
「ユーノくん……」
「それまではせめて、君の心を、守らせてほしい」
しばしの静寂が辺りを包む。
「うん……。でも、一人で強くなるなんて、言わないでね」
なのはが微笑みながら言う。
「一緒に、強くなろう。一緒に、頑張ろう。初めはユーノくんのお手伝いだったけど、今は私がこの町を、私の意思で守りたいから。だから一緒に頑張ろう、二人で」
「……ああ！一緒に頑張ろう、なのは！」
「うん！」
そう言って、なのはは花がほころぶ様な笑みを見せた。その頬を、初めて感じたほのかな思いに、少し赤く染めながら。

※

その頃。
（色々と突っ込みたい事はあるけど、まずこれが一番言いたい。「二人で」って言いやがった！なのはの奴「二人で」って言いやがった！俺の存在、全無視かよ！そんで何だ、このピンク色の空間は？何でこういう事になった？畜生、あの極太ビーマーめ。桃色なのは魔法だけじゃないってのか！まぁ言わないけどね！俺風を使う魔法使いだし！空気読めるし！）
その存在を完全に忘れ去られた御風が、浸食してくるピンク色の空間に辟易しながらブチブチと不満を漏らしていた。

※

町の一件から数日後、事態は特にこれといって動かなかった。
なのはとユーノは、表面上はいつも通りなのだが、ふとした事で互いを意識してしまうのか、何とも初々しい反応をする時がある。その度に、御風は口から砂糖を吐いていた。
そんなある日の休日、御風はいつもの様にジュエルシードの探索に赴いていた。だがそこに、なのはとユーノの姿はない。
何でも、友達の家にお茶会に誘われたらしい。
なのはは御風も来ないか尋ねてきたが、知らない人ばかりいる空間で気まずい思いをするなんて真っ平ごめんだった御風は、丁重にその誘いを断った。
そして一人でジュエルシードを探している時、偶然出会ったクラスメートの一人が声を掛けてきた。
「みかっちゃん、今、暇？皆と公園でサッカーしようって話になってるんだけど」
「あー、悪ぃ。今日はちょっと……」
「ちぇー、またかよ。ここ最近、みかっちゃん付き合い悪いなー」
「すまん。この埋め合わせはまたいつか」
「今まで埋め合わせてもらった覚え何て全然ないけど。あ、そう言えばみかっちゃん、知ってる？」
「知らねぇ」
「いや、話が進まないよ。３丁目に河原があるじゃん」
「おー、あるなぁ。幼稚園ぐらいの頃、行った事があるわ」
御風が当時を思い出しながら頷いた。
「あの辺りにね、なんと『怪物』が出るそうなんだよ！」
「大丈夫か」
御風は物凄く真剣な様子で級友の頭を心配した。
「ちょっ！？そのマジ顔やめて！俺がホントにやばいみたいじゃん！」

「いや、やべぇ。マジやべぇ」
「ひどっ！でもこの話本当らしいんだよ。襲われて怪我したって人もいるってさ。今じゃ噂のせいであの辺りには誰も近づかないらしいよ」
「ふーん」
「ま、何してんのか知らないけど、あの辺りには近付いちゃだめだよ」
そう言うと、クラスメートはサッカーをしに去って行った。
彼がいる前では、気のない返事をしていた御風だが、内心では少し興奮していた。
その『怪物』の正体に心辺りがあったのだ。
ジュエルシードモンスター。
御風は数日前の黒い異形、そして先日戦った魔犬の姿を思い出す。
その『怪物』が本当にいるのだとしたら、それはジュエルシードの思念体、或いは原住生物を取り込んだジュエルシードの可能性が大いに高い。
「行くしか、ないな」
御風は３丁目の河原に向かって歩き出した。

※

何者かが縄張りに近づいてくる気配に、『そいつ』はゆっくりとまどろみから覚めた。
それは『そいつ』にとって、狩りの始まりを意味していた。
ここしばらく何物も自分の縄張りに近づく事はなく、『そいつ』は空腹感を覚えていた。
久しぶりの獲物を仕留めるべく、『そいつ』はゆるりと身をくねらせた。

※

少女はジュエルシードの気配を感じた。
今日は運がいい。つい先程も多少の妨害があったものの、ジュエルシードをひとつ、確保したばかりであった。
これでまた、あの人の願いに――そして自分の望みに近づく事ができる。
そして少女は、その気配に向かって飛翔した。

餃ともう一人の魔法少女（前編）（後書き）

長くなりそうなので、前編と後編に分けます。
本作品内のあのカップリングに関しては完全に私の趣味です。
いいじゃないか、ユー×なのが好きだって。
次回はジュエルシードモンスターとの激闘。そして彼女との初遭遇が見所となります。
それでは、また。

餃ともう一人の魔法少女（後編）（前書き）

お気に入り登録件数がいきなり増えてる……だと……？
皆様に多大な感謝を。批評や感想もお待ちしております。

餃ともう一人の魔法少女（後編）

「ここか」

都市部を抜け、件の河原までやって来た御風は、まずその人気の無さに驚いた。

（休日を過ごすにゃあ、結構いい場所だと思うんだが、人っ子一人いないとなると、例の噂は相当広まってるみたいだな）

その河原は、緑豊かな何とも心和む場所のはずなのに、人の姿がまるで無いというだけで、何故かずいぶんと気味の悪い場所になっていた。

「こんなに明るい内からってのがまた怖い」

ぶるっと少し身震いした御風は、意を決してジュエルシードの探索を始めた。

と言っても、御風はユーノの様に探索魔法が使えるわけではないので、風の中にある魔力を感じ取り、そこにある違和感を探すのである。

「……特に、何もねぇな」

周囲に際立っておかしな場所はない。目視による探索も行いながら、御風はもしかしてガセだったかも、と拍子抜けしていた。

「――！」

その時、御風の感覚が何かをとらえた。風を操るその業故か、あるいは【魔法使い】故か、御風の気配を探る感覚は常人のそれよりもすぐれていた。

その感覚が伝えるのだ。何かが、己に敵意を持つ何かが近づいてくる事を。

右から？左から？それとも上から？

否。

「下……だとぉっ！？」

瞬時に【魔法】を発動させ、翼を展開した御風は空中高く舞い上が

った。
その直後。
ごばぁぁぁんっ！
今の今まで御風が立っていた場所から、体長４メートルはあろうかという、赤茶けた肌を持つ八つ眼の鮫によく似た怪物が飛び出して来た。
御風を追って空中に躍り上がった『鮫』だが、その牙は惜しくも御風を捉える事無く、ガチリと虚しく宙を噛み、再び地面に大きな波紋を残して沈んで行った。
そして、危うく食われかけた御風は、心臓が飛び出そうな程、その鼓動を荒げていた。
（こ、こ、怖ぁぁぁぁぁっ！？おいおい、なんだ今の？洒落にならんぞ、あれ！今までよくけが人だけで済んでたな！しかもあいつ地面に潜ってったぞ！？）
そう、『鮫』は地面をあたかも水の様に飛沫を上げ、波紋を残し移動していたのである。
「土の中を水の中みたいに動けるってのが、あいつの能力か」
御風は戦慄と共に呟いた。
ジュエルシードモンスターである『鮫』の能力は、まさにそれであった。自身が触れた部分を水の様に変化させ地中を自在に泳ぐ。
そしてその『鮫』と言えば、まだ御風を諦めるつもりが無いのか、「ジョーズ」の様に背びれを地面の上に出し周囲を回遊している。
「陸にいながら漁業をする羽目になるとは思わなかったな」
そして御風も、この危険なジュエルシードモンスターを放置すつもりはない。
羽に込めた魔力をさらに強め、臨戦態勢に移行する。
「まずは、小手調べ！」
御風は組み替えた風を指先に集め、それを一気に振り下ろした。
そこから巨大な風の刃が発生し、地面を泳ぐ『鮫』に突き進む。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『大切断（ツェアライセン）』！」

だが、飛来する風刃に気付いた『鮫』は、直撃する瞬間地中の奥深くへ潜ってしまった。
『鮫』の能力から離れた地面は、当然風刃の侵入を許さず、御風の魔法は地面に大きな裂傷を付けるだけに終わった。
（土が邪魔で攻撃が当たらねぇ。これは、思った以上に厄介だな）
御風は密かに歯がみした。
空中にいる限り『鮫』の攻撃は御風には当たらない。だが同様に、御風の攻撃も固い土の壁に遮られ、『鮫』まで届かない。
ここにきて、御風の最大とも言える弱点が露呈した。
即ち、攻撃に重さが無いのである。
風の特性上仕方が無い事なのだが、それを御風は手数と技のバリエーションで対応してきた。
だが、ここまで相手の防御が固いとお話にならない。何しろ『鮫』が盾にしているのは、御風達が普段足を付けている、地面そのものであるのだ。
「こんな時になのはが居りゃあな」
今はここに居ない友人の魔法少女を思って、御風は小さく舌打ちした。
もしここになのはがいれば、先日見せた新魔法『ディバインバスター』で地面ごと『鮫』を打ち抜く事が出来たかもしれない（できない、とは言えないような威力が、あの魔法にはあった）。
だが、いない者を頼みにしても仕方がない。手持ちの札と知恵で、御風はこの難敵に立ち向かうしかないのであった。
（ちっとばかし、頭回転させなきゃならねぇか）
御風は空中でうんうんと唸り始めた。

※

『鮫』は上手くいかない「狩り」に苛立っていた。
人間のくせに何故か飛べるこの獲物は、自分の牙の届かない場所に

陣取り、こちらの様子を窺っているようだ。
向こうの狙いが何かはわからないが、『鮫』にとってはどうでもいい事である。
それよりも、あの生意気な空飛ぶ人間をどう自分のテリトリーに叩き落としてやろうかを考える。
『鮫』はしばしの思考の後、以前に鳥を落として食した時の手法をとる事にした。

※

「なんだ？」
突如動きを変えた『鮫』に御風は警戒心を強める。
『鮫』はその場でくるりと回転すると、遠心力によって勢いの増した尾びれを御風に向かって振り上げた。
ざばぁんっ！
巻き上げられた土が飛沫となって御風に散る、と思われたその時、『鮫』の能力を離れた土は固い弾丸と化し、凄まじい威力を伴って御風に襲い掛かった。
「何いぃいぃっ！？」
咄嗟に風の障壁を展開するが、構成の甘いそれは直撃を防ぐには至らず、防御壁を破り御風に迫る。
そして運の悪い事に、その内の一発が御風の羽を貫いた。
「まずっ――」
再び翼を作ろうとする御風だが、土の飛礫が魔力の集中を容易にさせない。
そうこうする内にバランスを崩した御風は、錐揉みしながら地面に落ちて行った。
「くっ！」
あわや激突、という瞬間、風を集めてクッションにした御風は固い地面に体を叩きつけられずに済んだ。

一瞬安堵しかけた御風だが、自分が相対していた物を思い出し、ハッと顔を上げた。
するとその前方、待ってましたとばかりに『鮫』が突進してくる姿があった。
その距離数メートル。風の障壁を展開しようにも、魔力を練り上げる暇すらない。
さらに念の入った事に、『鮫』は空中に体を躍らせ、御風が空に逃れる事すら許さない。
天馬御風、絶体絶命の危機。
『鮫』の牙が御風を引き裂かんとしたその刹那。
「かかりやがったな、このダボがぁっ！！」
獰猛な表情で咆哮した御風が、あらかじめ展開していた魔法を開放する。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『戒めの風（ツヴァング・ヴィント）』！」
次の瞬間、無数の気圏が『鮫』の体を取り巻き、幾重にも渡って拘束した。
驚愕に身を震わせる『鮫』を前に、御風は会心の笑みを見せた。
その笑みを見た『鮫』は、狩られていたのは己であった事を悟った。

※

全ては御風が謀った事であった。
己の魔法は相手に届かない。このままでは千日手になりそうな気配を察した御風は、届かないならば、届く距離まで相手に出てきて貰えばいいと、己を「餌」として相手を釣り上げる事を思いついたのである。
そこまで考えた時に起こったのが、『鮫』の予想外の攻撃であった。
実は御風、この攻撃には本当に驚いていた。風の障壁や翼を破られたのもわざとではない。だが咄嗟に、この状況を利用した御風はいかにも危なげな様子を見せて相手の油断を誘った。そして、地面に

落ちるふりをしながら、周囲に自分の意思一つで発動する、設置型の魔法を展開しておいたのである。
果たして『鮫』は何の疑いもなく御風が張った「罠」に引っ掛ったのであった。

※

「さて、そんなに長く持つようなもんじゃなさそうだし、さっさと始めるか」
空中で御風の魔法から逃れようと、『鮫』が在らん限りに抵抗している。
ギシギシと嫌な音を立てる拘束の魔法に、御風は手早く以前から確かめたかった事を実行した。
「【魔法(マテリアル・パズル)】エンゼルフェザー！」
羽のオーラを纏った拳を、鮫に向かって叩きつける。打ち込まれた魔力は『鮫』の全身を駆け廻り、取り憑いていたジュエルシードに注がれる。
次の瞬間、『鮫』の体は光の粒になって溶け消え、その後にびちびちと地面にのたうつ一匹の鮒と、薄い風の膜に包まれたジュエルシードだけが残った。
「おぉっ、成功だ！」
その結果に御風がガッツポーズを取る。
御風が以前から試してみたかった事――それは、自身の【魔法(マテリアル・パズル)】を封印に使う事は出来ないか、というものであった。
またしても御風の中に眠る謎の知識によるものだが、【魔法(マテリアル・パズル)】によって組み替えられた魔力は、他者の魔力の影響を受けない、という特性を持つ。
これを利用して、御風はジュエルシードに【魔法】をかける事で、ジュエルシード周辺の魔力を遮断しようとしたのである。
これはなのは達の使う封印魔法と同じ結果を齎した。最も、このま

まにしておくつもりもないので、後でなのはにきちんとした封印をしてもらう事になるが、これによって二つの利点が生まれる。
一つはジュエルシード探索において、二手に分かれる事が出来るというものである。
今まではなのはがいなければ封印する事が出来なかったジュエルシードも、今回の実験結果により、御風にも封印が可能になったからである。
そしてもう一つはっ御風の個人的な事情によるものであるのだが、
「これでもう、砂糖を吐く日々ともおさらばだぜ！」
幼いカップルのラブ時空に巻き込まれる度に感じていた虚しい気持ちを味合わなくても済むと知り、御風は小躍りしたい気分であった。
「おっと、忘れる所だった」
御風は今だ足元でびちびちしている鮒の尾びれを摘まんで持ち上げると、川に向かって放してやった。
ぽちゃん、と軽い水音と共に放された鮒は、すぐに身を翻して泳ぎ去ってしまった。
「やれやれ」
先程まで暴れ狂っていた巨大鮫とは思えぬその小さな魚影に、御風は改めてジュエルシードの厄介さを思い知った。
「あとはこいつをなのはに渡せば、任務完了って訳だ」
御風がそう言ってジュエルシードを手におさめた瞬間、
「……！」
何者かの視線を感じた。
御風がばっとその視線の方向に顔を向けると、樹の上に立つ、人影があった。
ツーテイルに纏めた長い金色の髪。紅玉の如き真紅の瞳。凛とした、という形容がぴたりと嵌る、整った顔立ちの美少女である。
その華奢な体には、黒の薄いレオタードのような衣装と、裏地が赤の黒いマントを纏っている。
そしてその手に握られているのは、先端部に金色の宝玉が付いた、

長柄の斧のような形状の杖。
特徴的なその出で立ちに、知らず御風は呟いていた。
「【魔導師】……！」
「そのジュエルシードを渡して下さい」
少女――フェイト・テスタロッサは御風に杖を突き付けながら静かに告げた。

餃ともう一人の魔法少女（後編）（後書き）

フェイトちゃん参戦です。
小説内のジュエルシードの封印に関する下りは、マテパにおいて月丸を倒した時のシャルロックが言っていたのを流用したものです。
さて次の見所は御風ＶＳフェイト。【魔法使い】と【魔導師】、『風』と『雷』が鎬を削ります。勝敗の行方に関しては、また次回。

風と雷（前書き）

書き溜めてるわけじゃないので、話を捻りだすのが大変です。
他の人たちはこんな時、どんなリフレッシュをするのだろう……？

風と雷

その光景を見た時、フェイトが覚えたのは驚きだった。
ジュエルシードの気配を感じて急行したその場所で、暴走体らしき怪物が一人の少年と戦っていた。
自分と同じくらいの年頃のその少年は、見た事もない魔法を使っていた。
初めは自分と同じ『魔導師』かと思ったが、少年はデバイスらしき物も使わず、バリアジャケットも纏わず、自分の知る『ミッドチルダ式』の魔法ならば足元に発現するはずの魔法陣も見えず、しかし彼は背中に一対の白い翼を背負い、戦いの場を舞っていた。
（見た事もない【魔法】……。もしかしたら、この世界特有の魔法なのかも）
フェイトはその美しい柳眉を僅かに顰めた。
自分の知識の及ぶ所でない魔法と言うのは、それだけで脅威だ。ましてや、それが自分と同様にジュエルシードを回収している者ならば尚更である。
（でも、負ける訳にはいかない。あの人の願いのためにも。そして私の望みのためにも）
弱気になりそうな己に活を入れ、フェイトは心を奮い立たせる。
そうこうしている内に、件の少年はジュエルシードの封印を終えた様であった。
知らず、フェイトの体が、これから始まるジュエルシードを巡る戦いへの緊張感故か強張る。
その気配を感じたのか、少年がこちらに振り返る。その口から言葉が漏れる。
「【魔導師】……！」
フェイトはそれに応えず、己が手にしたインテリジェント・デバイス『バルディッシュ』を少年に突き付けた。

「そのジュエルシードを渡して下さい」

※

激闘の跡が今だ残る河原。
そこで、二人の子供が対峙している。
【魔法使い】の少年、天馬御風。
【魔導師】の少女、フェイト・テスタロッサ。
張り詰めた緊張感が、その場の空気を覆っていた。
「渡してくれって言われて、はいどうぞって代物じゃねぇのは、解ってるよな？」
そんな空気を破って口火を切ったのは御風であった。
「……」
フェイトは、応えない。
「それ以前に、何であんたみたいな魔導師がここにいる？あいつが言っていた『時空管理局』とやらじゃないよな？」
「……」
フェイトは、応えない。
「どうしてジュエルシードの事を知ってる？あいつがこれを発掘したのはほんの少し前だって話だし、こいつがここにある事情ってのも、ここ数日以内の事だ。あいつの身内か、後数人ぐらいしかその事は知らないはずなんだけどな？」
「……」
フェイトは、応えない。
「だんまりかよ。じゃあ、これだけ答えな。……お前は、俺の敵か？」
「……はい」
初めて、フェイトが応えた。
それを聞いた御風は、挑発的な笑みを浮かべた。
「ＯＫ、ＯＫ。なら、俺もさっきの要求に答えとく。……一昨日来

やがれ」
フェイトはしばし沈黙した後、
「なら、力づくで頂いていきます」
『バルディッシュ』を構えた。
「やってみやがれ！」
背中に『翼』を出した御風が咆えた。
「……いきます！」
そして、【魔法使い】と【魔導師】の戦いは始まった。

※

「バルディッシュ！フォトンランサー、連弾！」
『フォトンランサー・フルオートファイア』
先手を取ったのはフェイト。手にしたデバイスが主の命と魔力を受け、低い男性の声で応える。
金色の宝玉が瞬き、黒い杖の先端から数本の小さな雷槍が御風に向かって放たれた。
「ちっ！」
御風はそれを空中に逃れる事で回避する。
『ブリッツアクション』
その直後、フェイトの姿がかき消える。
危険を感じた御風は、咄嗟に自分の全方位に風の障壁を展開する。
ぎゃりぃぃぃっ！
攻撃は背後から来た。
慌てて振り向くと、障壁とかみ合っているのは、鎌のような光の刃を出した先程とは形を変えたフェイトの杖。
『サイズスラッシュ』
「……はぁっ！」
気合いの声と共に光の刃に流される魔力が強化され、フェイトは御風の障壁を切り裂いた。

その刃が迫る瞬間、御風は再び翼をはためかせフェイトから距離を取った。そして同時に御風は己の魔法を行使する。
「『大切断(ツェアライセン)』！」
振り降ろされた指先から放たれた真空の刃がフェイトに襲い掛かる。
「アークセイバー！」
『アークセイバー』
しかしフェイトも鎌の光刃を射出し、御風の風刃を迎え撃つ。
互いに喰い合った魔法は、二人の間で対消滅する。
それを待たずに、御風はフェイトに向かって羽を打ち震わせて空を疾駆する。
「おらぁっ！」
その拳に羽のオーラを纏わせ、フェイトに殴りかかる。フェイトはその拳を翳したバルディッシュの柄で受け止める。
だが、攻撃を防がれたはずの御風はにやりと笑い、
「【魔法(マテリアル・パズル)】エンゼルフェザー！」
【魔法】を発動させる。
すると、バルディッシュの柄から白い羽が生え、あらぬ方向に飛び立とうとした。
「なっ！？」
驚愕に目を見開いたフェイトが、慌ててデバイスを取り直し、そこに魔力を流し込む。内側から流された魔力に抗しえなかった羽はボンと小さな破裂音と共に散り散りに消えた。
「デバイスを取っちまえば、こっちの勝ちだと思ったんだがな」
不敵な笑みを浮かべる御風。
フェイトは先に感じた自分の予測が正しかった事を知り、眉根を寄せる。
（未知の魔法……。やっぱり、厄介だ）
相手が何をしてくるかわからない。
戦いの場において、情報の有無は時として命の明暗すらも分ける事がある。

解らない、という事は、ただそれだけで脅威となるのだ。
（なら、何かしてくる前に叩く！）
「バルディッシュ、フォトンランサー・マルチショット！」
『イエッサー。フォトンランサー・マルチショット』
御風が行動を起こす前にそれを封殺すべく、フェイトは魔法を発動させる。
すると、先の雷槍の倍以上の数が御風に向かって飛ぶ。
「『風の砲撃（ヴィント・カノーネ）・連続射出（テルメン）』！」
御風も風の砲弾を大量に生みだし、雷槍の群れと打ち合わせる。
轟音が響き渡り、周囲に空気の焼ける臭いと粉塵が満ちる。
それらが晴れた時、そこには互いに無傷の二人が残っていた。
（（……強い！））
それが二人に共通した相手の力量に対する感想であった。
（俺より速い奴と戦うのは初めてだな。空の上で後れを取るたぁ思わなかったぜ）
御風がフェイトのスピードに舌を巻けば、
（一つ一つの動作が鋭い。要所要所でこちらの上を行かれてしまう）
フェイトが御風の機動性に目を見張る。
共に戦闘スタイルの似た二人は、相手の手強さに内心で感嘆する。
（だが、向こうの防護服はなのはの奴と違って薄そうだ。完全にスピードを重視して作ったんだろうが、逆にそこが弱点。一撃当てりゃあ墜ちる！）
（風の魔力変換？あの魔法は厄介だけど、使ってる本人はバリアジャケットも着てない。一度でもこちらが攻撃を当てたら、勝てる！）
それぞれの攻略法を見出した二人は、
（（一撃必殺！大技で仕留める！））
同様の結論に達する。
フェイトが、御風から更に距離を取る。
警戒する御風の目の前で、フェイトは杖を構え、その体から魔力を立ち上らせる。

（あちらさんも同じ腹積もりかよ）
フェイトの意図を察した御風は、それに答えるべく自身も魔力を高め、魔法を構成し始める。
指先を伸ばし、腕を垂直に掲げる。それと同時に風が渦を巻き、御風の腕に集っていく。
かちゃかちゃと音を立てながら組み替えられて逆巻く風は、徐々にその回転数を上げながら発光し、ついには御風の腕を光の剣の如き威容に変化させる。
御風は腕を引き、ぎゅいいいっ！と甲高い音を立てて渦巻く魔法を構える。
そして対するフェイトも、魔力を練り上げ自身の魔法を完成させる。
溢れ出た魔力が彼女の変換資質『電気』により、ぱりぱりと音を立てて周囲の空気を軽く焦がす。
そして二人は、互いの魔法を開放させる。
「撃ち抜け、轟雷！『サンダースマッシャー』！」
『サンダースマッシャー』
バルディッシュの先端から放たれた金色の砲撃が御風に向かって突き進む。
それに対し御風は、迫りくる砲撃に自ら突っ込みながら、腕の魔法を繰り出す。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『大回転衝角（シュピラーレ・ウム・ドレーエン）』！」
それぞれの必殺が激突した。
そして、フェイトの目が驚愕に見開かれる。
「なっ……！？」
御風がフェイトの砲撃を貫きながら、突き進んで来る。
飛び散った砲撃の残滓が御風の体を傷つけていくが、御風はそれでもお構いなしである。
「おおおおおおおっ！！」
咆える御風に応え、『大回転衝角（シュピラーレ・ウム・ドレーエン）』が更に唸りを上げて回転する。
そして御風は、動きを止めたフェイトの元に到達する。

「ブチ貫けぇぇぇぇっ！」
御風の魔法がフェイトに届かんとしたその時、
ばぎぃぃんっ！
フェイトが展開した金色の魔力障壁がそれを阻む。
『サンダースマッシャー』とのせめぎ合いでその威力を大幅に減少させていた『大回転衝角（シュピラーレ・ウム・ドレーエン）』はその壁を破る事が出来ず、こちらもそのまま消滅してしまった。
安堵しかけたフェイトだが、今だ不敵な表情を崩さぬ御風に気付いて体を強張らせた。
「こうなる事ぐらいは織り込み済みだ。俺の本命はこっちだ！」
言うなり、逆の拳に練り上げていた魔力を羽のオーラに変換し、御風はフェイトの魔力障壁を粉々に打つ砕いて、その拳を彼女の体に叩き込んだ。
「かはっ！」
苦悶の声を上げるフェイト。だが、まだ致命傷ではない。
再び距離を取ろうとするフェイトだが、御風の【魔法】がそれを許さない。
「エンゼルフェザー！」
フェイトに叩き込まれていた魔力が瞬時に羽に姿を変え、フェイトの動きを拘束する。
「くっ！」
己の体に魔力を流し込み、フェイトは羽を壊そうとした。
しかしそれよりも早く、御風が最後の一手を打つ。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、風よ分解せよ、元に戻れ！」
瞬間、フェイトの体を元に戻された事で圧縮されていた風が叩いた。
「あぁっ！」
文字通り、体の芯から揺さぶられるような衝撃を受けたフェイトは、小さな悲鳴と共に意識を失った。
※

「ぅうん……」
小さく呻きながら、フェイトは目覚めた。
そのまましばしボーっとしていたが、自分が置かれていた状況を思い出し、慌てて身を起こそうとした。
「きゃっ！？」
しかしそれは叶わず、フェイトはまた小さく悲鳴を上げてその場に転がった。
見れば、あの少年の魔法なのか、風の気圏がフェイトの体を幾重にも拘束していた。
（バルディッシュは？）
己の相棒を探すフェイトは、少し離れた所にある樹の根元に立てかけられているバルディッシュを見つけて安堵する。
そして冷静になって辺りを見回したフェイトは、そこが先と変わらぬ河原である事に気付いた。
「よぉ、目が覚めたか」
掛けられた声の方を向くと、先程まで戦っていた少年――御風が立っていた。
「大した怪我がなくてよかった。まぁ実行した本人が何言ってんだって感じだけど」
御風が申し訳なさそうな顔をする。
「さて、勝者の権限。敗者の責務って奴だ。こちらの質問に答えて貰うぜ」
だが、すぐにその顔を引き締め、警戒心を露わにするフェイトに問うた。
「あんた、名前は？」
その質問に拍子抜けしたのか、フェイトは思わず答えていた。
「ふぇ、フェイト。フェイト・テスタロッサ」
「ふーん、フェイトか。きれいな名前だな」
「え。……あ、ありがとう」

またしても思わず礼を言うフェイトに、
（この娘、ちょっと天然だな）
御風はそう思った。
「俺は天馬御風。じゃあ互いの自己紹介が終わった所で、本格的な質問だ」
御風の言葉に、フェイトはぐっと体を固くする。
「まず一つ目。さっきも聞いたが、どうしてジュエルシードの事を知ってる？あいつの話が正しいなら、俺たち以外でジュエルシードの回収者が現れるのはまずあり得ねぇ」
フェイトは黙って答えない。
「ふむ……。では二つ目。フェイトはこの町にジュエルシードがばら撒かれる原因になった輸送船の事故とやらに関わってるか？っつーか、船を落としたのは、お前、もしくはお前らか？」
フェイトは黙って答えない。
「三つ目。お前の背後に何がいる？」
フェイトは黙って答えない。
「俺は時空管理局を知らないけど、時空を股にかけて活動してるって話が本当なら、それは相当でかい組織のはずだ。そんな組織に喧嘩売るような真似を、フェイト一人でできたとは思えねぇ」
フェイトは黙って答えない。
「それは組織か」
フェイトは黙って答えない。
「それは個人か」
フェイトの体が僅かに揺れる。
「それはフェイトの身内――父親か母親か？」
フェイトの体がはっきりと強張った。
「……なるほどな。フェイトが正直者だって事はよくわかった」
「違う！」
それまで黙っていたフェイトが突如叫んだ。
「わ、私一人でやってるの！だ、誰も、誰も関係無いの！」

「いや、喋れば喋るほど墓穴掘ってるって事、気付いてるか？」
御風の言葉に、フェイトはしゅんとして項垂れた。
「さて、悪いけどこのまま仲間の所まで連れてくぜ。色々と詳しい事を聞かなきゃならんからな」
そう言ってフェイトの体に翼を生やそうとした時、御風の鋭敏な感覚が、こちらに向かってくる何かを捉えた。
慌ててそちらに顔を向けると、凄まじいスピードで駆けてくる女の姿が映った。
「ぉおらぁっ！」
女は瞬時に御風の間合いを浸食すると、振りかぶった拳を叩きつけてきた。
瞬時に風の障壁を展開した御風だが、女の力は予想以上に強く、御風は障壁ごと吹き飛ばされてしまった。
「新手か！？」
吹き飛ばされながら態勢を整えた御風は、危なげなく着地すると同時に新たな闖入者を見る。
１８～１９歳ぐらい、ちょうど大学生程度の年齢だろうか。オレンジの長い髪を持った、活発な印象を受ける美女である。
だが、何よりも特徴的なのが、
「……犬耳？」
その頭から生えた犬の耳と、腰のあたりから生えた尻尾である。
「コスプレって訳じゃなさそうだな」
その耳や尻尾が細かく動くのを見て、御風は目の前の女が尋常な存在でない事を知る。
「大丈夫かい、フェイト！？」
「アルフ……。うん、私は大丈夫だよ」
アルフと呼ばれた女が、力任せにフェイトに掛けられていた魔法を引き千切りながら、心配そうに声をかける。
「それならいいけど……。あ、あとこれ」
アルフはいつの間にか回収していたバルディッシュをフェイトに手

渡した。
「ありがとう」
バルディッシュを受け取ったフェイトは、御風に向き直る。アルフもまた、それに並ぶ。その顔は今にも飛びかかって行きそうな程険しい物であった。
「よくもうちのご主人サマにひどい事してくれたね！子供だからって、容赦しないよ！」
「さっきのパンチで十分承知してるよ」
怒るアルフに、御風はげんなりとした表情を見せる。しかし、すぐに状況を分析すべく頭を回転させる。
（状況ははっきり言ってこっちが相当振不利。さすがに二連戦はきつい上に、向こうには無傷の新手が一人だ）
自分とフェイトだけなら条件は一緒なのだが、アルフの存在がその天秤を大きく狂わせる。
このまま戦えば、再び勝つ事は難しい。ましてや、こちらはジュエルシードを守らねばならないのだ。
（なら、取るべき手段は一つ、だな）
御風はこれからの行動を決めると、フェイトに話しかけた。
「保護者が来たみたいだから、お前の身柄は返しとく。気を付けて帰れよ、フェイト」
「あ、うん。ありがとう、えっと、ミカゼ？」
律義に返してくるフェイトに、やっぱり天然だなと思いつつ、御風は密かに構成していた魔法を解き放つ（因みにアルフは「気安くフェイトの名前を呼ぶんじゃないよ！」とまた怒っていた）。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『つむじ風（ヴィルベル・ヴィント）』」
開かれた御風の手の上で、風が僅かに渦を巻く。それはみるみる勢いを増し、あっという間に周囲の砂を巻き上げ、フェイト達の視界をふさいだ。
「わっぷ！？」
「くっ」

顔を腕で覆って、それに耐えるフェイトとアルフだが、数秒後、風が収まった後に御風の姿を発見する事は出来なかった。

※

「くそー！逃げられた―！」

アルフは主人の借りを返せなかったのは悔しいのか、その場で地団太を踏む。

フェイトにしても、まんまとジュエルシードを持ち帰られてしまい、その内心は忸怩たる思いだ。

「それにしても、何だいあいつの魔法は？あんな変な魔法、見た事無いよ」

「うん。たぶん、この世界独自の魔法何だと思う。何でそんな人がジュエルシードを集めてるかは知らないけど、ジュエルシードの発掘者を知ってるみたいだったから、現地で見つけた協力者かもしれない」

「厄介だね。まさか、真っ向勝負でフェイトを負かしちまうとは。……ま、次戦えば、フェイトが勝つだろうけどね！」

アルフの言葉に、フェイトは力強く頷いた。

「うん、今度は負けない」

そう、次は負けられない。負ける訳にはいかない。自分を待ってくれている母のため、そして自分自身の望みのために、絶対に負けられない。

決意を新たにしたフェイトの脳裏に、今日戦った、もう一人の魔導師の姿が浮かんだ。

自分と同じくらいの女の子。対話でこちらとコンタクトを取ろうとしてくていたのに、問答無用で落としてしまった。

（悪い事、したな。でも、ジュエルシードを回収しようとしてたから、あの子もミカゼの仲間なのかもしれない）

フェイトは、立ち塞がるであろう二人の障害に、暗澹たる思いにな

った。

※

「つ、疲れた……」

フェイト達から逃れた御風は、近くにある公園のベンチでぐったりしていた。

『鮫』、フェイトと強大な敵との2連戦は、御風の魔力を極限まで使わせた上、それらの戦いによりもたらされた疲労感により、御風は限界に近い有様であった。

「あっ、いた！」

「御風！」

ぐったりしていた御風は、己を呼ぶ声にのろのろと顔を上げた。

視線の先で、なのはとユーノがこちらに向かってくるのが見えた。

「御風くん、大変なの！……って、やけに疲れてるけど、どうしたの？

「あー……、気にしなくていい。んで、何がそんなに大変なんだ？」

御風が話の先を促すと、なのはとユーノは怒濤の様に喋り始めた。

「そうだった！あのね、お茶会で猫がジュエルシードで！」

「それで女の子が僕たち以外で魔導師で猫が大きくて！」

「うん、落ちつけ」

何を言ってるのかさっぱりわからないなのはとユーノに、御風は落ち着くように指示する。

「深呼吸して、何を言いたいのか纏めろ」

その言葉に、二人はニ、三度大きく深呼吸した。

「……もう大丈夫だ。なのは、僕が話すよ」

「うん」

ユーノが代表して話し始めた。

「御風も知ってるように、僕となのはは今日なのはの友達の家にお茶会へ行って来たんだ」

「らしいな」
「そこで、偶然ジュエルシードの発動を感じた僕達はそれを回収しようとしたんだけど……」
「別の魔導師が現れてジュエルシードを掻っ攫って行った、か？」
御風の言葉に、なのはとユーノが驚きに目を丸くした。
「ど、どうしてそれを……。って、まさか！？」
「おお、やっこさん、俺の方へも来やがったぜ」
「「ええっ！」」
なのはとユーノの声が重なる。
「そ、それでどうなったの？」
「その前になのは。こいつを」
「ふぇ？」
言い募ろうとしたなのはを遮り、御風はポケットに入っていたジュエルシードを手渡した。
「じ、ジュエルシード！？」
「どうしたの、これ！？」
「どうでもいいけど、さっきから驚いてばっかだな。まぁいい。そいつは今日『鮫』みたいな怪物を倒してゲットした奴だ」
「何か、不思議な力で覆われているね。これは？」
「前々から考えていた【魔法（マテリアル・パズル）】式の封印だ。ちょっとしたもんだろ？」
得意気な御風に、ユーノが感心したように頷く。
「色々できるんだね、御風の魔法は」
「まぁ、日々研究と修行してるからな。それはともかく、俺がそいつを封印するとほぼ同時にあの金髪が襲ってきやがったんだ。なんとか撃退したがな」
「そっかぁ……」
何故かしゅんとした様子のなのはに御風は訝しげな顔をする。
「どうした、なのは？」
御風が尋ねると、なのはどこか力ない笑みを浮かべ、

「うん……。御風くんはこうしてジュエルシードを回収してきたのに、私はあの子に負けちゃって、ジュエルシードまで取られて……。駄目だなぁ、私……」
「なのは……」
しょげかえるなのはを、ユーノが心配そうに見る。
そして御風は、
「真っ向！唐竹割り！！」
「みぎゃっ！？」
「な、なのはー！？」
どこぞの鉄道勇者の必殺技の如き手刀をなのはに食らわせた。
悶絶するなのはにユーノはおろおろする。
「あのな、なのは。俺は自分の魔法を使いこなす為に今まで修行してきてるし、今日戦ったあの金髪にしても戦闘訓練っぽい物を受けてるように感じた。ついこの間までただの小学生だったお前が、そんなのと自分を比べるなんて百年早い」
「あうぅ……」
御風の言葉を聞きながら、なのはは頭を押さえて涙目になっている。
（最も、こいつは戦う度に動きが洗練されてるっつーか、強くなってるんだよなぁ）
口ではなのはを諫めながら、御風はなのはの驚異的な成長速度を驚異的に思っていた。
だが、その事を口にするのはなのはのためにならないように思えたので、あえて口に出さなかった。
「……ジュエルシードを集めてると、またあの子とぶつかっちゃうのかな」
不意に、ポツリとなのはが呟いた。
「……怖いのか？」
御風の問いに、なのはは首を振る。
「そうじゃない。そうじゃない、けど……」
その言葉に確かに戦いへの恐怖はなかった。

ただ、何か別の気持ちが、なのはの中で渦巻いているようだった。
そんななのはの様子を見ながら、御風もまた、あの少女――フェイト・テスタロッサの事を考えていた。
金色の髪を靡かせ、雷光と共に天を舞う、あの魔導師の少女の事を。
「フェイト・テスタロッサ、か」
その言葉に何が込められているのか、御風にもわからなかった。
ただ、あまりにも小さく呟かれたその名は、他の二人には聞こえず、風の中に溶けて消えた。

風と雷（後書き）

御風ＷＩＮ！
辛うじて御風がフェイトに勝利しました。
さて、次回は温泉回。なぜか連れて来られた御風は、戦闘民族高町家と、彼らを取り巻く濃ゆい面子に圧倒される事になります。
そしてその夜、御風は再び雷を纏う魔導師の少女と邂逅します（もちろんなのはも）。
それでは、また次回。

温泉と決闘（前編）（前書き）

前話に少しエピソードを付け加えました。
後、前回のあとがきの予告とは少し変えました。ご了承ください。
またしても前・後編に分けてしまったｏｒｔ。

温泉と決闘（前編）

「旅行？」
日本の全国的な連休も近付くある夜、御風は食卓を囲む母の口から飛び出してきた言葉をオウム返しした。
「そ、旅行。今度のお休みを利用して、家族三人で出かけましょうって話なんだけど、どう？」
「う～ん……」
母の言葉に御風はしばし考える。
少し前、フェイトと名乗る少女と戦った時以来、ジュエルシードは発見できていない。
進展しない状況に焦りを覚えなくもないが、
（ちっと、根を詰めすぎてんのかもな。そう言えば、なのはも家族とどっかに遊びに行くって言ってたし）
因みにいつかの様に誘われた御風だが、前回と同じ理由でお断りしていた。
「いいよ、何も予定なんてないし」
御風のその言葉を聞いた母は少し笑った。
「小学生に予定なんてあるの？」
「近頃の小学生は忙しーの」
母と軽口を叩き合う御風は、
（少しリフレッシュしますか）
そのような理由で、旅行へ行く事に決めた。
いったんジュエルシードの事は忘れ、久しぶりにのんびりしようと、そう思っていた。

※

「そう思っていた時期が俺にもありました」

「？何言ってるの？御風くん」
どこか遠くを見つめる御風に、なのはは首を傾げた。
御風達家族がやって来たのは、海鳴温泉。
地元の名所ともいうべき近場の温泉である。
そこで御風は、本来ならば出会うはずもない友人、高町なのはに遭遇していた。
「いや、何でいるの、ここに？」
「それはこっちのセリフだよ！私達はね、ちょっとした家族旅行に来たんだよ」
「まぁ、俺んチもだけど」
そう御風となのはが話していると、なのはの背後から二人の少女が駆け寄って来た。
「もう、どうしたの、なのは？急に走りだしたりして」
「あれ？なのはちゃん、その人知り合いなの？」
どうやらなのはの友人らしい。
家族旅行に同行するくらいなのだから、仲は相当いいのであろう。
一人は長い金髪の向こう気の強そうな少女。その所作の所々が妙に洗練されているので、もしかしたらいいとこのお嬢様なのかもしれない。
もう一人は、長い紫がかった髪の、正にお嬢様、といった感じの少女であった。
更に追記するならば、二人ともかなりの美少女である。
（確か、バニングスに月村、だったな）
同じクラスの男子達が相当熱を上げているので、御風は自然と彼女らの事を知っていた。
「ごめんね、アリサちゃん、すずかちゃん。知ってる人がいたから、つい。御風くん、紹介するね。二人とも私の友達、アリサ・バニングスちゃんと月村すずかちゃん」
なのはが御風に二人を紹介する。そして二人にも御風を紹介する。
「アリサちゃん、すずかちゃん。こちらは天馬御風くん。少し前に

友達になったの」
「「初めまして」」
御風、ありさ、すずかの声が重なる。
「なのはにあたし達の知らない男友達がいるとはね～」
アリサが胡散臭い物を見る様な目でこちら見れば、
「たまたま行った旅行先で会うなんて、凄いね～」
すずかは何ともほわほわした雰囲気を漂わせながら言う。
「俺もここでなのはに会うとは思わなかったよ……」
そして御風がどこか諦めたような口調で言った。

※

その後、その現場を母に目撃された御風は、「一緒に遊んでらっしゃい」との有り難いお言葉を頂き、なのは達と連れ立って旅館内を散策していた。
「ふ～ん、それじゃあ、二人には共通の友達がいて、その人の探し物を一緒に探してて知り合ったのね」
微妙に真実を混ぜた御風の説明に、アリサは納得したように頷いた。
「で、その友達はここに来てないの？」
「さてな。でも、俺達が偶然出会った様に、あいつもたまたまここに来てるかもな」
言いながら、御風はなのはの肩の上のユーノをちらりと見やる。その視線に気づいているのか、ユーノは少し冷や汗をかいた。
「おーい、なのは」
その時、なのは達に大学生ぐらいの青年が声を掛けてきた。
「あ、お兄ちゃん」
どうやらなのはの兄らしいその人物はなのは達を探していたようだった。
「どこに行ってたんだ。っと、その子は？」
青年が御風を訝しげに見る。

「友達の御風くんだよ。さっきそこで偶然会ったんだよ」
「初めまして、天馬御風です」
御風が頭を下げると、青年も名乗った。
「ああ、初めまして。俺は高町恭也。なのはの兄だ」
（動きに隙がねぇ。何かやってんな、この人）
恭也の物腰から、御風は目の前の青年が何らかの格闘技をやっていると推測した。
「おお！あのなのはに男の子の友達なんて！ひょっとして、彼氏だったりするのかな？」
すると突然、そんな元気な声と共に、恭也の後ろから高校生くらいのメガネをかけた少女がひょこりと顔を出した。
「お姉ちゃん」
今度は姉であるようだ。
「こら、美由希。いきなり失礼だろ」
恭也が少女を諫めると、少女はこちらに軽く謝りながら名乗った。
「あはは、ごめんね。私は高町美由希。なのはのお姉ちゃんだよ」
少女――美由紀に、御風は再び頭を下げた。
「まったく……。それで、天馬君」
「あ、御風でいいですよ。それで、何です？」
突然こちらに話しかけてきた恭也に、御風が怪訝な顔をする。
「ああ、なら俺も恭也でいい。……いや何、あれだ、君は実際、なのはとどういう関係なのかなぁと思ってな……」
その言葉と共に、恭也から御風に向けて威圧感が高まる。
（この人、シスコンだな）
そう思った御風だが、自分に注がれる視線がもう一つある事に気付いた。
そちらを見やれば、一人の男性がこちらをこっそり窺っているのが見えた。
恭也とよく似た顔立ちからして、どうやらなのはの父親らしかった。
（親ばかも居るのか……）

御風はげんなりとしたが、ここである事を思いついてほくそ笑んだ。
「ふっふっふっ。心配召されるな、恭也さん。俺となのはは間違いなくただの友人だ。ただ……」
「ただ？」
「なのはには相思相愛と言っても過言ではない、ラブラブな彼氏がいるんだよー！」
御風の背後に眼鏡をかけた変な髪型の男のオーラが浮かんだ。
「「「「な、なんだってー！！」」」」
恭也、美由希、アリサ、すずかが大声を上げながら驚愕した。やはりその背後に謎の男４人組のオーラが浮かんだが、誰も気にしなかった。
「ぶふぅぅぅぅっ！」
その瞬間、ユーノは思わず人目も気にせず噴出し、
「か、彼氏なんてそんな、事もあるかも知んないけど、相思相愛なんて、思ってるけど、ラブラブなんて、そんな、感じかもしれないけど～」
なのはは赤くなった頬を押さえてくねくねと体を揺らしていた。
「ちょ、なのは、どーゆー事！？」
「なのはちゃん凄ーい！恋人さんがいるんだー！」
「あ、あれ？私、年下の妹に先越された……？」
くねくねするなのはにアリサが叫び、すずかが感心し、美由希は愕然とした。
「どどど、どう言う事なんだ、御風！」
「そそそ、そうだとも！あ、あのなのはに、あの、か、可愛いなのはに恋人、だと……！？」
一方御風には恭也と瞬間移動したかと思うほどに早さで接近したなのは父が詰め寄っていた。
「残念ながらこれは真実！まぁ、友のプライバシーに関わる問題だから、詳しい事は喋りませんがね」
先にけん制球を投げながら、御風は続ける。

「だが、あいつは誠実ないい奴だから、必ず直接挨拶に行くはず！そう必ず！直接！！」

嫌な部分を強調する御風に、ユーノはようやく我に返るが、時すでに遅し。

（なんか知らない間に、物凄くハードルが上がってるー！？）

ユーノは顔を青くした。そしてそれを聞いた高町家の父と兄は、

「ふふ、そうか……。来るのか、直接……。命知らずにも」

「可愛いなのはを誑かした不届き者が、必ず！直接！挨拶に……！うふふ、うふふふふふ」

凶悪犯罪者も真っ青な邪悪なオーラを放っていた。

そしてその騒動は、旅館の人にに怒られるまで続いたのであった。

※

その後落ち着いた一行は、せっかく温泉に来たのだからと、早々に浴場へと向かった（因みに、御風の両親は二人で散歩に出かけた様だった）。

「さあ、ユーノ！洗ったげるわ、来なさい！」

「きゅうぅぅ！？」

アリサの手から逃れんと、ユーノは必死で抵抗している。

「ユーノくんと一緒にお風呂……。恥ずかしいけど、ユーノくんなら、私……、きゃっ？」

赤くなってもじもじするなのはを、すずかは不思議そうに見ていた。

「はぁ……」

そして女として妹に先を越された美由希は、生気の抜けた顔でため息をさっきからついている。

「きゅぅっ！」

「あっ！」

その時、アリサの手から脱出を果たしたユーノが、慌てて御風の肩によじ登った。

「あー、御風くんの所に行っちゃったねー」
「もうっ、しょうがないわねー」
すずかとアリサが残念そうな顔をすると、
「ユーノくんとの……、お風呂が……！」
なのはは何故かとてもがっかりしていた。そして美由希は相変わらずだ。
「こいつも一応オスだし、こっちがいいのかもな」
「フェレットにそんなの解る訳ないじゃない」
御風が宥めるが、アリサはプイッと顔を背けた。
「まぁいいわ。代わりに御風！ちゃんと綺麗にしてあげるのよ！」
アリサは御風にそう言いつけると今だがっかりしているなのはを引きずって女湯の方へ入って行った。すずか達も後に続く。
それを見送った御風は肩の上にいるユーノにだけ聞こえるような小さな声で呟いた。
「ヘタレ」
「う」
ユーノは何も言い返せず項垂れた。
そんなユーノを連れて男湯の浴場へ入った御風は、そこに恭也と高町父――士郎が既に入っているのを見つけた。
「おや、御風くんも来たのかい」
士郎が御風に気付いた。
「いやー、親子水入らずの所すいません」
「はっはっはっ、子供がそんな気を使うもんじゃないよ」
「そうだな、御風は少し年寄りくさい所があるかもな」
「ひでぇ」
談笑しながらお湯につかる三人は、体の芯から温まる温泉に「は～」と心から息を吐いた（ユーノは小さな桶の中にお湯を張って貰い、そこに浸かっている）。
その中で、士郎だけはそのまま「はぁ……」暗いため息にシフトした。

「あ～、さっきの、言わなかった方がいいでしたかね？」
ため息の理由を察した御風が申し訳なさそうにすると、
「いや、何も知らされないままその日を迎えるよりずっといい。ただね、こういう話は美由希の方が先だと思ってたから、ちょっとショックでね」
「そいえば、美由希さんて、彼氏はいないんですかね？美人なのに」
御風が首を傾げると、恭也はしばし考えるような仕草を見せた後、首を振った。
「いや、俺の知る限りではいないな。学校が終わるとすぐに帰って来てるみたいだし、休日は一緒に剣の修業をしている」
「やっぱりお三方共、武道やってるんですね」
「ん？わかるのか？」
「ま、動きでなんとなく。それにしても、あんな美人に恋人がいないなんてもったいないなぁ。俺、年下だけど、立候補しちゃおうかなぁ」
「な～んて」、と続ける前に、恭也と士郎から殺気が立ち昇る。
「御風くん」
「もしその時は」
「「俺達の屍を越えて行ってからにするんだな」」
（なんつー殺気だ……！）
小学生にぶつけるようなものでは無い気迫を放つ二人に、御風はごくりと唾を飲み込んだ。
そして、目の前にいる修羅ニ匹の屍を越えねばならない事が決定したユーノは、その顔を青を通り越して白くさせていた。

※

「あ～、いいお湯だった」
「そうだね」
少しのぼせた御風は、恭也と士郎を置いて先に上がり浴衣に着替え

ると、ユーノを肩に乗せてそのまま旅館を探検する事にした。
修羅達から離れられたユーノも、少し元気を取り戻していた。
その時、御風達は前方で自分たち同様浴衣に着替えた三人娘の内の金髪、アリサがぷりぷり怒っているのに気が付いた。
「お～い、どうした？」
のんびりと近づいてくる御風に、アリサはいいとこに来たとばかりに己の憤懣をぶちまけた。
「ちょっと聞いてよ、御風！さっきまでここに変な酔っ払いがいてさぁ、絡まれて大変だったのよ！」
「酔っ払いねぇ。まぁ、温泉宿だし、そいうのも居るだろ」
「だとしても公共のマナーぐらいは守って欲しいわ！」
そう言うと、アリサは再びぷりぷりしだした。
「えっ」
突然、肩の上のユーノが小さく驚いた。そしてなのはも、妙に硬い表情をしている。
「まぁいいわ。それより、なのは、すずか、御風！温泉に来たなら卓球よ！変な酔っ払いなんて忘れて遊ぶわよ！」
怒りが納まって来たのか、元の調子に戻ったアリサが、みんなを卓球場へと誘った。
否もなくその後ろに付いた御風は、こっそりとユーノにさっきの事を尋ねた。
「何かあったか？なのはの様子も変だ」
「うん、なのはから聞いたんだけど、その酔っ払い、女の人だったらしいんだけど、最後になのはに『念話』で話しかけて来たって」
「『念話』で？」
『念話』を使うと言う事は、まず間違いなく魔導師かその関係者。
そして、御風にはその女に心当たりがあった。
「おい、ユーノ。なのはに、その女はオレンジの髪してたか聞いてくれ」
「え？う、うん。……そうだって、なのはは言ってる」

「間違いねぇな。そいつ、この間の金髪の仲間だ」
「そ、そうなの？」
「この間言うの忘れてたな。向こうにはオレンジ髪の犬耳尻尾の女が付いてるって」
「犬耳……」
その言葉に黙りこむユーノに、御風はこいつ、もしやケモナーかと思った。
（なのははには犬耳、或いは猫耳を渡しておかねば）
変な決意を固める御風に、ユーノが考えを口にした。
「その女性は、もしかしたら『使い魔』かもしれない」
「『使い魔』？」
『使い魔』とは、魔導師が作成し、使役する魔法生命体の事である。動物が死亡する直前、または直後に、人造魂魄を憑依させる事で造り出す。
使い魔は主人の魔力によってその存在を維持し、故にこそ主人のために行動する。
だがそうでなくても主人に対しては好意的な場合が多く、時として主人の目的のためなら犯罪行為すら辞さない事すらある。
そのような説明をユーノから受けた御風は、感心したように頷いた。
「そっちの【魔法】は、そんな事も出来るのか」
「まぁね。それよりも、使い魔らしい存在がここにいるって事は……」
「あの魔導師もここにいるって事」
「それはつまり……」
「「ジュエルシードがここにある可能性が高い」」
ユーノとハモりつつそう口にした途端、御風は小さく頭を抱えてため息をついた。
「どうしたの、御風？」
「いや……。せっかくリフレッシュしに来たのになぁ、と思ってな……」

そう答える御風に何とも言えず、ユーノはしばし虚空に目を泳がせた後、御風と揃ってため息をついた。

温泉と決闘（前編）（後書き）

温泉回でした。
前半が予想以上に濃くなってしまったので分けましたが、後編も頑張って詰め込んで行きます。
少し次話の投稿が遅れて申し訳ありませんでした。
なるべく連続投稿を目指しているのですが、何しろ即興で書いている物ですから、文章が出て来ないとこうなってしまいます。これからも時折遅れるかもですが、ご了承ください。
それでは、また次回。

温泉と決闘（後編）（前書き）

半分以上書いていた文が、何かの拍子に消えたショックで思わず不貞寝しましたｏｒｚ。
それでは、後編です。

温泉と決闘（後編）

暗い森を一人の少女が走っている。
高町なのは。魔法少女な小学3年生である。
浴衣から普段着に着替えたなのはは、肩にユーノを乗せてジュエルシードの魔力が感じられた場所へ向かっていた。
だが、その傍らにいつも行動を共にする【魔法使い】――天馬御風の姿はない。
「こんな時、御風くんが『念話』を使えないと不便に思うね」
「まぁ仕方無いよ。でも御風はこの手の感覚に鋭いみたいだし、念のために彼の携帯にメールも打っておいた。きっとすぐに来てくれるよ」
ユーノの言葉に頷いたなのはは、御風を信じて今は先へと進んだ。
その道中。
「あっ」
「これは、まさか――！」
それまで猛々しく感じられていたジュエルシードの魔力が、不意に減衰したのだ。
それが示す事実はただ一つ。
「ジュエルシードが封印された！？」
「なのは、急ごう！」
「うん！レイジングハート、お願い！」
『スタンバイ・レディ。セット・アップ』
天に掲げたレイジングハートから桃色の閃光が立ち昇り、なのははバリアジャケットを纏い、杖の形となったレイジングハート握りしめ、その場所へと更に走る。
数分後、小さな橋がかかる小川まで来たなのは達は、そこにジュエルシード手にした金色の髪の少女と、オレンジの髪の女性の姿を見つけた。

「あ～ら、あらあらあらあら」
女性――アルフが駆け付けたなのは達を嘲るように言った。
「子供はいい子でって言わなかったけか？」
「それを、ジュエルシードをどうするつもりだ！」
ユーノが鋭い声を上げる。
「さぁね、答える理由が見当たらないよ。それにさぁ、あたし親切に言ったよねぇ」
アルフがひたりとなのは達を見つめる。
「いい子でないと、ガブッと行くよ、って」
その言葉が終わるや否や、アルフの瞳孔が獣の如く縦に裂け、髪が膨張したように広がる。手から鋭い爪が生え、口からは鋭い牙が伸びる。
「オォォォォォォォォッ！！」
次の瞬間そこにいたのは、月明かりに大きく吠える、一匹の狼の姿であった。
「やっぱりあいつ、あの子の『使い魔』だ！」
「『使い魔』……」
事前にユーノ達から目の前の存在について聞いていたなのはだが、自分と同じ人の姿をした者が獣に変わる光景と言うのはそれなりにショッキングだったらしく、目を大きく開けて驚いている。
「先に帰ってて。すぐに追いつくから」
アルフはフェイトにそう言ったが、当の本人は首を横に振ってそれを拒否する。
「あの人は、どこ？」
突如フェイトはなのは達に尋ねた。
「あの人？」
「見た事もない、不思議な魔法を使うあの人――ミカゼは、あなた達の仲間じゃないの？」
なのはは目の前の少女が友人の【魔法使い】の名を知っている事に内心で驚きつつ、その問いに答えようと口を開きかけたその時。

ばさり。
夜気を押し広げて羽ばたく羽音が、一同の耳に届いた。
「俺を呼んだかよ、フェイト」
見上げればそこに、月明かりを受けて煌めく双翼を背負った【魔法使い】――天馬御風が浮かんでいた。
「御風くん！」
「御風！」
なのはとユーノがようやく合流した仲間に喜びの声を上げる。
「ミカゼ……」
「あいつ、また……！」
一方フェイトは油断なく御風を見据え、アルフが先日の借りからか唸り声を上げて御風を睨みつけた。
「待たせたな、なのは、ユーノ」
因みに御風は余程急いで来たのか、少し着崩れした浴衣に、足元はスニーカーというちょっと間抜けな格好をしている。
そんな御風に、フェイトは手にしたバルディッシュを突き付ける。
「怖い顔してんな。察するに、先日のリベンジって所か？」
軽口を叩く御風に、
「今度は、負けません」
フェイトは凛、とそう告げた。
「勇ましいね。だが今夜のお前の相手は俺じゃねぇ。……そうだろ、なのは！」
「！」
それを聞いたフェイトが振り向くと、そこには突然名指しされたなのはがワタワタと慌てている姿があった。
「わ、私？」
「何か、こいつに言いたい事があるんじゃねぇのか？」
御風の言葉に、なのははここ数日、心の中に蟠るもやもやとした物を思い出した。
「……私……」

今だ形にすらならないそれを、なのはが何とか口にしようとした瞬間、

「ごちゃごちゃごちゃうるさいねぇ！フェイトの邪魔をするんだったら、相手が誰だって容赦しないよ！」

それまでの話の流れに焦れたのか、アルフが大きく跳躍し、牙を剥きだしてなのはに襲い掛かった。

どがぁぁっ！

だがその行動は、なのはの足元に降りたユーノが張った結界によって阻まれる。

「なのは、御風！あの子をお願い！」

結界を維持しながらユーノが叫ぶ。

「させるとでも思ってんの！？」

結界をその鋭い爪でがりがりと削りながら、アルフが吠える。

「させてみせるさ！」

負けじと声を張り上げたユーノの足元で、更なる魔法陣が展開される。

「移動魔法？まずい！」

焦るアルフを呑みこんで、ユーノの魔法は光と共に敵の一人を遠くへと連れ去った。

「ほぅ。やるな、ユーノ」

見事敵を引きつけて見せたユーノの手際に、御風が称賛の声を上げる。

「結界魔法、強制転移魔法。いい使い魔を持っている」

フェイトもまた僅かに感心したような口ぶりで言った。

「ユーノくんは、使い魔って奴じゃないよ。私の大切な……ダーリンなんだから？」

ぽっと赤くなりもじもじし始めたなのはを、フェイトは不思議な物を見るような目で見つめた。

（なのはの奴……。最近自重しなくなってきたなぁ）

変な方向に突き抜け始めた友人を目の当たりにした御風は、遠い目

をしながら思った。
「おいなのは。……いい加減に正気に戻れ」
「みぎゃっ！？」
近くに寄って呼び掛けてももじもじしてトリップしたままのなのはに、御風は容赦なく手刀を頭頂部に食らわせた。
「魔力の完全に戻ってねぇユーノ一人じゃ心配だから、俺はあっちのフォローに回る。お前はあいつを頼む」
ぷしーっと頭から煙を吹くなのはを尻目に御風は告げる。ようやく正気に返ったなのはは、その言葉を聞いて大きく頷いた。
「うん、わかったの！気をつけてね！」
「任せな」
ちらりとフェイトを一瞥した後、御風はばさりと翼を広げ、ユーノ達がいるであろう方向へ飛び去った。
「……で、どうするの？」
先程のなのはの奇行を気にした様子もなく、フェイトは静かに問いかけて来た。
「話し合いで、なんとかできるって事、ない？」
その冷たい口調に少したじろぎながら、なのははそう提案してみる。
「私は、ロストロギアの欠片を、ジュエルシードを集めないといけない。そしてあなたも同じ目的なら、私達はジュエルシードをかけて戦う敵同士って事になる」
しかし、フェイトは冷静にそう返した。
「だから！そう言う事を簡単に決めつけないために、話し合いって必要なんだと思う！」
それを受けたなのはは強い口調でそう主張した。
「……話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ、きっと何も変えられない。……伝わらない！」
だが、それよりも更に強い思いを込めたフェイトが、言うなりバルディッシュなのはに突き付けた。
「！」

驚くなのはの目の前からフェイトの姿がかき消える。瞬時になのはの背後に回ったフェイトはその背中に杖を振るうが、間一髪、なのはは身を屈めてそれを躱した。

『フライアーフィン』

なのはの靴から小さな光の翼が生え、更なる追撃を掛けるフェイトの攻撃から、なのはの体を空中へと押し上げる。

「でも、だからって！」

「賭けて。それぞれの持つジュエルシードを、一つずつ」

なおも言い募ろうとするなのはの言葉を封殺するかのように、フェイトは告げる。

いまだ定まらぬ思いに瞳を揺らすなのはと、強い思いを胸に秘め、その決意を真紅の瞳に宿したフェイト。

それぞれの「ココロ」を抱えて、二人の魔法少女は再び激突した。

※

ユーノは森の木々を縫う様に走っていた。

その後を巨狼と化したアルフが追いかける。

「ちょろちょろちょろ、逃げんじゃないよ！」

苛立ったアルフが咆えるが、ユーノは当然足を止めない。

「使い魔を作れる程の魔導師が、何でこの世界に来ている！それにジュエルシードについて、ロストロギアの欠片について何を知っている！」

「ごちゃごちゃとぉ！」

業を煮やしたアルフがユーノに飛び掛かるが、ユーノは小さな体を生かしてそれらを躱していく。

だが、

「うるさいんだよぉっ！」

「がっ！？」

予期せぬ方向からの衝撃に、ユーノの体は吹き飛んだ。

アルフがその尻尾でユーノを跳ね飛ばしたのである。
そのまま樹に叩きつけられたユーノは、小さく苦悶の声を漏らす。
「貰ったぁ！」
その隙を逃すアルフではない。嬉々としてユーノに飛び掛かり、この生意気なチビにお仕置きしてやろうと爪を振り上げる。
思わず目をギュッとつぶるユーノ。
しかし次の瞬間、
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『風の砲撃（ヴィント・カノーネ）』！」
突如飛来いした風の砲撃が、アルフの体を強く叩いた。
「くぁっ！」
たまらず吹き飛ばされたアルフは森の木々の中に突っ込んだ。
「今のは！」
驚いたユーノが砲撃が来た方向を仰ぎ見ると、果たしてそこに、魔法を放った直後の体制の御風がいた。
「あんまりうちのフェレットを苛めないでくれよ？」
「御風！」
そう嘯いた御風に、ユーノが駆け寄った。
「どうしてここに？それに、なのはは！？」
「俺がここにいるのは魔力が回復し切って無いお前をフォローするためだ。んで、なのはは……」
その時、遠くの空で金色と桃色の光が瞬いた。
「あそこで、戦っている」
「そんな！今のなのはじゃ、あの子に勝てるかどうかわからないのに！フォローなら、僕じゃ無くてなのはの方に……！」
「んな事言うけどよ、俺が来てなかったら、やばかったじゃねぇか」
「そ、それは……」
口籠るユーノに、にやりと御風は笑う。
「お前に何かあったら、俺がなのはに殺されかねん。それに、なのはにはあいつと話す機会が必要だろうさ」
御風は二人の魔法少女が叩く空を見上げる。

「なのはの傍にいたお前なら気付いてんだろ？なのはがあいつに―フェイトに何か、こう、思う所があるみたいな感じになってんの」

ユーノは御風の言葉で思い出す。

確かにここ数日、正確に言えば、なのはがあの魔導師に負けて以来、時折茫洋と虚空を見つめていた事を。そして恐らくその視線の先に、金色の髪を靡かせた黒い魔導師を幻視していたのであろう事も。

「でも、話って言うか、戦ってるじゃないか！！」

しかし、御風はユーノのそんな言葉に呵呵と笑うと、

「何、戦闘も一つのコミュニケーション手段だろ。言葉だけじゃ伝わらねぇし変えられねぇ事もあるんだよ。いわゆる一つの、拳で語るって奴だ！」

「お、女の子に使う言葉じゃないと思うけど……」

奇しくも、御風はその時フェイトと似たような事を口にしていたが、その後が何かずれていた。

その時、茂みがが去りと音を立て、御風達がそれに気付くと同時に、そこからアルフが飛び出してきた。その瞳には怒りが燃えている。

「よくもやってくれたねっ！この間といい、今といい、お前はいい加減邪魔だぁ！」

牙を剥いて迫るアルフに、御風は風の障壁を展開してこれを迎え撃つ。

轟音を立ててそこにぶつかるアルフは牙と爪を駆使して御風の障壁を破らんとする。

「この間は咄嗟だったから吹き飛ばされるなんて無様晒したけどよ！しっかりと力入れりゃ、防ぐのは難しくないんだぜ！」

その言葉通り、アルフが全力を込めても風の障壁は揺るがない。更に、御風は風の圧力を高め、障壁に懸りきるアルフを再び吹き飛ばして見せた。

「ちぃっ！」

しかし今度は茂みに突っ込むような事をせず、アルフは態勢を立て直して着地する。

そして顔を上げた瞬間絶句する。
アルフの周囲を取り囲むように、羽を生やした石や木の枝など、様々な物が浮かんでいた。
「な、何だいこりゃっ！？」
驚愕するアルフに、御風は不敵に笑った。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー。最初に言っておく。……物凄く痛いぞ」
「え、」
固まるアルフに向かって、周囲の物体群がばさりと羽を広げた。
森の中に、アルフの悲鳴が響き渡った。

※

『サンダースマッシャー』
バルディッシュの声と共に、フェイトの掌から先に回る魔法陣から、金色の砲撃が放たれる。
『ディバインバスター』
それに抗すべく、なのははレイジングハートの先端から桃色の砲撃を放つ。
二つの魔力砲撃がぶつかり合い、空間が軋みを上げる。
「……！」
フェイトは相手の砲撃の予想以上の威力に形の良い眉を少し顰める。
対するなのはは、今だ心に戸惑いを抱えつつ、ジュエルシードのためにも負けられないと、放つ砲撃に更なる魔力を注ぎ込む。
「レイジングハート、お願い！」
『オーライ』
先の砲撃に重なる様に、再び桃色の閃光が迸る。
倍加したなのはの砲撃は、フェイトのそれを突き破り、フェイト本人すらも飲み込んだ。
「いよっしゃぁっ！」

「なのは、強い！」
御風とユーノが歓声を上げるが、その横でボロボロになっていたアルフが口元を歪めた。
「……甘いね」
その時、何かに気付いたなのはがハッと上を見上げる。
するとそこには、上空へ逃れて砲撃を躱したフェイトが、こちらに向かって急降下してくる姿があった。
『サイズスラッシュ』
バルディッシュの先端から三日月状の光の刃が伸びる。
間髪いれず振り降ろされたそれに、なのはは目をつむる事しかできなかった。
だが、しかし、その刃はなのはの喉元で止まっていた。他ならぬ、フェイト自身が止めたのだ。
時が止まったかのように動かない二人の間で、レイジングハートが煌めいた。
『プットアウト』
「レイジングハート、何を!?」
吐き出されるジュエルシードに、なのはが己が愛杖を問い質すかのような声を上げた。
「きっと、主人思いのいい子なんだ」
相手のデバイスの忠誠心を褒めながら、フェイトは吐き出されたジュエルシードを手にした。
「あっ……」
それを悲痛な表情で見るしかないなのは。
地面に降り立ったフェイトは、御風をしばし見つめた後、
「あなたへの借りは、いずれ。……アルフ、帰ろう」
呼びかけられたアルフは、狼から人の姿に戻りながら嬉しそうに笑った。
「さっすがあたしのご主人さま！んじゃぁね、おチビちゃん達♪」
「ボロボロの姿で言ってもカッコ悪いだけだぞ」

「うるさいね！」
人の姿に戻ってもボロボロなアルフであった。
「待って！」
去り行くフェイトに、遅れて空から舞い降りたなのはの声が掛かった。
「できるなら、私たちの前にもう現れないで」
振り向きもせず、フェイトは相変わらずの冷たい声で言う。
「もし次があったら、今度は止められないかもしれない」
「……名前！」
「？」
「あなたの名前は！？」
「……ミカゼにもう、告げてある」
「あなたの口から聞きたいの！」
フェイトは少しの沈黙の後、
「……フェイト。フェイト・テスタロッサ」
「あの、私は」
なのはが自分も名乗ろうとするも、フェイトはそれを無視して飛び去ってしまった。
「ばいば～い」
アルフもそれに続く。
後に残されたのは、寂しそうな表情のなのは。困惑顔のユーノ。そして。
「とりあえずは、自己紹介から、か……」
ままならなかった二人の魔法少女の『会話』に嘆息する御風が残されていた。
月明かりが、三人の姿を静かに照らしていた。

温泉と決闘（後編）（後書き）

二人の魔法少女の2度目の激突でした。
次回は親友とのすれ違い、そして3度目の激突です。
次こそは、主人公が活躍します（笑）。
それでは、また次回。

過去の『思い』と今の『思い』（前書き）

またしても予告よりチョイ変更。後、少し短めかも。

過去の『思い』と今の『思い』

「いい加減にしなさいよっ！」
ばんっ、と机を強く叩く音と共に、アリサ・バニングスは高町なのはを怒鳴りつけた。
「この間から何話しても上の空でボーっとして！」
アリサの怒声に驚いていたなのはは、その言葉に申し訳なさそうにうつむいた。
「ご、ごめんね、アリサちゃん……」
「ごめんじゃないっ！」
だが、アリサの怒りは治まらない。
「あたし達と話してるのがそんなに退屈なら、一人でいくらでもボーっとしてなさいよっ！……行くよ、すずか！」
そう言ってなのはに背を向けるアリサ。すずかはそんなアリサとなのはの間でおろおろと視線を彷徨わせる。
「な、なのはちゃん……」
気遣うように声を掛けるすずかに、なのは力の無い笑みを返した。
「いいよ、すずかちゃん。今のはなのはが悪かったから」
「そんなこと無いと思うけど……。とりあえずアリサちゃんも言い過ぎだよ。私、少し話してくるね」
そう言うと、すずかもアリサを追って教室を出て行った。
そして後にはなのはだけが残された。
「怒らせちゃったな……。ごめんね、アリサちゃん……」
ぽつりと呟かれた謝罪は、幾分かの寂しさも含まれていた。
一方、アリサを追ったすずかは、廊下の少し先で、その背中に追いついた。
「待って、アリサちゃん。さっきのは少し言い過ぎだよ！って、どこに行くの？」
「決まってるじゃない。事情を知ってる奴の所によ」

振り向きもせず、アリサはすずかに言った。
「じ、事情って？」
「なのはが変になったのは、例の探し物とやらをし始めた頃からよ。なら、もう一人それに関わってる奴がいるでしょ！」
そしてアリサとすずかが向かった先の教室には、『3年3組』のプレートが掛けられていた。

※

天馬御風は考え事をしていた。
その中身は件のもう一人の魔法少女――フェイト・テスタロッサについてだ。
（相も変わらず、危なっかしい眼ぇしてやがった）
先日再度の邂逅を果たしたかの少女の瞳は、御風が最初に出会った時に感じた物と変わらないままだった。
強い決意の秘められた瞳――こう言えば聞こえはいいかもしれないが、御風にしてみればその強さはあまりにも張りつめられた物であった。ともすれば、何かの拍子に切れてしまうような、そんな危うさを感じさせていたのである。
（だからかな、俺がなのはに期待するのは）
御風はなのはの中にある蟠りを何とかしてやりたいと思う一方で、なのはに関わらせる事で、フェイトの中にある危うさも何とかしてやりたいと思っていた。
今はまだ思い定まらぬ様子だが、あの少女ならばすぐに己の中にある答えに気付くはずである。
いざそうなれば、思いこんだら一直線の高町なのはの事、フェイトの危うさを放っては置かないだろう。
御風はそれに期待している。
（でも、俺は何でまぁ、こんなにフェイトの心配なんかしてんだろうね？）

いくら考えても、それだけは解らなかった。
その時、3年3組の教室の扉が、勢いよくスパーンッと開けられ、そこから金髪の美少女が現れた。
「御風！天馬御風！いるんでしょう？ちょっとそこまで付き合って！」
金髪美少女――アリサ・バニングスは傲然と胸を張りながら言った。
そして突然の指名を受けた御風は驚きに目をぱちくりさせていた。

※

「で、何の用だよ？」
「聞きたい事があるのよ」
屋上に連れて来られた御風は、そこでアリサと対峙していた（すずかは少し後ろで見守っている）。
「聞きたい事？」
「あんたとなのはがやってるって言う、探し物の事よ」
アリサの言葉に、御風に目が僅かに細くなる。
「何でそんな事聞くんだ？」
「なのはの様子が変なのよ」
アリサはきゅっ、と唇を噛みしめる。
「この間の旅行から帰って以来、何を言ってもボーっとしてて。ううん、そうじゃない、もっと前から――あんたの言ってた、探し物って奴を探し始めて頃から、ちょっとずつ様子がおかしかった」
アリサは眦を吊り上げて御風を睨みつけ、
「だから教えなさい。あんた達は、一体何をやってんの？探し物って一体何なの？」
思わぬ場所からの追及に、御風は頭をがりがりと書いて言葉を探した。
「……確かに、単なる探し物じゃねぇ。ただ、俺が言えんのはそこまでだ」

「なんで！」
思わず激昂しかかるアリサを手で制しながら、御風は続ける。
「何でなのはや俺がお前らに話せないか、考えた事あるか？」
御風は指を二本立て、その内の一本を折る。
「一つ。それが人には話せないようなやましい事だから」
「なのははそんな事するような子じゃないわよ！」
知ってるよ、と内心で思いつつ、御風はもう一つ指を折る。
「もう一つは、それが誰かに、それこそ親しい友人だからこそ話せない、危険な事だから」
御風の言葉に、アリサとすずかの顔がハッと強張る。
「……何で、何でなのはがそんな事しなきゃならないのよ……！」
アリサが体を震わせて絞り出すような声で言った。
「……本当なら、関わらんでもよかったんだよ」
御風の言葉を、アリサ達は静かに聞いた。
「現に、なのはに探し物を頼んだ奴も、途中で何度もそれに関わる事を止めてた。でも、あいつはもう決めちまった。アリサとすずかも知ってんだろ？あの頑固もん、こうと決めたら絶対に曲がりやしねぇ」
「……なのはちゃんは、真っ直ぐな子だから」
すずかがそう言って微笑んだ。
「そんな事、初めて会った時から気付いてたわよ……」
アリサが、少し懐かしそうに言った。
「……この屋上はね、私とすずかとなのはの三人が初めて会った場所なのよ」
アリサは周囲を見回す。
「昔の私はね、わがままで自信家で、今の私が見たら尻を叩いてやるような、生意気な奴だったの」
「……そして私は、気弱で、臆病で、誰かに対して何にも言えないような子だったんだ」
アリサに続けてすずかも言う。

「そんなすずかは、当時の私から見たら格好のからかい対象でね。ある日、私はすずかの大事にしてるヘアバンドを取り上げちゃったのよ」

「あの時のアリサちゃんは、ひどかったなぁ」

「い、言わないで……」

少しいたずらめいた物の言い方ですずかが言うと、アリサは当時の自分に居た堪れなくなったのか、体を縮めて小さくなった。その様子をくすくす笑いながらすずかは続けた。

「二人で、そうやってる所にね、なのはちゃんが割り込んできたの」

「出会い頭に張り倒されたわ。……で、その時に言われたのよ」

『痛い？でも、大切なものをとられちゃった人の心は、もっともっと痛いんだよ』

御風はそれを聞いて思わず破顔した。

「今も昔も、なのはだなぁ」

「でしょ？……その後、大ゲンカしちゃったんだけど、少しずつ話をするようになって、それから仲良くなったわ。それが切っ掛けで、すずかとも。あの子がいたから、私達は――私達三人は、親友になれたのよ。……なのに」

アリサはくしゃりと顔を歪ませて俯き、その瞳からポロポロと涙を流した。

「わっ、私達に心配させたくないからだって、事ぐらいっ、本当はわかってたわよっ……。たぶん、わたっ、私たちじゃ、あの子の助けになれないって事も……！」

アリサは涙でぬれた瞳で、御風を真っ直ぐに見た。

「でも、何かしてあげたいのよっ！何かさせてほしいのよっ！だって、心配なんだからしょうがないじゃないっ！私はっ、私は……！」

そこまで言って感極まったアリサを、すずかはそっと抱き締めた。

「……ねぇ、御風くん。私達にできる事って、本当に無いのかな……」

腕の中で泣くアリサに、自身も涙を貰いそうになるながら、すずか

はそっと尋ねた。
「あるに決まってんだろーが」
御風はにやりと笑って言った。
（全く、ユーノと言い、こいつらと言い、なのはは友人に恵まれまくってんなぁ）
なのはの友情運の高さに感心しながら、御風は言う。
「まず、アリサ。お前は教室に帰ったら、すぐになのはに謝る事」
「わ、私が……？」
「なのはに状況を考えりゃ、お前に責められるのは一番堪えただろうよ。だから、謝っておけ」
「……わかった」
不承不承と言った感じでアリサが頷く。
「それが済んだら、二人とも自分の思いをきちんとなのはに言う事。言葉にしても解らん事がある様に、どうしても言葉にしなきゃ解らん事もあるんだ。たぶん、今のなのははお前らが心配してる事にも気付いてないぞ？」
「あ、ありうるわね……」
「なのはちゃん……一途だから」
「すずか、それフォローになってるのか？まぁ、そうすりゃなのはだって話せる部分は話してくれるだろうよ。んで、これが最後にして一番重要！」
アリサとすずかが固唾をのんで御風の言葉を待つ。
「今まで通り、でいてやれ」
その言葉に、二人は一瞬ぽかんとした。
「そ、それだけでいいの？」
「おう。今まで通り一緒に笑って一緒に泣いて、そんで時たま喧嘩して。そんな『親友』のままで、あいつを信じて待っててやれ。そうすりゃ、なのははどこにいたって、帰って来れるさ」
「……待つ、かぁ」
涙を引っ込めたアリサが嘆息した。

「つらいかよ？」
「まさか！」
そしていつもの様に偉そうな態度に戻り、胸を張った。
「待つわよ！待っててやるわよ！あの子が真っ直ぐ帰って来れるように、『親友』でね！」
「うん！」
アリサの宣言にすずかも嬉しそうに頷く。
その時、そんな二人を面白そうに見ていた御風に、アリサが少し顔を赤くしたままそっぽを向いて、
「い、一応ためになるアドバイスだったわよ……。あ、あり、ありがとう……」
と言った。
そんなアリサに御風は一言。
「ツンデレ」
「誰がツンデレかぁ！」
ムキーッと怒るアリサは、恥ずかしさと怒りがないまぜになったままの赤い顔で身を翻した。
「全く、人がせっかくお礼を言ってるってのに茶化して！もうっ、すずか、行くよ！」
そう言ってそのまま屋上から出て行った。
その後を追おうとしたすずかは、半ばでぴたりと足を止めると、御風に向き直って、
「御風くん。なのはちゃんを守ってあげてね」
と、少しの不安を瞳に乗せながら頼んできた。
「任せろ。生憎『王子様枠』はもう埋まってるけど、俺にとってもなのはは『友達』なんだぜ？」
その言葉を聞いた鈴鹿は、嬉しそうに微笑むと、ぺこりと頭を下げて今度こそアリサを追った。
※

その日の放課後。帰路に就こうとした御風は。いつも通りの三人の姿を見た。

いつも通り共にいて、いつも通り一緒に笑って。だけど、いつもより少し仲良く見える、三人の姿を。

過去の『思い』と今の『思い』（後書き）

ＶＳフェイト三戦目は次回に繰り越し。
偶には、バトルの無い話があってもいいんじゃにでしょうか？
それでは、また次回。

定まる心と大いなる危機（前書き）

お気に入り登録件数が凄い事に。
こんな拙い文章でも、楽しみにしてくれている方がいるかと思うと、
励みになります。

定まる心と大いなる危機

夕刻。
高町なのはは上機嫌であった。それは見ているこちらが心配になってくる程の浮かれっぷりであった。
「ねぇ、御風」
「あン？」
肩に乗っていたユーノは、なのはに聞こえないよう小声で御風に囁いた。
「なのは、どうしたの？なんだか、学校から帰って来てから、物凄く嬉しそうなんだけど」
「……さてな」
大体の成り行きを知っていた御風だが、あえて言わなかった。ここで詳しい事を喋るのは、野暮、と言う物である。
そのような感じで絶好調のなのはであったが、生憎ジュエルシード探索についてはそうはいかず、気付けば日は沈み、あたりは暗くなっていた。
「ありゃー……。今日はタイムアウトかなぁ。そろそろ帰らないと……」
ビルの壁面に映る大型テレビジョンの時刻を見ながら、なのは残念そうに眉をしかめた。
「大丈夫だよ。僕が残ってもう少し探していくから」
ユーノがそんななのはに言う。
「うん……。御風くんは、どうするの？」
「都合のいい事に、父さんも母さんも今日は遅くまで帰ってこねぇからな。俺もユーノに付き合うぜ」
御風が任せろと胸を叩く。
「そっか。二人でいるなら、そんなに心配しなくても平気かな？」
「うん、平気。だから晩御飯取って置いてね」

「えっ、「僕のために美味しい晩御飯を作ってくれ」だなんて……？これってもしかして、プロポーズなの？」
「そこの桃色妄想少女。ユーノはそんな事一言も言ってねぇから」
妄言を吐いた揚句いやんいやんと体をくねらせるなのはに、御風は冷たい声で突っ込みを入れる。
「ははは……」
最近富に肉食系と化している己の想い人に、ユーノは乾いた笑いを上げる事しかできなかった。

※

フェイト・テスタロッサが高いビルの上から、夜の街を見下ろしている。
その傍らには、彼女の忠実な使い魔、アルフが控えている。
「この辺りだと思うんだけど、大まかな位置しか解らないんだ」
「確かに、これだけごみごみしてれば、探すのも一苦労だねぇ」
主の困った様な言葉に、アルフも苦々しげにぼやいた。
「ちょっと乱暴だけど、周辺に魔力流を打ち込んで、強制発動させるよ」
バルディッシュを掲げて、フェイトが魔力を込めようとした時、
「あー、待った。それあたしがやる」
アルフがフェイトを止めた。
「大丈夫？結構疲れるよ？」
心配そうにフェイトは言ったが、アルフはにやりと笑って、
「このあたしを一体誰の使い魔だと？」
暗に己の主人の優秀さを褒めつつ嘯いた。
その澄ました様子に、フェイトもようやく顔を綻ばせると、己の使い魔に頷きかけた。
「じゃあ、お願い」
「そんじゃあ！」

魔力を込めたアルフの足元に橙色の魔法陣が現れると同時に、同色の光の柱が立ち昇る。
次の瞬間、空に異変が現れる。
突如として黒雲が湧き立ち、雷鳴が辺りに轟く。
そしてその異変は、同じ場所にいたもうひと組のジュエルシードの探索者達にも、もちろん届いていたのである。

※

「な、何だ、一体!?」
唐突に悪くなった天候に、御風がうろたえた声を上げる。
「こんな街中で強制発動!?広域結界、間に合え!」
そしてユーノは焦った様な声を出すと、慌てて一つの魔法を発動させる。
その足元で魔法陣が光輝き、それを中心に、ナニカが町を覆っていく。
それは、通常空間から特定の空間を切りとり、時間信号をズラす魔法である。
この魔法によって、ユーノは周囲に被害を与えたり目撃されたりしないよう、咄嗟にこの場を隔離したのだ。
それを知らない御風は、周辺からいきなり人気が失せた事と、雰囲気ががらりと変わった空間に、先程以上にうろたえた。
「え?え?何ここ?ガ〇ームゾーン?」
重甲〇ーファイターは、毎週日曜８時００分から放送だ。
「周囲の空間から、僕達のいる空間だけを隔離する結界を張ったんだ。こうでもしなきゃ、無用な被害が出てたかもしれない」
「展開が目まぐるしくてよく解らんのだが、フェイト達はあの光の柱で何をやったんだ?」
いまだ珍しそうに辺りを見回しながら、御風が尋ねた。
「ここら辺にあるだろうジュエルシードを見つけるために、魔力を

流してわざとジュエルシードを発動させようとしたんだ」
「なんつー無茶を……！」
御風は冷や汗をかきながら、フェイト達がいるであろう方向を見やった。
（周りを巻き込みかねねぇ無茶なんてしやがって！なんであいつはあんなに余裕がねぇんだ！）
その内心は、フェイトに感じる妙な苛立ちで一杯である。
その時、膨大な魔力が立ち昇り、青白い光が天を突く。
「げっ！ジュエルシードかよ！？」
御風が発動したジュエルシードを見て嫌そうな声を上げた。
「……御風、なのはがこっちに来てくれてる。発動したばかりだし、ジュエルシードはすぐに封印できるよ」
「だが、そいつはあちらさんも同じだぜ」
御風の言葉と同時に、二方向から封印の光がジュエルシードに走る。
一つは桃色、つまりはなのは。もう一つは金色――無論、フェイトだ。
「掴まれ、ユーノ。今日の舞台はあそこだ！」
御風がジュエルシードの輝きに向かって飛ぶ。

※

（アリサちゃんとも鈴鹿ちゃんとも、初めて会った時は友達じゃなかった）
なのはジュエルシードの前に立っていた。
（話をできなかったから。わかり合えなかったから）
封印されたジュエルシードの淡い光が、その場を静かに照らしている。
（アリサちゃんを怒らせちゃったのも、私が本当の気持ちを、思っている事を言えなかったから）
その事に気付いたのは、当のアリサ本人とすずかのおかげであった。

あの後、戻って来たアリサはこちらに謝罪した後、アリサとすずかがどれだけ自分を心配してくれているかを伝えてくれたのである。
そんな真剣な思いに応えられなかったからこそ、アリサは怒っていたのだと、なのはその時やっと理解した。
その時、ばさりと言う羽音と共に、肩にユーノを乗せた御風が空から降りて来た。
「やった！なのは、早く確保を！」
フェイト達に先んじれた事を喜んだユーノがなのはを急かす。
「そうはさせるかい！」
だが、上から聞こえて来た声がそれを阻む。見上げれば、牙を剥きだしたアルフがこちらに向かって急降下してくるのが見えた。
「ちぃっ！」
舌打ちした御風が風の障壁を張る。
轟音とと共にぶつかるアルフだが、風の障壁を破れず、やむなく後退する。
そして風の障壁が晴れた時、街燈の上にフェイト・テスタロッサが立っていた。
（目的がある者同士だから、ぶつかり合うのは仕方がないのかもしれない）
互いに視線を交わすなのはとフェイト。
（だけど、知りたいんだ）
なのははそのフェイトの瞳に浮かぶ物を見て、思いを一層強くする。
「この間は自己紹介できなかったけど、私、なのは。高町なのは！私立聖祥大付属小学校3年生！」
なのはの名乗りに応えたのは、無言のフェイトと光鎌の一振り。
なのはも慌てて杖を構える。しかし、その心の中は、ある思いで一杯だった。
（どうしてそんなに、淋しい目をしてるのか）
一方、御風とユーノのコンビはアルフと対峙していた。
「怪我の具合はどーだい？犬女さんよ」

御風がいきなりアルフを挑発する。
「誰が犬女だい！？あたしにはアルフって立派な名前があるんだし、第一あたしは狼だ！」
その挑発に見事に乗ってアルフが体毛を逆立てて怒鳴った。
「それより、あんたたちこそいいのかい？まぐれとは言え、フェイトに勝ったそこのガキならまだしも、あの子じゃ前みたいにフェイトにすぐやられちゃうよ？」
今度は逆にアルフが御風達を挑発するが、御風はそれを鼻で笑った。
「うちの魔法少女はそう簡単に負けんさ。なぁ、ユーノ」
「うん。……でも、やっぱり心配だから、すぐに君を無力化して、なのはの援護に向かわせてもらう」
ユーノの言葉に御風は軽く口笛を吹いた。
「言うね、ユーノ。さすがは『王子様枠』」
「？何、それ？」
呑気に会話する御風とユーノに、アルフの怒りは一瞬で限界を突破した。
「言ってくれるじゃないか！こっちこそ、あんた達をぼこぼこにしてから、フェイトを助けに行かせてもらうよ！」
封印された状態ながら、怪しく鼓動するジュエルシードが見守る中、二組の探索者達は三度激突した。

※

バイオリン教室が終わったすずかは、なのはにメールを打っていた。
「なのはにメール？」
同じバイオリン教室に通っているアリサが、すずかの手元を覗き込んだ。
「うん、お稽古終了って。アリサちゃんは、いいの？」
その言葉に、自分も携帯を取り出したアリサだが、すぐに思い直してそれをしまった。

「なのはに言いたい事は、今日全部言ったもの。私はいいわ。さ、帰るよ」
そう言って背中を向けたアリサを微笑ましく思いながら、アリサ程口が回らないすずかは、メールで改めて自分の思いを伝えようとする。
「……お悩み、早く解決するといいね。頑張って、いつだって応援しています。す、ず、かっと」
メールをなのはに送ったすずかは、アリサの後を追った。

※

市街地のビルの谷間を縫って、桃色と金色の砲撃が交差する。
なのはとフェイトは、熾烈な空中戦を繰り広げていた。
フェイトが何時かの様にかき消え、なのはの後ろの回り込む。
『フラッシュムーブ』
しかし、そのなのはもまた、フェイトの目の前からかき消える。
高速移動魔法を得意とするフェイトに対抗するために編み出した、なのはの高速移動魔法『フラッシュムーブ』である。
逆にフェイトの背後を取ったなのはは、その背中に杖を突き付ける。
『ディバインシューター』
桃色の砲撃が発射される。その発射までのタイムラグは、ほぼゼロと言ってもよいくらいに短い。
威力こそ大きいが、発射に時間のかかった『ディバインバスター』の欠点を補う形で考案された、これもまた新魔法『ディバインシューター』である。
『ディフェンサー』
バルディッシュの先端に金色の障壁が張られ、なのはの砲撃を受け止める。
しかしその威力に押されたフェイトは、衝撃ごと吹き飛ばされる。
空中で態勢を立て直し、なのはに杖を突き付けるフェイト。そして

そんなフェイトに油断なく杖を構えるなのは。
二人の魔法少女の攻防は、正に一進一退であった。
「フェイトちゃんっ！」
その時、なのはが突然フェイトに呼び掛ける。
何事かと目を見張るフェイトの前で、なのはは更に言葉を紡ぐ。
「話し合うだけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言ったけど、だけど、話さないと、言葉にしないと伝わらない事もきっとあるよ！」
自身の言葉に、なのはは今日のアリサとのやり取りを思い出していた。
アリサの真剣な思いに、なのはは話せる範囲で自分の事情を話した。
その全てを納得してくれた訳ではないだろうが、アリサは何か困った事があったらきっと力になる、いつだって応援してると言ってくれた。
言葉にして、話し合って初めて伝わる思い。
なのはは、フェイトの本当の思いを知りたいと思った。
「ぶつかり合ったり、競い合ったりしたりするのは、それは仕方ない事なのかもしれないけど、だけど、何も解らないままぶつかり合ったりするのは、私、いやだ！」
だからこそ、なのは己の思いを真っ直ぐに言葉に乗せてフェイトに伝える。
「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノくんの探し物だから。ジュエルシードを見つけたのはユーノくんで、ユーノくんはそれを元通りに集め直さないといけないから。私はそのお手伝いで」
そう、始まりはただの親切心からだった。だが。
「だけど、お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めてる！自分が暮らしている町や、自分の周りの人達に危険が降りかかったら嫌だから！」
大切な人達を守りたい――なのはの中で育った『勇気』は、今や確固とした意思となってなのはを突き動かしていた。

「これが、私の理由！」
周囲に響き渡るなのはの思いを聞いていた御風はにやりと笑った。
それは、その言葉が如何にもなのはらしいという事と、自分も同じ思いであったからだ。
御風も、始まりは偶然と自身の【魔法】に対する鬱屈した思い、それともう一つの『魔法』に対する興味から首を突っ込んだ。
だが、その過程で知ったジュエルシードの危険性、共に戦う二人の仲間達への信頼と共感。それらが御風の中で守るべき意思となって御風の行動原理となっていた。
だからこそ。
「……私は……」
「フェイト、答えなくていい！」
己の思いを口に出そうとしたフェイトを遮ったアルフの言葉は。
「優しくしてくれる人達の所で、ぬくぬく甘ったれて暮らしてるようなガキンチョになんか、何も答えなくていい！」
御風にとって、到底許せるものではなかった。
「ふざけるんじゃねぇっ！！」
突如放たれた御風の怒声に、その場にいた者達はびくりと背中を震わせた。
「ついこの間まで只の小学生だった奴が、只の甘ったれただけの奴が、自分が大怪我するかもしれない戦いの場に生半可な覚悟で出て来れるかよ！俺のダチをなめんじゃねぇ！」
「そうだ！」
御風の言葉にユーノも同調する。
「優しくしてくれる人達の所でって言ったけど、その優しくしてくれる人達のために戦っているなのはの『勇気』は本物だ！それを馬鹿にする事は、僕が許さない！」
「御風くん、ユーノくん……！」
二人の言葉に、なのはの心に嬉しさが溢れる。
「くっ、こいつら……！フェイト、あたし達の最優先事項はジュエ

ルシードの捕獲だよ！」
御風とユーノに気押されながら、アルフはフェイトを促す。
「……っ！」
アルフの言葉に自身の目的を思い出したフェイトは、迷いとなのはを振り切って、ジュエルシードに向かって反転した。
「あっ！」
その行動に気付いたなのはもすぐさまフェイトを追う。
まるで落下するかのような速度でジュエルシード目掛けて飛ぶフェイトとなのは。
二人の杖が同時にジュエルシードを捉えたその瞬間。
レイジングハートとバルディッシュに亀裂が入り、それまで不気味に胎動していたジュエルシードから眩い衝撃と閃光が走る。
「な、何だ！？」
御風は突如ジュエルシードから巻き起こった魔力のあまりの大きさに怖気を感じた。
それは今までのジュエルシードの励起状態から発せられていた物とは一線を隔す程、強大な魔力であった。
「何て魔力だ……！」
ユーノが茫然と呟く。
「これも、ジュエルシードの力の片鱗に過ぎねぇのか……？」
御風の言葉は、戦慄を伴って唇からこぼれていた。

定まる心と大いなる危機（後書き）

『邪甲！』

次回、御風はその力を解き放ち、漆黒の昆虫戦士へ変身する！

……ごめんなさい、超嘘です。

メタルヒーローの中であの作品が一番好きでした。ブラックビート、格好良かったですよね。

それでは、また次回。

黒い風と御風の思い（前書き）

ちょっとした伏線ですが、気にしないでください（笑）。

黒い風と御風の思い

ジュエルシードから放射された魔力に吹き飛ばされたなのはとフェイト。
何とか空中で態勢を立て直したものの、それぞれが手にしたデバイスは、無残なひび割れを見せていた。これでは、下手に魔法を使う事も出来ないだろう。
「大丈夫？戻って、バルディッシュ」
『イ〝エ〝ッサ〝ー』
ノイズ混じりにバルディッシュが答え、待機状態へと姿を変える。
それを心配そうに撫でた後、フェイトはジュエルシードへと向き直った。
「む？」
その行動を注視した御風は、次の瞬間ジュエルシードに向かって走り出したフェイトに驚愕した。
「ぁンの、馬鹿！」
御風は翼を顕現させると、ジュエルシードに掴み掛ろうとしていたフェイトに向かって飛び、その行動を体を使って押し留めた。
「っ、何を！」
「そりゃ俺のセリフだろうが！デバイスも無しに何しようとしやがった！」
非難の声を上げるフェイトを、御風は険しい顔で怒鳴りつけた。
「す、素手で……」
「Ａ・ＨＯ・ＫＡ！！」
「へぅ！」
フェイトの言葉に、御風はついチョップしていた。
可愛らしい悲鳴を上げて頭を押さえたフェイトは、痛かったのか涙目で御風を見た。
「無茶だ無茶だと思ってたけど、度が過ぎれば只のアホだろーが！」

そんなフェイトに、御風は容赦なく説教する。
「お前が誰のために戦ってるのか詳しい事は知らんけどよ、その人やあの犬女、それになのは、あと俺とか、お前が怪我したら悲しむ人達はいるんだからな！」
フェイトはその言葉に目をぱちくりとさせた。まるで、そんな事に初めて気づいた、とでもいうような顔だ。
その表情に、御風はまた舌打ちした。
（こいつは……！何で、こう……！）
言ってやりたい事がありすぎて、御風は思わず頭を掻き毟りたい衝動に駆られた。
だが、ジュエルシードの今の状態を思い出し、とりあえずそれを頭の隅に追いやり、今度は自分がジュエルシードと対峙する。
「今は下がってろ【魔導師】。ここからは【魔法使い】が何とかしてやる」
フェイトにそう言い置くと、御風は今度はユーノに呼び掛けた。
「ユーノ！お前はなのはの方も無茶しねぇか見てろ！後、これから俺がする事のフォローを頼む！」
「何をするつもりだ、御風！？」
「決まってんだろ」
ユーノの言葉に御風はにやりと笑って、
「女の子が無茶しねぇように、男の子が頑張ろうってだけの話さ！」
言うなり、御風は【魔法（マテリアル・パズル）】を発動させながら駆けだした。
その手に風が集い、魔力が再変換されていく。より強く、より深く、より精密に。
かちゃかちゃかちゃかちゃかちゃかちゃかちゃかちゃかちゃかちゃっ！
それは、以前フェイトと初めて戦った頃から考えていた事。
自身の【魔法】の最大の弱点とも言える、攻撃が軽い、という欠点を補うために修練していた一つの形。
ただそれは。
（まだ未完成なんだよな、これ）

今だ形を成さぬそれを、御風はここで使おうとしていた。
（でも！）
ジュエルシードは、もうすぐ目の前まで来ていた。
（女の子が怪我するよりは、ずっとまし！）
そして、御風は漆黒に染まった拳をジュエルシードに叩きつけた。

※

黒い風が吹いた。
その瞬間起こった事を、ユーノ・スクライアはその程度にしか理解できなかった。
それが起こった瞬間、もしかすれば次元崩壊を招きかねない程の状態だったジュエルシードの魔力が、一瞬で消え失せたのである。
ユーノだけではない。その場にいた全員が何が起こったのか解らなかった。
気付けばそこに、御風の魔力で覆われた、いわゆる【魔法（マテリアル・パズル）】式の封印が成されたジュエルシードと、その前に拳を打ち抜いた姿勢の御風がいるだけだった。
この場にいる誰もが想像もしていなかっただろう。
まさか御風があの瞬間、ジュエルシードの放出する膨大な魔力を、己の【魔法（マテリアル・パズル）】を以って捩じ伏せた、などと言う事に。
しかし、今だ未完成な【魔法】を放った代償は、御風に容赦なく降りかかった。
「……やっぱり、まだ駄目だったか……！」
次の瞬間、御風の拳から腕にかけて裂傷が走り、鮮血が飛び散った。
「ぐぅぅぅっ！」
腕を押さえて蹲る御風に、なのはとユーノが悲鳴を上げる。
「御風くんっ！？」
「御風っ！」
そして、フェイトは――何故か、御風の前に立っていた。

使い魔の言う通り、己の目的はジュエルシードの捕獲であり、今はその絶好の機会であるはずだ。
だが、フェイトはジュエルシードに手を伸ばさず、さりとて御風に何をするでもなく、戸惑った顔で御風の前に立った。
「……よぅ」
目の前にいるフェイトに気付いた御風が、苦痛を堪えながらも唇を笑みの形に歪める。
「どうした……？俺の心配でも、してんのか……？」
「しん……ぱい……？」
フェイトは御風の言葉で、自分が少年の心配をしている事にようやく気付いた。
そんなフェイトの様子を少し笑った御風は、
「ジュエル、シード……。持ってけよ……」
「えっ……？」
驚くフェイトに御風はさらに続ける。
「代わりに、よ……。一個だけ、頼みを聞いてくれねぇか……？」
「……内容に、よります」
フェイトは御風の言葉を待った。
「もう少し、『余裕』を持って、くれねぇか……？」
「？」
疑問符を浮かべるフェイトに、御風は己の思いをぶつけた。
「なのはじゃ……ねぇけどな……、お前見てたら、心配なんだよ……。いっつも、余裕のねぇ、張り詰めた顔しやがって……。何かの拍子に、大怪我でもしそうで、ほっとけねぇんだ……」
フェイトは、御風の言葉に何かが心から湧き上がってくるように感じた。
「そう思ってたら……、さっきみたいに、平気で危ない真似……しやがる。……このジュエルシード持ってたら、お前も、少しは楽になんだろ……？だからさ、もっと『余裕』を、持てよ……。せめて、自分の体を、大事にするくらいには、よ……」

そこまで言った途端、御風は己の意識が遠のくのを感じた。
「わり……。後、頼むわ……」
そして腕の苦痛と魔力の枯渇によって、御風はそのまま昏倒した。

※

「あっ……」
倒れた御風に思わず手を伸ばしかけるフェイトだが、
「フェイトっ！」
アルフの鋭い声に、伸ばしかけた手を止める。
「何をしてるんだい！？早くジュエルシードの確保を！」
それでも尚迷うフェイトだが、近づいてくるなのはとユーノに気付いて、咄嗟にジュエルシードを手にする。
「退くよ、フェイト！」
使い魔に促され、フェイトはその場から飛び去った。後に残る御風を、何度も何度も振り返りながら。
そしてアルフは内心歯がみをしたい気持ちでいっぱいだった。
フェイトがジュエルシードに向かったあの時、自分はそれを止める事ができなった。あの時、御風がフェイトを止めなかったら、自分の主は大怪我をしていたかもしれない。
（くそっ……。素直に礼を言う事も出来ないなんて、不甲斐ない！）
一方でフェイトは、
（何で……、あの子達は……）
先程の事がずっと頭を巡っていた。
『何も解らないままぶつかり合ったりするのは、私、いやだ！』
自分を知ろうとする少女。
『お前見てたら、心配なんだよ……』
自分を心配する少年。
敵であるはずの自分に、こうも深く関わろうとする二人を想うと、フェイトの心は千々に乱れた。

迷い、惑う主従を慈しむ様に、夜の帳は更けて行く――。

※

「……お？」

気付けば御風は、『夢の樹』の前に立っていた。

「何か、ここに来るの久しぶりだなー」

御風が樹を見上げていると、

「また、えらく無茶をしたね」

不意に声を掛けられた。

そちらに目を向けると、いつもの顔立ちすら定かではない人影が、樹の枝の上に座って御風を見下ろしていた。

「あ、久しぶりー」

呑気に再開の挨拶をかます御風に、人影は嘆息したようだった。

「……彼ら【魔導師】が使う【魔法】と違って、【魔法（マテリアル・パズル）】は技能的な側面が強い。だからこそ、その威力やバリエーションは使い手の修練と発想力次第でどこまでも広がる」

人影が突如として語り出す。

「そして、それら【魔法】を極めた先に、その【魔法】独自の究極技法――【奥義】と呼ばれる形態、技がある。……御風、君が今日しようとした事だ」

「未完成だけど、な」

御風が目指している物――【奥義】。【魔法（マテリアル・パズル）】の究極の形であり、その威力は絶大。確かに、それを身につける事が出来れば、御風の弱点の克服にもなるだろう。

だが、あくまでもそれは、【魔法】を極めればの話だ。

「あの少女に説教しておきながら、君の体たらくは何だい？」

「……だって、あの場合あれ以外にジュエルシードなんとかできそうな技はなかったし、フェイトやもしかしたらなのはも無茶して大怪我するかもしれなかったんだ」

「それで逆に君が怪我をしてれば世話はないよ。……ま、俺からはこの程度にしておく」
案外あっさりと終了したお小言に、御風は意外そうな顔をする。
「随分あっさり風味なんだな」
すると、人影は少し意地悪そうに笑った。
「何、俺が言わなくても、彼らが思う存分、君を怒ってくれそうだしな」
「え゛。それって……」
「目覚めた後の君の健闘を祈るよ、御風――」
人影が妙ににこやかにそう言うのを聞きながら、御風の意識は徐々に覚醒していった。

※

「……おろ？」
御風が気付くと、そこは先程まで激闘のあった市街地であった。
「御風、気付いたのかい！？」
「大丈夫、御風くん！？どこか痛い所とか、ない？」
覚醒した御風に気付いたユーノとなのはがそれぞれ声を掛けてくる。
「いや、痛いとこって、そりゃ右腕が……痛くねぇ？」
御風が右腕を確認すると、裂傷が走り無残な状態だった御風の右腕は、傷一つない綺麗な物になっていた。
「……治癒魔法を掛け続けたんだ。その様子じゃ、大丈夫そうだね」
ユーノがとても低い声で言う。
「……御風くん、３０分近くも気絶してたんだよ」
なのはもとても低い声である。
「お、おお。そりゃすまねぇ」
御風が二人の様子に気押されて、少し口籠る。
「「「……」」」
三人は何故か沈黙した。その間にも、二人から発せられる妙なプレ

ッシャーは高まって行く。
その時、意を決した御風が口を開く。
「あの……、もしかして、怒ってる？」
「「当たり前　（だろ）（なの）！！！！」」
二人の怒りが爆発した。
「バカバカバカバカ御風くんのバカ！フェイトちゃんにあんな事言っといて、自分が大怪我するってどーいう事なのっ！？」
「無茶を過ぎれば只のアホだっけ？なら彼女以上に無茶した君は大アホじゃないか！僕達が中々目を覚まさない君をどれだけ心配したと思ってるんだ！！」
「全くなの！大体御風くんは……」
「その通りだよ！御風、そもそも君は……」
怒涛の如く聞かされる双方向からのお説教に、御風はひたすら縮こまるしかなかった。
その脳裏に、あの人影の意地の悪い笑いが蘇る。
「あ、あの野郎……！今度会った時は覚えてやがれ……！」
「「聞いてるの！？御風　（くん）！！」」
「あ、ごめんなさい」
なのはとユーノによる説教は、それから３０分以上も続いた。

※

「「ま、これくらいで許してあげる（よ）（の）」」
「誠に申し訳ありませんでした」
二人の説教から解放された御風は、見事な土下座状態だった。
「……それで、御風。聞きたい事があるんだけど」
「なんなりとお聞き下さい」
「いや、いい加減元に戻って」
完全服従となった御風は機械の様な声で答えた。それを見たユーノとなのはやりすぎたかとちょっと後悔した。

「……わかったよ。それで、何が聞きたいんだ？」
ようやく元の状態に復帰した御風が、いつもの様な口調で聞いた。
「あの時、何をしたんだい？」
（やっぱそれか）
あの時とは、等と解らない事は聞かずともよかった。
もちろん、それはジュエルシードを封印したあの時の事だ。
御風はしばしの逡巡の末、正直に話す事にした。
「あれは――」
……数分後、御風の説明を聞き終えたなのはとユーノはふーっと大きく息を吐いた。
「【魔法（マテリアル・パズル）】の【奥義】……。確かに、凄まじい威力だったけど……」
「それのせいで、御風くんが怪我をするのは、だめだよ」
二人が御風に注意する。御風にしても、二人をこれ以上心配させるつもりはなったし、まだ未完成な物を堂々と振り回すような格好悪い真似はしたくないので、素直に頷いた。
「わかってるさ。きっちり極めるまでは、【奥義】は封印だ」
御風の言葉に、なのはとユーノはようやく安堵する。
「後、それともう一つ」
話が終わったかと思った瞬間、ユーノがまた口を開いた。
「？何だ？」
「御風、何故君は、彼女にジュエルシードを渡すような真似をしたんだい？」
「え……」
ユーノの鋭い口調とその内容に、なのはが困惑した声を上げる。
（ユーノには気付かれてたか）
聡明な友人の事だからひょっとしたら、とは思っていた御風だったが、それは見事に的中した。
ユーノのこちらを見つめる目は真剣だった。故に、御風は下手な誤魔化しはせずに、正直に答えようと思った。
「……初めて会った時から、ずっとあいつの張り詰めた表情が気に

なってた」
そして御風は、己の中にあったフェイトへの思いを告白した。
「いつも余裕のねぇ顔して、何かの拍子に取り返しのつかないような事するんじゃねぇかと思ってた。そしたら、今日案の定だ。あいつ、あの時素手でジュエルシードを封印しようとしてたんだぜ」
御風の言葉を聞いたユーノが息を呑む。
「何て無茶を……！下手をすれば、両手が消し飛んでたかもしれないのに……」
「そんな……」
なのはも愕然とした表情になった。
「だからよ、あのジュエルシードを渡したら、あいつもちったぁ楽になるんじゃねぇか、少なくとも自分の事を省みるくらいにはなるんじゃねぇかと、思ったんだ」
そこまで語った御風は、ユーノに対して頭を下げた。
「すまねぇ。事の重大さは理解してたつもりだし、あいつらがジュエルシードを何に使うかもわからねぇ以上、絶対に渡しちゃいけねぇのも解ってた。でも、ほっとけなかったんだ、どうしても」
「……」
ユーノは、頭を下げている御風を無言で見つめている。そしてなのはは二人の間でおろおろしている。
やがてユーノは一つため息を吐くと、
「確かに、君のやった事はとんでもない事だ。でも、もしかしたら、彼女らの目的は世界平和で、皆が幸せになるために行動しているかもしれない」
そんな事を言い始めた。
「もしそうじゃなかったら、取り返そう。そして、君やなのはがそんなに気に掛ける彼女を説得しよう。悪い事はもうしちゃダメだって」
「ユーノ……」
呆然とする御風に、ユーノはにこりと微笑んで、

「大丈夫だよ。僕達が――僕やなのは、そして御風が頑張れば、きっと何とかなるよ。だから、もう気にしないでくれ」
「ゆ、ユーノ～！」
その熱い友情の言葉に感動した御風が、思わずユーノを抱きしめようとした瞬間、
「ユーノくん、カッコイイ～！」
横から御風よりも早く動いたなのはに突き飛ばされた。
「ぐぇっ！？」
「な、なのは！？」
驚くユーノを抱き上げ、なのはそのフェレットの姿に頬擦りする。
「ユーノくんカッコイイ！カッコイイよユーノくん！さすがは私の彼氏、ダーリン、王子さま！だ―い好き！！」
「ちょ、なのは！？み、御風が見てるよ……／／／／」
真っ赤になるユーノだが、当の御風は尻を突き出した無様な格好でうつ伏せに倒れ伏したままだ。
何とも騒がしい3人の夜は、このようにして終わった。

黒い風と御風の思い（後書き）

……長い！まだまだ先は長い！

すみません、こんなにぐだぐだしてて。何か丁寧に書こうとしてたら、こんな風に……ｏｒｚ。

次なる回では、あの人とかあの人とかあの人とかあの人とかが出てきます。

それでは、また次回。

彼女の母と三人目の魔導師（前書き）

熟女が出ます。美熟女が。

彼女の母と三人目の魔導師

世界と世界を繋ぐ次元の海を、一隻の船が航行している。
次元空間航行艦船『アースラ』。それが、この船の名である。
それぞれの役割を果たすべく、クルーたちが忙しなく働くブリッジにて、二人の人物がある世界で観測されたデータを見て眉を顰めていた。
「……エイミィ、このデータに誤りはないのか？」
その内の一人、詰襟の黒のコートを纏った少年が、傍らの女性――エイミィ・リミエッタに尋ねた。
「間違いないよ、クロノくん――って、あたしも言いたいんだけど……」
エイミィは少年――クロノ・ハラオウンになんとも言えない表情で返した。
二人の目の前にあるのは、当該世界にて観測された強い魔力の変動値のグラフである。
そのグラフはある時を境にして急激に上昇し、そして別の時を境にほぼゼロ、と言ってもいいぐらいにまで下降しているのだ。ゆえに、その図はまるで絶壁を描くようになっている。
「明らかに人為的な何かが働いているな。その管理外世界には魔法技術が無いと聞いているが？」
「うーん……。このロストロギアを回収するために、魔導師が独自にその世界に渡っている可能性はあるけどねー」
「ふむ、やはりその線が濃厚か……」
その時、考え込むクロノの背後から新たな人物の声が掛かった。
「なら、急がないといけないわね」
「！艦長」
クロノ達が振り向くと、そこには腰まで届く艶やかな緑色の髪をポニーテイルにした、妙齢の美女がこちらに歩いて来ていた。

リンディ・ハラオウン。この船、アースラの最高責任者、つまりは艦長である。
「その魔導師が存在するとして、これほど強力なロストロギアを求める理由が解らない以上、こちらも迅速に行動しなければならないわ」
言いながら、ブリッジの最上段、艦長席に座ったリンディは、クルー全員に命を下す。
「これより我がアースラは強力な魔力反応があった当該世界に向かいます。また、素性の定かではない魔導師が介在している可能性もあるので、最大限の注意を払う様に」
「「「了解！」」」
クルーの唱和に頷いたリンディは出航を指示する。
向かうは第９７管理外世界――地球。

※

駅前商業区域での戦闘より、一夜明けた翌朝。
ひび割れ傷ついたレイジングハートはユーノに任せ、なのははいつものように登校していた。
がらりと教室の扉を開けると、目の前にアリサがちょうど立っていた。
「おはよう、アリサちゃん」
「あ、なのは。おはよう。……ちょっと来てくれる？」
「？」
言いながら、アリサはなのはの手を引いて、自分の席まで連れて来た。そこにはすずかも居た。
「すずかちゃん、おはよう」
「おはよう、なのはちゃん」
すずかがこちらへ笑みを向けてくると、なのはもそれに答え、朝の挨拶を交わした。

と、そこで振り返ったアリサが、なのはを見つめる。
「な、何かな……、アリサちゃん」
少したじろいだなのはに、
「例の探し物だけど……、どうなってるの？」
アリサがそう聞いて来た。ある程度は納得したとは言え、やはり気になるのだろう、その瞳にはこちらを案じる色が窺える。それは、口は出さずともこちらを見つめるすずかも同様である。
そんな、二人になのはは安心させるように笑いかける。
「大丈夫。心配しないで」
「……ならいいけど」
「危ない真似だけはしないでね」
なのはの様子に嘘が無い事を見たのか、二人の肩から少し力が抜ける。
と、そこでなのはは、フェイトに関して二人の意見を聞いてみようと思った。
魔法の事など、話すべきではない事は口にしていないが、本質的な部分は既に二人に話しているなのはである。ならば、フェイトの事も大まかな部分をぼやかした上で聞いてみたくなったのである。
「あのね、その事で少し聞いてほしい事があるんだけど……」
「何？」
予てよりなのはの力になりたいと思っていたアリサとすずかは、なのはの『相談』にすぐ喰いついてきた。
「その探し物なんだけど、私達以外にもそれを探している子がいるの」
「その子は、その探し物の持ち主なの？」
すずかの問いになのはは首を横に振る。
「ううん、違うみたい」
「それって横取りって事？ドロボーと同じじゃない！」
アリサが憤慨して唸った。
「うーん……、客観的に見たらそうなんだけど、その子、とても真

剣で必死な様子なんだよ」
「何か事情があるって事？」
「うん、たぶん。私はその事情って奴を聞きたいんだけど、向こうは話を聞いてくれなくて……。どうしたら、その子は私のお話を聞いてくれると思う？」
なのはの言葉に、アリサとすずかは腕を組んだ。
「私なら、きちんと話し合う場を設けるけど……」
すずかが控えめな意見を言うと、
「ま、あたしなら首根っこ引っ掴んで無理矢理にでも聞かせるけどね！」
アリサが物騒な案を出した。
しかし、なのははそ二人のそのそれぞれの意見に閃く物があった。
「話し合う場……、無理矢理……」
急に深く考え込んだなのはに、アリサがその顔の前でひらひらと手を振る。
「おーい、なのはー？」
「わかったよ！アリサちゃん、すずかちゃん！」
「ぅわ！？」
そのとき不意に、なのはが立ちあがって叫んだため、アリサとすずかは大層びっくりした。
「ありがとう、二人とも！私、頑張るから！」
嬉しそうななのはに、アリサとすずかは訳が解らないまま、思わず頷いた。
「お、お役に立てたならいいけど……」
「あれ？あたし、何かやばい事言っちゃった？」
将来的にある少女に訪れるＯ・ＨＡ・ＮＡ・ＳＩのきっかけを作ってしまったアリサは、自分がとんでもないスイッチを押してしまったような気がして、少し冷や汗をかいた。

※

朝。教室に入った御風は、数名の男子生徒に取り囲まれていた。
「さて天馬御風、何か弁明する事はないかね？」
御風の正面に立った男子生徒――仮に、大佐としよう。大佐はどこから持って来たのか、乗馬用の鞭を片手でぺしぺし弄びながら尊大な物言いで御風に尋ねた。
「俺が弁明する前に、お前らは今のこの状況を俺に説明しろよ……」
朝っぱらから訳のわからない連中に絡まれた御風の心中は、だいぶどんよりとしていた。
「フン、あくまで白を切るか。……おい」
「はっ！」
そんな御風の様子を気にも留めず、大佐はさっと手を上げた。すると、一人の男子生徒が一歩前に進み出た。
彼は何故か見事な敬礼をしながら、口を開いた。
「昨日の夕刻、自分は放課後、天馬御風と高町なのは嬢が共に歩いているのを目撃致しました！高町嬢はとても上機嫌なご様子であり、それらの状況から察するにあれはで、でででで、デートであると推察されます！」
その男子生徒の報告を聞いた大佐は一つ頷くと、先程と一言一句同じ事を御風に聞いてきた。
「さて天馬御風、何か弁明する事はないかね？」
「いやいやいやいや。デートとかじゃねぇから。なのはとは、同じ探し物があって一緒に行動してるだけだから」
だがしかし、大佐は御風の言葉を聞いた途端、くわっと目を見開いて、
「き、貴様！高町さんを下の名前で呼んでいるのか！？」
「まずはそこからかよ！？」
憤激する大佐に御風は驚愕する。加えて、周りの男子達も大佐と同じ反応をしている。
「もはや貴様に一片の慈悲もいらん！我らH・R・D（ヒルダ）（非リア充同

盟）高町派の恐ろしさをその身に刻んで逝くがいい！」
「何だその無駄に凝った組織名は」
半眼で呟く御風だが、やはり大佐は聞いていない。そんな大佐に同調するかのように、他の男子生徒も口々に御風を非難する。
「高町さんとデートなぞ許せん！」
「しかも下の名前をえらく呼び慣れたご様子。一体二人はどういう関係何ですか！」
「恋人か！？」
「幼馴染か！？」
「腹違いの兄妹か！？」
「最後のは絶対違うからな」
不穏当な発言には一応突っ込む御風である。
「俺だって高町さんとデートしてぇよ！」
「俺は昨日、夢の中でなのはちゃんとデートしたけどな！」
「何……だと……！？しかも貴様、今高町さんを名前で、ちゃん付けで呼んだな！会員規則第１６条４項目、『彼女の名前を勝手に呼ぶべからず』を忘れたのか！？」
「夢の中でどんなデートしたのか、言ってみろ！」
「お花畑で手を繋いで、ふふふ、ふふふふふ」
「えらくメルヘンだな」
「手を繋いだだと！？この裏切り者め！皆、こいつの処断が先だ！かかれぇっ！」
「上等だ！Ｈ．Ｒ．Ｄの悪鬼ども！貴様ら全員、全滅だぁ！！」
「いや、お前も数秒前までその悪鬼どもだっただろーが」
御風の突っ込みは誰にも聞こえてない様子だった。一瞬で仲間割れを始めたＨ．Ｒ．Ｄの面々をどうしようかと思った御風だが、これ以上関わり合いになりたくなかったので、放って置く事にした。
彼らを尻目に自分の席に着いた御風は、空を見上げて思いに耽る。
（フェイトの奴、昨日大丈夫だったかな）
今日も今日とて、フェイトの心配をする御風であった。

※

「そろそろ行こうか、アルフ」
フェイト・テスタロッサは、己が使い魔にそう呼び掛けた。
手には小さなケーキの箱。その格好は普段なのはや御風が見ている黒いバリアジャケットではなく、可愛らしい私服姿である。
「甘いお菓子、かぁ……。こんなもの、あの人が喜ぶのかねぇ」
フェイトが手にしたケーキの箱をつつきながら、アルフが言う。
「わかんないけど、こういうのは気持ちだから。……早くいかないと、母さんが心配しちゃうね」
「心配、するかぁ……？あの人が……」
難しい顔で唸るアルフに、フェイトは少し困ったような顔で微笑みかけて、
「母さんは少し不器用なだけだよ。私には、ちゃんと解ってるから」
「む～……」
そのように主が全幅の信頼を置く「母さん」に含む所があるアルフは不満そうに唸って黙りこんだ。
「……次元転位、次元座標８７６Ｃ、４４１９、３３１２、Ｄ６６９、３５８３、Ａ１４６０、７７９、Ｆ３１２５」
二人の足元に金色の魔法陣が渦を巻く。
「開け、誘いの扉。『時の庭園』、テスタロッサの主の元へ！」
魔法陣から膨れ上がった光がフェイトとアルフを包む。数瞬の後、二人の姿は「世界」から消えていた。
体が引き摺られる様な浮遊感を感じた後、二人は己達の本拠地、『時の庭園』に帰って来ていた。
「……帰ったのね、フェイト」
早速母の元へ報告に行こうとしたフェイトの耳に、その声が飛び込んできた。
よもや迎えに出てくれるとは思っていなかったフェイトの顔はパッ

と喜色に輝く。
アルフは心の準備ができていなかったのか、むっと眉を顰めて嫌そうな顔である。
波打つ様な黒髪に、病的な程白い肌を持った黒衣の美女――プレシア・テスタロッサ。
フェイトの母、その人である。

※

その日の夕刻。
放課後、いつもの様にジュエルシードの探索に赴こうとしていた御風は、背筋が震えるような感覚に襲われた。
（これは……、ジュエルシードか！？）
その時、驚愕する御風の携帯に一通のメールが届く。差出人は、高町なのは。
メールを開いてみると、
『ジュエルシードが発現したって、ユーノくんから念話が来たよ！現地集合しよう！場所は海鳴臨海公園！』
と、書かれていた。
「りょーかい……！」
御風は人気のない路地裏に飛び込むと、ばさりと翼を広げて大空へ舞い上がった。

※

フェイトの使い魔、アルフはその内心を苦々しい物でいっぱいにしていた。
その源は己が主の母、プレシア・テスタロッサと、不敬ながらも己が主、フェイト・テスタロッサに対するものである。
（何だってフェイトは、あんな女にこうも従うんだい！）

話は、数刻前まで遡る。
時の庭園に帰ったフェイトを待っていたのは、母による労いの言葉――等ではなく、フェイトの不手際を責める言葉と、教育を称する鞭による体罰であった。
心身共に打ちのめされたフェイトにアルフはプレシアに対する怒りと不満を爆発させるが、フェイトはそれをやんわりとなだめた。
そして力無い笑みでこう言うのだ。
自分は大丈夫だと。
母さんは自分のためを思ってしてくれているのだと。
だって、自分達は親子なのだからと。
ジュエルシードは母さんにとってとても大事な物で、それをちゃんと集めて来れなった自分が悪いのだと。
そんな訳ない、たとえそうであったとしても、自分の娘に鞭を打っていいはずがないと、アルフは思ったが、
「ずっと不幸で悲しんできた母さんだから、私、なんとかして喜ばせてあげたいの」
傷だらけの体で、そう美しく微笑む主の姿に、その母を思う気持ちの強さに、アルフは黙りこむしかなかった。
（あの子を守ってやれるのはあたしだけだ。あの子がこれ以上傷つかないよう、これ以上無茶をしないよう、あたしが頑張るんだ。だから――）
「邪魔をするなぁっ！」
アルフは吠え叫ぶと、目の前にるジュエルシードの暴走体に挑みかかった。

※

御風が現場に到着すると、すでに戦端は開かれていた。
無事修復の完了したレイジングハートを手にしたなのはとユーノのコンビ。

そしてこちらも修理を終えたらしいバルディッシュを手にしたフェイトとアルフの主従。
それら二組が相対するのは、公園の樹が変じた物であろう、妖樹であった。
「邪魔をするなぁっ！」
一声吠えたアルフがオレンジの魔力弾を妖樹に放ったが、それは妖樹が張った見えざる壁に阻まれ、虚しく虚空に散った。
「バリアを張れんのか……！」
妖樹の力に目を見張った御風はばさりと翼をはためかせ、なのは達の元へ飛んだ。
「悪ぃ、遅れた！」
「御風くん！」
「来てくれたか……！」
御風の参入に喜ぶなのはとユーノとは対照的に、フェイトとアルフは顔を険しくする。
「ミカゼ……！」
ぎゅっとバルディッシュを握りしめるフェイト。
「やっぱり来たね、あいつ……！」
昨日は主を庇ってくれた相手である御風に、アルフは少し複雑な気持ちを抱いたが、それでもフェイトの邪魔をするならば容赦しないと、牙を剥きだし唸る。
そして当の御風と言えば、昨日ぶりとなるフェイトを見て眉を顰める。
（何か、昨日よりも余裕がなくなってねぇか、あいつ？）
フェイトの悲壮感すら漂う様子に、御風は何があったのかと訝しんだ。
その時、新たな闖入者に吠えた妖樹の足元から鋭い槍に似た何かが飛び出して来た。
慌ててそれらを回避する面々だが、何かは御風達の後を追う様に次々に飛び出してくる。

「根っこか、ありゃ！」
妖樹の攻撃を看破した御風は、風刃を生み出してそれらを切り裂いた。
「多芸な奴だな」
防御、攻撃と今までのジュエルシードの暴走体よりも色々と繰り出してくる妖樹に、御風が唸る。
「なのは、俺があいつの動きを止めてやる！お前は封印しろ！」
御風のその言葉に、なのはは戸惑った様な声を上げる。
「で、でも御風くん。あれ、何かバリア張るんだけど！」
「お前の魔法なら力づくで何とかなりそうな気もするけど……。まか、被害が大きくなりそうだから止めとこう。それに、ここにはもう一人封印できる奴がいるだろ」
「あ……」
その言葉になのはが目をやる先には、フェイトの姿。フェイトは、不意に御風から発せられた提案に戸惑った様な顔をした。
「私に、協力しろというの…？」
「効率がいいし、余計な怪我とかせんでもいいだろ」
フェイトはしばしの逡巡の末、こくりと一つ頷いた。
「よっしゃ、話は決まりだ！任せたぜ、なのは！フェイト！」
「うん！」
「わかった！」
二人の魔法少女がそれぞれのデバイスを構える。
そして御風は【魔法（マテリアル・パズル）】を発動させ、掌に風を凝縮させていく。
「喰らって沈め！【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『大圧縮球（ツザンメン・ドリュッケン）』！」
御風は掌に生まれた光の球を、妖樹に向けて投げつけた。
当然それは妖樹のバリアに阻まれるのだが、それを受け止めた瞬間、妖樹は凄まじい過負荷に襲われ、その体を地面にめり込ませた。
少しでも気を抜けば、己の壁が破られるの感じた妖樹は、必死にこれを受け止める。当然、他の事に気をやる余裕など無く、その姿は完全に無防備になった。

「今だ、やれ！」
御風の声を合図に、なのはとフェイトが己の魔法を解き放つ。
「お願い、レイジングハート！」
『オーライ』
「行くよ、バルディッシュ！」
『イエス・サー』
二人の杖の先端に、それぞれの魔力光が灯る。
「撃ち抜いて！ディバイン――」
『バスター』
「貫け、轟雷！」
『サンダースマッシャー』
轟音と共に桃色と金色の魔力砲撃が、妖樹を十字に打ち貫く。
断末魔の悲鳴すら許されず、妖樹は瞬時に光の粒子と化して消滅した。
後に残るのは、青く煌めくジュエルシードのみ。
「ジュエルシード、シリアル7！」
「封印！」
二人の声と共にジュエルシードの封印が完了する。
だがしかし、本番はここからである。
ジュエルシードを挟んで睨みあう二組の探索者達。
「ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ……」
フェイトが告げる。
「うん…昨夜みたいな事になったら、私のレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュも、可哀想だもんね……」
なのはが応じる。
「だけど、譲れないから……」
フェイトがバルディッシュを構える。
「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど……」
なのはもまた、レイジングハートを構えて迎え撃つ態勢をとる。
「私が勝ったら……、ただの甘ったれた子じゃないって証明して見

せたら、お話……聞いてくれる？」
なのはの真剣な言葉と表情に、フェイトはしばしの後頷いた。
口を挟んではいけないと、当人達以外が固唾を飲んで見守る中、二人の間に流れる静かな時間。
そして――。
「てぇぇぇいっ！」
「はぁぁぁぁっ！」
二人が裂帛の気合いと共にそれぞれの杖で打ちかかる。
なのはとフェイト、４度目の激突。そう思われた刹那。
二人の間に突如青い魔法陣が生じ、そこから現れた人影が、互いのデバイスの一撃を受け止めていた。
「ストップだ！」
金属板で補強された黒の詰襟のコートを纏った黒髪の少年が鋭い声を発する。
「ここでの戦闘は危険過ぎる！」
突如己達の戦いに割って入った少年を、なのはとフェイトは茫然と見つめる。
「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聴かせてもらおうか！」
少年――クロノ・ハラオウンが強い意志を込めた視線で戦場を見やりながら言った。
それを受けた【魔法使い】、天馬御風は、風を操る者として一言述べた。
「お前空気読め！」
口にこそ出さなかったが、その場にいた全員が内心で頷いていた。

彼女の母と三人目の魔導師（後書き）

何だか色々出てきました。
余談ですが、この小説以外にもう一本「にじファン」さんで書き始めました。
「カンピオーネ！」とバンプレストの名作ＲＰＧ「ＯＮＩシリーズ」のクロス小説です。よろしければ、そちらもご一読下さい。
それでは、また次回。

言えない気持ちと肉食系彼女（前書き）

ようやく半ばまで来ました。
最終話まで頑張ります。

言えない気持ちと肉食系彼女

第９７管理外世界、地球。
その近辺まで来たアースラは、サーチャーを現地へ転移させ現地映像の送受信を可能にした所で、現地で行われている戦闘をキャッチした。
その映像をブリッジの大型モニターで映し出した所、そこに映ったのはロストロギアの暴走体らしき怪物と、それと戦闘を行っている二組の魔導師達の姿であった。
片方は黒のバリアジャケットを纏い、戦斧の様な形態に金色の宝玉の付いたデバイスを持った金髪の少女。その傍らにいる巨大な四足獣は、恐らく使い魔だろう。
片方は白と青のバリアジャケットを纏い、長い杖の形態に赤い宝玉の付いたデバイスを持った少女。その傍らには一人の少年とフェレット。最も、フェレットは使い魔ではなく、その魔力反応からして変身魔法を用いている人間であると推察される。
問題は残る一人、少年の方である。
映像の中で少年は、バリアジャケットを纏う事もなく、デバイスも持たず、背中に白い翼を背負って魔法らしき力を振るっている。
それの何が問題なのかと言えば――。
「魔力反応が無い？」
クロノの問いに、エイミィは戸惑ったような顔で頷いた。
「うん。この男の子、魔力反応が感知できない。データ上じゃ只の一般人に分類される程だよ」
「いや、しかし……」
クロノの視線の先では、少年は風の刃を生み出し、暴走体に攻撃を加えている。
「じゃあ、あれは一体何なんだ？」
「ごめん、過去のデータにも似たような事例はないんだ。つまり、

全くのアンノウンって訳だね」
「むぅ……」
思わず黙り込むクロノ。現地にて魔導師が介在している可能性はあったので、二組の少女達についてはそれ程驚きはなかった（その馬鹿らしくなるほど大きな魔力は別として）。
だが、映像の中、縦横無尽に空を舞う少年の存在は全く予想外であった。
この存在がロストロギアにどう関わっているのか――。
考え込むクロノの背中に、リンディ艦長の声が飛ぶ。
「彼が何者なのか、その目的は何なのか、全ては現地に飛んで事情を聴けばわかる事だわ」
リンディはモニターに映る映像を険しい顔で見つめながら、
「……次元干渉型の緊急案件。まずはこのロストロギアの回収が最優先です。クロノ・ハラオウン執務官、出られる？」
「転移座標の特定はできています。命令があればいつでも！」
その力強い言葉に頷いたリンディは、出撃の命令を下す。
「それじゃあ、クロノ。これより現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回収、そして関係者からの事情聴取を！」
「了解です、艦長！」
そう言ってクロノが転送ポートで現地へ赴こうとした時、
「気を付けてね～」
リンディは何処からか取り出した白いハンカチを、クロノに向かってふりふりした。
「は、はぁ。行ってきます……」
いきなりの奇行に思わず力を抜きかけたクロノだが、引き攣った笑みと共に何とかそう返した。
その足元で青い魔法陣が輝き、クロノの体が光に包まれる。
数瞬の後、現地へ到着したクロノは、今にもぶつからんとしていた二人の魔導師の間に割って入り、その攻撃を受け止めた。
「ストップだ！」

突如現れたクロノに驚く、二人の少女。
「ここでの戦闘は危険すぎる！」
クロノはそんな二人を牽制するように鋭い視線をそれぞれに向ける。
「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聴かせてもらおうか！」
そう言って、その視線をそのまま周囲に向ける。そこには驚く巨狼。
唖然とするフェレット。そして、何故か怒ったような顔をする件の少年がいた。
（何だ？）
疑問に思った瞬間、少年はこちらを指差して怒鳴った。
「お前空気読め！」
「はぁ！？」
出会い頭に訳の訳らない事で怒鳴られたクロノは、困惑気味に声を上げた。

※

いきなり怒鳴られたクロノと名乗った少年は、当たり前だが「はぁ！？」と困惑した様な声を上げた。
無理もない、と一方では思う御風だが、あのタイミングであれは無いわ、と思う御風も一方でいたので、クロノのそのちょっと間の抜けたような顔は少しいい気味だった。
その間にも三人はゆっくりと地面の上に降りて行く。
「と、ともかく！まずは二人とも武器を引くんだ。このまま戦闘行為を続けるなら……っ！」
地面に降りたクロノが仕切り直すかのような大きな声でそう言いかけた瞬間、突如上空からオレンジ色の魔力弾がクロノに向けて降り注いだ。
だが――。
「ふっ！」

短い呼気と共に瞬時に生み出された青い障壁が、それらを悉く弾いた。
それを見た御風が目を見張る。
（魔法の展開速度がなのははもちろん、フェイトよりも早ぇ！こいつ、結構な凄腕か？）
その時、上空からアルフの声が響き渡る。
「フェイト、撤退するよ！離れて！」
アルフは再度クロノに牽制の魔弾を放ちながら、己の主を促した。
それを受けたフェイトは、素直に退く事をせず、上空に飛び上がると同時に封印済みであったジュエルシードに向かって一直線に飛ぶ。
その動きを見て取ったアルフは、流石は使い魔と言うべきか、瞬時に牽制に撃った魔弾のベクトルをクロノ本人ではなく、その足元へと変える。
轟音と共に地面が砕け、土煙が煙幕となってクロノの周囲を包んだ。
その隙にフェイトがジュエルシードに手を伸ばす。
しかしその刹那、煙幕を裂いて青い魔弾がフェイトに向かって突き進む。フェイト達の動きを読んでいたクロノのが放った物である。
あわや青の魔弾がフェイトの体に直撃する、そう思われた瞬間、
ぎぎぎぎぃんっ！
フェイトの体を渦巻いた風の障壁が、クロノの魔弾を全て弾き散らせた。
「あ……」
思わず目を見開くフェイトの視線の先には、こちらに守護の魔法をかけた、空中に浮かぶ御風の姿があった。
「ミカゼ」
「……すまねぇ、フェイト。この間みたいにジュエルシードは渡す訳にはいかねぇ」
その言葉にはっとフェイトがジュエルシードが浮かんでいた空間を見るが、そこには何もない。
改めて御風を見れば、いつの間に確保したのか、その手にジュエル

シードが握られている。
「この間ユーノに――ダチにもう軽率な真似はしねぇって、誓ったばかりだからな」
「……」
御風の言葉に、フェイトはきゅっと唇を噛んで黙り込んだ。
「……フェイト、何があった？」
「！」
御風は真剣な顔でフェイトを見つめている。
その瞳には、相も変わらず何故か自分を心配する色が窺えた。
一瞬、フェイトはこの少年に全て話してみたい衝動に駆られた。出会ってから今に至るまでの時間は少ない。それでもなお、自分が傷ついてもこちらを心配してくれるこの優しい少年ならば、己が果たさねばならない使命と、母への思いを、解ってくれるのでないかと。
フェイトは、そう、思ってしまった。
だが――。
「……なんでも、ないよ。大丈夫だから」
いつか己の使い魔に言った様な優しい拒絶の言葉を、フェイトは口にしていた。
あの日、少年の友人であるあの白い魔導師は、己の住む町と大切な人達を守るために戦っていると言っていた。ならば、この少年がここにいるのも同様の理由だろう。
そしてもし、少年が自分の事情を知れば、それぞれの目的に挟まれて、余計な苦しみを背負わせる事になるだろう。
そんな事はさせられない。
そしてフェイトは、先に感じた衝動に蓋をし、心の奥深くへと沈めた。
一方で御風は、フェイトの言葉から彼女の心情を察し、それ以上何も言えず口をつぐんだ。
「次は、こちらがジュエルシードを頂きます」
短くそう告げて、アルフを伴い、フェイトは御風に背を向けて飛び

去って行く。
「……フェイトっ！！」
その背中に、御風の言葉が飛ぶ。
「か、風邪ひくなよっ！」
呼んだは良いものの、結局何を言っていいのか分からなくなった御風は、咄嗟にそう言った。
「何言ってんだい、あいつは」
横のアルフは呆れたような声でそう言ったが、フェイトは御風の言葉に理由もなく涙が出そうになった。
こちらがどれだけ拒んでも、彼の思いは変わらないのだと、フェイトは心のどこかで安堵していた。

※

「心配ぐらいさせやがれ、馬鹿野郎……」
去り行くフェイトの背中にもどかしい物を感じた御風は、口の中でそう呟いた。
そんな御風を地面で待っていたのは、クロノ少年の険しい顔だった。
「何故、あの子を庇ったんだ？」
受けた御風は不敵な笑みを口に浮かべ、
「対立してるとは言え、こっちはあいつらに色々と思う所があるのさ。少なくとも、いきなり現れた何処の誰かわかんねーような黒づくめにやらせるつもりはねぇよ」
暗にお前の事を信用していないと言い放った御風に、クロノはますます険しい顔をする。
そんな二人を取り成す様に割って入ったのは、ユーノである。
「落ち着いてよ、御風。この人は時空管理局――僕らにとっては味方だよ？」
だが御風は首を縦に振らない。
「こいつらが本物って保証がどこにある？生憎、この世界には時空

管理局なんて組織はねぇんだ。確かめる術はない」
その言葉にいよいよクロノの顔が険悪な物に変わる。御風も依然として態度を崩さない。
そんな二人の間に挟まれたユーノと、状況を見守るしかなかったなのはは、内心でおろおろである。
その時。
『ならば、その証明のためにもこちらに来ていただく訳にはいかないかしら？』
「ぅおっ！？」
空中に緑色の魔法陣が浮かび、そこに一人の女性の姿が映し出され、唐突に話しかけられた御風は、思わず驚きの声を上げる。
『取り敢えずはクロノ、お疲れ様。』
「すみません、片方は逃がしてしまいました。……いや、逃がされたと言うべきでしょうか」
ちらりと横目で御風を見るクロノ。その視線に含まれた剣呑な物を感じた御風は、こちらも「ぁあん？」と言う感じで思い切りクロノにメンチを切った。
『ま、それも事情がありそうだし、仕方が無いわ。それで、さっきの話の続きだけど、こちらの身分証明と、事情聴取のため、君達には『アースラ』まで来て欲しいんだけど』
クロノを宥めるように言った女性は、再び御風達に向き直って言う。
「あーすら？」
『私達の船の名前よ。あ、自己紹介が遅れたわね。私はリンディ・ハラオウン。次元航行艦『アースラ』の艦長です』
「艦長？若っ！……あれ？ハラオウンって……」
御風の言葉に、リンディは照れたように頬を押さえると、
『あら、若いだなんて上手ねぇ？そちらのクロノとは、お祭しの通り身内よ』
「へぇ、お姉さんですか」
御風がそう言うと、リンディはますます嬉しそうな顔になった。

『やだぁ、この子ったら、ホントお上手？でも、残念ながら、姉じゃなくてお母さんでーす』

「うそぉっ！？」

リンディの言葉に、御風は驚愕した。一方のなのはとユーノと言えば、なのはは己の母がかなり若い容姿をしている事を幼い頃から見て来ているし、ユーノにしても自身は孤児であるが、そんななのはの母の姿を見ているので、若い容姿の母親と言うもに耐性があったため、あまり驚かなかった。

「あー……、そろそろ、いいだろうか？」

はしゃぐ母の姿が恥ずかしかったのか、少し赤くなりながら、クロノは話を先に進めようとした。

「む……」

その言葉に御風となのははユーノの方をちらりと見た。この場において時空管理局という組織を知るのはユーノだけであったからだ。両者の視線を受けたユーノはこくりと一つ、了承の頷きを出す。

「……わかりました。案内してください」

御風はそう、リンディに返した。

※

しばらくして、御風達の姿は『アースラ』の中にあった。

「すげぇ……！」

なのはとユーノが念話で何らかの会話をしているのを尻目に、御風はアースラ内部の近未来的な姿に、感嘆の声を上げた。

「【魔導師】の船ってんで、何かえらく古めかしい帆船みたいのを想像してた」

「それはそれで違う気もするが……。まぁ、ともかく、『アースラ』へようこそ。ああ、それといつまでもその格好と言うのは窮屈だろう。バリアジャケットとデバイスは、解除しても平気だよ」

御風の言葉に苦笑しながら、クロノがなのはに向けて言う。

「あ、そっか。そうですね」
言われたなのはがバリアジャケットを解除し、デバイスを待機状態へ変化させると、元の制服姿に戻る。
「君も、元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」
それを見届けたクロノが、今度はユーノに言う。
「あぁ、そう言えばそうですね。ずっとこの姿でいたから忘れてました」
言うなり、ユーノの小さな体が光に包まれる。
数秒後、そこにはいつかの淡い金髪に緑の瞳を持った美少年が立っていた。
「お、人間バージョンだ。久しぶり、ユーノ」
「毎日会ってるじゃないか」
御風の言葉に笑ったユーノだが、突如その顔を引き攣らせて少し後ずさる。
「？……うぉっ！？」
その様子に何事かとユーノの視線を追うと、そこには異様な程興奮したなのはの姿があった。
頬は上気し、きらきらと光る瞳の中には、ハートマークが浮かんでいる。
「男の子の……ユーノくんだぁ……？」
「な、なのは？」
感動したかのようにそう呟くなのはの姿に、ユーノは恐る恐る声を掛けてみるが、当のなのはには届いてないようだった。
「フェレットのユーノくんも可愛くていいんだけど、やっぱり男の子のユーノくんカッコイイ……？それに、人の姿なら手を繋いだり、腕を組んだりできるし、更にはそれ以上のあんな事やこんな事、それ以上のそんな事もって、もー何言わせるのユーノくんのエッチぃ？」
一人でブツブツと呟きながら、いやんいやンと体を振るなのは。当然、ユーノや御風はドン引きである。

その内、なのはに更なる変化が訪れる。
だんだんと息が荒くなり、きらきらとした目はギラギラと肉食獣の様な輝きを持った物に変わり、ユーノに向かってにじり寄って行く。
「なのは？なのはさん？お、落ち着いて！？」
フェレット系草食男子のユーノは、その眼に完全に呑まれていた。
近寄るなのはに合わせて後ずさるも、そこは狭い艦の中、すぐに壁を背にしてしまった。
「ゆ、ユーノくん……。私、私もう――」
そう言いながら、なのはは怯えるユーノに覆い被さり――。
「Ｖ〇プロペラチョップ！！」
「ですとろん！？」
瞬間、旋風の如き御風の手刀がなのはの首筋に打ち込まれ、なのはは謎の声を上げながら昏倒した。
ずぅん、と前のめりに倒れ伏すなのはを前に、今だ恐怖に怯えるユーノ。そんなユーノに御風は一言。
「ユーノ……。大丈夫か？」
万感の思いを込めて言った。その瞳に宿る心配の色は、下手をすると先のフェイトの物よりも濃い。
「う、うん大丈夫だよ、御風……」
ようやく動けるようになったユーノが、御風に言葉を返しながら倒れ伏したなのはを介抱する。
「……なのはの事はもちろん大好きなんだ。優しい所も、勇気ある所も、その、今みたいにちょっとエキセントリックな所も。でも僕としては、もうちょっと焦らず、少しずつ二人の時間を積み重ねていけたら、なんて思うんだ」
そう言ってユーノはぽっと顔を赤くした。
「乙女か」
そんなユーノに容赦なく突っ込みながら、御風はこの二人に関してはもう何も言うまいと思った。なんだかんだでいいカップルなのだから、納まるべき所に納まるだろう。

「えーと……。君達の間で、何か見解の相違でも……？」
完全に蚊帳の外だったクロノが、事態が収束したのを見計らって声を掛けて来た。
「気にしないでくれ。……頼むから」
そんなクロノに、御風は疲れた声で言った。

言えない気持ちと肉食系彼女（後書き）

何かなのはが壊れ気味な気がする……。
もっと自重させた方がいいでしょうか？それともこんな感じで突っ走った方がいいでしょうか？
それでは、また次回。

甘党艦長と空を見上げる子供達（前書き）

中々話が進みません。

甘党艦長と空を見上げる子供達

恐ろしい事に、目を覚ましたなのはは、先程の事を覚えていなかった。
「あ、ユーノくん。男の子の姿になるのって、久しぶりだね～」等と無邪気に言うなのはに、御風とユーノは唖然とするしかなかった。
そのように少しごたついたものの、一同は無事アースラ艦長、リンディ・ハラオウンの待つ部屋の前までやって来ていた。
「艦長、来て貰いました」
自動ドアを開いて声を上げたクロノに続いて、御風達三人も部屋の扉をくぐる。そして、
「おぉ」
「あっ」
「へぇ」
その部屋の内部を見た三人は、それぞれ感嘆の声を上げた。
そこは、扉一枚隔てた無骨な通路とは完全に異なり、棚には盆栽、床には赤い敷物。傘が立てられ、鹿威しまで鳴っている。
まさに野点、といった風情であった。
「お疲れ様。さ、三人ともどうぞどうぞ。楽にして」
赤い敷物――毛氈（もうせん）の上に座した美女、リンディ・ハラオウンが柔和な笑顔を浮かべ、御風達を手招きした。

※

リンディに促されるまま、野点の席に着いた御風達は、自己紹介をしつつこれまでの経緯を話した。
ユーノがロストロギア『ジュエルシード』を発掘した事。
輸送船の事故により、ジュエルシードが地球にばら撒かれてしまった事。

それを回収するためにユーノが地球に降り立った事。
しかし力及ばず、現地において魔法の素養があったなのはに協力を求めた事。
途中、地球独自の物と思われる魔法、【マテリアル・パズル】を操る御風が介入してきた事。
三人でジュエルシードの探索を始めた事。
その最中、現れるはずのないもう一人のジュエルシードの探索者である魔導師、フェイト・テスタロッサとその使い魔アルフが現れた事。
そして今に至る事。
それらを長々と聞いたリンディは、ふぅ、と一つため息を吐き、
「なるほど、そう言う事だったの……。ユーノさん、あなたのした事は立派だと思うわ」
ユーノの行動を称賛するリンディ。その一方で、と思う気持ちを、クロノが代弁する。
「だが、無謀でもある」
バッサリと切り捨てられたユーノがしゅん、と項垂れる。
だが、そのクロノに異を唱える人物が一人。
「その無謀のおかげで、俺達の世界は、大した事にならないで済んだんだ」
御風である。御風は、クロノに視線を当てながら更に続ける。
「俺達が相対してきたジュエルシードの暴走体は、洒落にならない物ばかりだった。もし、ユーノの責任感がここまで高くなかったら、もっと大きな被害が出てただろうし、最悪何人もの人間が死んだりしてたかもしれねぇ。にも拘らず、客観的な事実だけでユーノを責めるのは、納得いかねぇな」
御風の言葉に同調したなのはも口を開く。
「ユーノくん、必死だったもの。この世界の人達に被害を出さないようにって。だから私も――私と御風くんもお手伝いしなきゃって思えたし、今もお手伝いしたいって思っている。だから、ユーノく

んを悪く言わないであげて下さい」
「御風、なのは……。ありがとう」
二人の自分を擁護する言葉に、ユーノは顔を綻ばせた。
そしてそれを聞いたクロノはしばしの沈思の後、
「そう、だな。確かに、君の行動で救われた命も多々あっただろう。これほどの案件で初動の遅れた僕達が、そんな君を責めるのは、確かにおかしいな。……すまなかった、ユーノ・スクライア」
そう言って、何とユーノに頭を下げて来た。
「そ、そんな。頭を上げて下さい！」
執務官に頭を下げられたユーノは、大いに慌てた。
「その上で、君達にお願いしたい。ロストロギア――ジュエルシードの回収を、僕達管理局に任せてもらえないだろうか？」
「え……」
思わずなのはが声を上げ、御風はきゅっと眉をしかめる。
「そもそも、御風、でいいかな？御風の言う通り、ジュエルシードの暴走体は危険な代物だ。それに、当のジュエルシードは次元干渉に関わるほどのロストロギア。こう言っては何だが、素人だけで何とかなっていた今までが僥倖と言うものだろう。……もう一人の探索者である魔導師の存在もある。名誉挽回、と言う訳ではないが、これ以上君達にこの件に関わらせて大怪我でもさせたら、それこそ管理局の名折れだ」
クロノは御風達に目を向け、真摯な口調で言った。
「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って、元通りに暮らすといい」
その言葉にはこちらを心配する物が窺えた。クロノなりに、まだ幼い少年少女達を案じているのだ。
だが、しかし。
「……こちらを心配してくれてんのはわかります。でも、申し訳ないですが、それを聞く訳にはいきません」
御風は、クロノの要望をはっきりと断った。

「理由を聞いても、いいかしら？」
それまで黙っていたリンディが、静かな声で尋ねた。
「個人的な理由になりますけどね、俺もなのはもあの魔導師――フェイトに思う所があるんです。どうしても、伝えなきゃならない言葉があるんです。それを放り出して、自分達だけがのうのうと元の生活に戻る事はできません」
なのはもまた、真っ直ぐな気持ちをリンディ達に伝える。
「私も、フェイトちゃんが何で戦っているのか、まだ聞いてないんです。それに――」
（何で、あんなに寂しそうな目をしているのかも）
不意に言葉を途切れさせたなのはを、リンディとクロノが怪訝な目で見る。その視線に気付いたなのはが慌てて、
「と、とにかく、私もフェイトちゃんを放っておく事はできません」
そして、真剣な顔で御風達はリンディ達を見つめた。
「御風、なのは……」
ユーノが何とも言えない声で二人の名を呟く。
二人を巻き込んでしまった負い目が心の何処かに今だあるユーノにしてみれば、クロノの言葉に従って欲しいという思いはある。だが、一方で二人がフェイト・テスタロッサに対して決して浅からぬ思いを抱いているのも知っているので、どう言葉を掛ければよいのか分からなくなったのである。
その言葉を受けたクロノがなにがしかの反論に口を開こうとした瞬間、
「……わかりました」
「艦長！？」
突如のリンディの言葉に、クロノが非難を込めた声でリンディを呼ぶ。
「二人の目は本気よ、クロノ。このまま話を続けても恐らくは平行線。例え強硬に反対したとしても、この二人なら無理矢理介入してくる事も考えられるわ」

いざという時は、と考えていた事をズバリ当てられた御風となのは
は、リンディの視線に思わず目を逸らす。
そんな二人に苦笑しつつ、
「ならば、私達のサポートの元、今回の一件の終息に協力してもら
った方がいいと思うのよ」
「協力、ですか……」
つい先程素人だと言ったばかりの者達の力を借りる事はどうかと思
ったクロノだが、艦長の言葉であれば否はない。
「……わかった。でも、必ずこちらの指示に従う事！危ない事もし
てはいけない。いいね？」
自分達の行動に許可を得る事に成功した御風達は、顔を輝かせてク
ロノの言葉に頷いた。
「それにしてもあれだな。クロノって、俺達と同い年ぐらいだろう
に、何かお兄さんみたいな話し方するんだな」
「あ、確かにそうかも」
御風となのはがそう言うと、クロノが一気に渋面になり、横のリン
ディは吹き出しそうになった。
「「「？」」」
その反応に首を傾げた御風達に、クロノは重々しい言葉で言った。
「……僕は、これでももう１４歳なんだが」
「「「え゛」」」
ぴしりと固まる御風達。やがて再起動を果たした御風は、頭を下げ
つつ言った。
「……年上の人に、色々ナマ言ってすいませんでした」
「そう来たか……」
あまり返された事のない反応に、クロノは少し感心した。
「は～、それにしても、喋りすぎて喉が渇いたわねぇ。あ、なのは
さん達も頂いちゃって」
リンディはそう言いつつ、出されたままになっていたお茶とお茶菓
子を三人に勧める。

「あ、それじゃあ」
「遠慮なく頂きます」
出された茶はどこでゲットして来たのか、高級な玉露であるようだった。
少しぬるくなったお茶を頂いていた御風は、リンディの方を何気なく見た瞬間、口に含んでいた玉露を吹き出しそうになった。
そこには、玉露の中に何故か砂糖を投入しているリンディの姿があった。
それを見たなのはも、喫茶店の娘としてあり得ない物を見たような目になっていた。
更にリンディは止まらない。
砂糖を投下した玉露に、今度はミルクポットからミルクを注いでいる。
なのははそのお茶に対する蛮行ともいうべき行動に、「Ｏｈ……」と何故か外人の様な反応をしている。
そんな「リンディ茶」と言うべき物を、ティースプーンで軽くかき混ぜたリンディは、それに上品な仕草で口を付ける。
御風達が固唾をのんで見守る中、お茶を嚥下したリンディは一言。
「やっぱり、これが一番美味しいわよね～」
「これが……異世界の流儀……！」
「侮れないの……！」
冷や汗を拭いながら、御風となのはが異文化コミュニケーションの難しさを知った。
「いや、あんな事するのは母さんだけだから」
次元世界の名誉のため、クロノはしっかりと突っ込んだ。

※

その後、解放された御風達は、クロノの転送魔法によって元いた場所まで戻されていた。

転送を終えた御風達の視界に、オレンジに染まった空と、臨海公園の景色が飛び込んで来た。
「……戻って来れたね」
色々あったためか、精神的に疲れたなのはが感慨深げに言った。
「だな……」
御風もそれは同様なのか、応じる言葉には疲れが滲んでいる。
「と、とにかく！管理局の協力を得られるようになったのは、いい事だよ！」
そん二人を元気づけようと、ユーノが殊更明るい声で言った。
「ん、まぁな」
そう言って御風は、空を見上げる。今はどこにいるかも解らない、一人の魔導師の少女が飛び去った空を。
（そして、今まで以上にやりづらくなったぞ、フェイト）
御風は心の中でかの少女に呼び掛ける。
（いっその事、このまま捕まっちまった方がいいんじゃないのか？）
もしもそうなったならば。
（あんな、辛そうな顔するぐらいなら、よ）
彼女は普通の少女として、笑えるのだろうか。
夕日が沈む空を見つめ、御風は少女を想った。

※

海鳴市より少し離れた所にある遠見市。
フェイト達がこの世界での居住地としているのは、その場所にある高級マンションの最上階であった。
今その場所で、使い魔のアルフがフェイトに訴えていた。
「駄目だよ、時空管理局まで出てきたら、もうどうにもならないよ。……逃げようよ、二人で、どっかにさぁ……」
その言葉をフェイトは弱弱しく拒絶する。
「それは、駄目だよ……」

「だって、雑魚クラスならともかく、あいつ一流の魔導師だ！本気で捜査されたら、ここもいつまでばれずにいられるか……」
そう言って俯いたアルフは、ぎりっと歯を噛みしめると、
「あの鬼婆も、あんたの母さんも訳わかんない事ばかり言うし、フェイトにひどい事するし……！」
プレシアへの不満を露わにするアルフを、フェイトはやんわりと諫めた。
「母さんの事、悪く言わないで……」
「言うよ！」
しかし、今のアルフはそれを聞きれなかった。
「だってあたし、フェイトの事心配だ！フェイトが悲しんでると、あたしの胸も千切れそうに痛いんだ。フェイトが泣いてると、あたしの目と鼻の奥もつんとして、どうしようもなくなるんだ」
アルフはそう言いながら、顔を覆って涙を流す。
「フェイトが泣くのも悲しむのも、私いやなんだよぉ……！」
そんなアルフを見たフェイトは、自身もまた悲しそうな顔で言う。
「アルフと私は、少しだけど精神的にリンクしてるから……。ごめんね、アルフが痛いなら、私もう悲しまないし、泣かないよ」
その言葉に、アルフは己の言葉が主に届かない事を嘆き、床に伏して更に涙した。
「あたしは、フェイトに幸せになって欲しくて！笑って欲しいだけなのに、何でわかってくれないんだよぉ……！」
ぽろぽろと大粒の涙をこぼすアルフを申し訳なさそうに見つめて、フェイトはそれでも変わらぬ己の心の内を明かす。
「ありがとう、アルフ。でも、私、母さんの願いを叶えてあげたいの。……きっと、それは母さんのためだけじゃない。自分のためにも」
フェイトはそっと、泣き続けるアルフの髪を撫でた。
「だから、あともう少し。最後までもう少しだから、私と一緒に、頑張ってくれる……？」

その言葉を受けてアルフは、涙に濡れる瞳でフェイトを見上げて懇願した。

「……約束して。あの人のいいなりじゃなくて、フェイトはフェイトのために、自分のためだけに頑張るって。そしたら、あたしは必ずフェイトを守るから……」

使い魔の言葉に、フェイトは静かに頷いた。

そしてそのまま空を見上げる。

そこには大きな白い月が昇っている。

その輝きは、どこかあの少年の白い翼を思い出させた。

目の前の使い魔同様、自分の事を本気で心配してくれる、【魔法使い】の少年を。

（きっと、もうすぐ終わる。そうすれば、母さんも昔の優しい母さんに戻ってくれる。だから、心配しないくてもいいんだよ、ミカゼ）

フェイトは心の中でそっとかの少年に呼び掛けた。

そして、今だぐすぐすと鼻を鳴らしている己の使い魔に、

「……今日はもう寝ようか、アルフ。風邪をひくと、いけないから」

そう言って、微笑んだ。

甘党艦長と空を見上げる子供達（後書き）

リアルが忙しくて更新が少し遅れました。申し訳ありません。
そろそろこの物語も佳境です。何とか短期で更新できるよう頑張ります。
感想なんかもお待ちしています。厳しいご意見も真摯に受け止めさせて頂きますので、遠慮なく言ってやってください。
それでは、また次回。

盗んだバイクと夜の路（前書き）

うまく筆が進まない……（泣）。
誰か文才をプリーズ。

盗んだバイクと夜の路

「凄いや～！どっちもＡＡＡ（トリプル・エー）クラスの魔導師だよ！」
御風達がアースラを辞した後、海鳴臨海公園での戦闘データを纏めていたエイミィが、歓声を上げた。
スクリーン内で魔法を振うなのはとフェイトの魔力値は、数多の魔導師が所属する管理局の人間から見ても、相当抜きん出た物であった。
「ああ……」
共に映像を見ていたクロノも、半ば感心した様な声で相槌を打った。
「魔力の平均値を見ても、この娘で１２７万……黒い服の娘で１４３万！最大発揮値は更にその三倍以上！魔力だけならクロノくんを上回っちゃってるね～」
「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況に合わせた応用力と、的確に使用出来る判断力だろ？」
クロノ自身は冷静に答えたつもりなのだろうが、エイミィには彼がムキになっている態度が見て取れて、それがおかしく、また微笑ましく思った。
「それはもちろん。信頼してるよ？アースラの切り札だもん、クロノくんは」
「むうう……」
同僚にいいようにあしらわれているような気がして、クロノはどうにも釈然としなかった。
「それにこっちの白い服の娘は、クロノくんの好みっぽい可愛い娘だし？」
悪戯っぽく言ったエイミィだが、クロノの反応は予想していた物とは違って、少し引き攣った様な顔になるという物であった。
「いや、あれは、ちょっと……ない」
数刻前に見たなのはの奇行を思い出したクロノは、はっきりと否定

した。
そんなクロノ様子を怪訝に思ったものの、エイミィは映像を別の物に切り替える。
「片やこっちの男の子は魔力値は零……、のはず何だけど」
次に映し出されたのはその背に白い翼を背負った、黒髪の少年――御風。
データ上では最初に観測した時同様、魔力値は零のままだ。しかし、御風は強力な魔法(らしきもの)を操っている。
「【魔法(マテリアル・パズル)】、か……」
当事者たち三人から聞いた御風の正体は、管理局の人間であっても驚くべきものだった。
自分達が知るどの魔法体系にもない、未知の魔法。
自然界に宿る魔力を己の魔力を持って組み替え、全く別の現象を起こすという力。
それを操るのが、【魔法使い】と自称する、御風の正体なのだと。
「次元世界はまだまだ広い、と言う事ね」
「艦長」
落ち着いた感じの私服に着替えたリンディが、そう言いながら現れた。
「まぁ悪い子じゃないし、彼の操る【魔法(マテリアル・パズル)】も、その特性を考えれば今回の事件向きと言えるし、協力を得られたのは案外ラッキーかもしれないわよ？」
「それは、そうですが」
【魔法(マテリアル・パズル)】の特性たる、変換された魔法は、他者の魔法・魔力の影響を受けないというのは、ジュエルシードを回収するのに適した力と言える。
何せ、どれ程強力な威力の魔法を使おうとも、ジュエルシードには何の影響も及ばさない。
「それよりも、問題なのはもう一人のこの娘」
切り替わった映像に映る黒いバリアジャケットの魔導師――フェイ

ト・テスタロッサを見上げながら、リンディは形のよい眉を顰めた。
「なのはさん達三人がジュエルシードを集めてる理由は解ったけど、この娘は何でなのかしらね」
その言葉を受けたクロノも頷く。
「御風が再三に渡って言っていた通り、何か随分必死でな様子ですね。何か、よほど強い目的があるのか……」
クロノはそう言うと腕を組んで考え込んだ。
「目的、ね」
呟いたリンディがフェイトを見やる。
「普通に育っていれば、まだ母親に甘えていたい年頃でしょうに……」
映像の中のフェイトは、凛とした表情でこちらを見つめている。

※

「母さん、父さん。ちょっと話があるんだけど」
夕食の後、御風は両親を呼んだ。
それは、ある事に許可を得るためであった。
アースラでの会談で、御風達はアースラに協力するにあたって二つの条件を出された。
一つはリンディ達の指示を必ず守る事。
そしてもう一つは、御風、なのは、ユーノの三名の身柄を一時、時空管理局の預かりとする事。
時空管理局としては、今回の案件――ジュエルシードは次元震という大災害の危険をはらんだロストロギアであり、一刻も早く解決しなければならない。
今までの御風達の様に、学業と両立させながら、というような悠長な事はしてられないのである。
御風達にしても、この世界のため、フェイト達のため、少しでも早く事件の終息を目指したいのは同様であり、この条件に関しては文

句はなかった。
問題があるとすれば、しばらく学校を休まねばならない事、家を開けなければならない事。そして、それについて両親を説得しなければならない事であった。
「何、御風？」
「どうしたんだい？」
両親が座ったソファの対面に移動した御風は、いきなりその場で正座した。そして。
「しばらく学校を休ませて欲しい。そして、家も開けさせて欲しい」
そう言って、土下座した。
「え、な、何言ってるんだい？」
いきなりの発言と行動に、御風の父は大いに慌てた。
それに対し、母は御風の様子をじっと見つめて、
「いきなりそれでは話が進まないわ。理由を、言ってちょうだい」
静かに言った。
それを受けた御風は、顔を上げて両親の目を真っ直ぐに見つめて答えた。
「誰かのために頑張れる、凄ぇ優しいダチがいる」
異世界から来た、今はフェレットに転じている魔導師の少年。
「どんな困難でも、自分の信念と勇気で立ち向かえる、格好いいダチがいる」
白い服を纏った、不屈の勇気と魔法の力を手にした少女。
「いつも無茶ばかりして、放っておけねぇ奴がいる」
黒い衣装に身を包み、金の髪を靡かせた、何故か目を離す事が出来ない少女。
「そいつらと一緒に、そいつらのために、やらなきゃならねぇ事がある」
ジュエルシードの事。フェイトの事。アースラの事。
様々な事象が御風の脳裏に浮かんで消える。
そしてそれは、御風の中で決意となって定まった。それを言葉に乗

せて、御風は短く告げた。
「だから行く」
しかし、それは両親にとって到底納得できるものではないだろう。
現に、御風の父はその顔を困惑でいっぱいにしていた。
そして御風の母は――。
「解ったわ。行ってらっしゃい」
あっさりとOKした。
「ちょ、母さん!?」
御風の父が己の妻に言葉に御風が驚くよりも先に思わず声を上げた。
「あなた」
母は、そんな父を只の一言で黙らせた。
「……いいのかよ?」
御風がようやく尋ねた。普通ならば、あんな言葉で小学生の息子の休学と外泊を認めるはずはない。御風の心中は疑念だらけである。
「あなたも私の息子だったって事ね……」
御風の母は何かを懐かしむような顔をした。
「私も昔は、敵対するチームに攫われた後輩やダチ公を救うため、鉄パイプ一本手にして相手に乗り込んで行った物だわ……」
「は?」
いきなり話が異次元に飛んだ。
その横で父も昔を思い出したのか、頭を抱えて震えている。
「いや、やめて下さい……。ジャンプしても小銭なんてないですから……。靴下の中に何も入れてませんから……」
そんな父の肩を叩きながら母は朗らかに笑った。
「やーねぇ、あなた。私があなたをカツアゲした事なんて……ほんの一、二回ぐらいしかないじゃないの」
(あるんかい)
御風は思わず突っ込みそうになったがやめておいた。今の母に迂闊な事をするのは怖すぎる。
「そんなやんちゃな過去があるからかな。私にも、御風の言いたい

事が少し解るのよ」
やんちゃなんて可愛いもんじゃねぇだろ、と言いたかったが、御風はそれを驚異の自制心を以って我慢した。
「他人からどう思われようと、自分にとって絶対に退いちゃいけない場面て物はあるわ。御風、あなたが今からしようとしているのが、それなのね」
「……うん」
母の言葉に御風は頷いた。
「誰かに言ってもしょうがない事なのよね？」
「うん」
「自分で決めた事なのよね？」
「うん！」
御風の母は、御風の返答を聞くと大きく頷いた。
「なら、詳しい事は聞かないわ。頑張ってらっしゃい。怪我、しないようにね」
そう言って微笑む母は、とても盗んだバイクで走りだすような過去があるようには見えなかった。少し大人しい感じの、ごく普通の女性である。
「あ、ただし、これだけは忘れないで」
「？」
次の瞬間、母は今までの大人し目の印象をがらりと変え、目をギラリと輝かせ、口元を不敵に歪めた。
「男が一度決めたんだ。やるからには半端はゆるさねぇ。途中でケツまくる様な舐めた真似だけはすんじゃねぇぞ？」
その何とも男らしい言葉を受けた御風は、こちらも口元をにやりと歪めると、
「応っ！！」
力強く返事をした。
その様子に御風の父は、
（御風はやっぱり、母さん似だなぁ）

二人の口元に浮かんだ笑みがそっくりなのを見て、そう思った。

※

耳元を轟々と風が鳴る。
夜気に染み込む風の冷たさが、御風の肌を切り裂いた。
それでも、御風はその背に背負った翼を震わせるのを止めない。
向かうは一つ、次元航行艦『アースラ』。
その時御風の目に、地上を走る少女の姿が飛び込んできた。
栗色の髪を二つ括りにし、肩にフェレットを乗せた彼女こそ、高町なのは。
御風の友達にして、背中を預ける相棒である。
「なのは、ユーノ！」
御風は二人に呼び掛けながら降り立った。
「御風くん！」
「御風、そっちも上手くご両親を説得できたみたいだね」
ユーノの言葉に、御風の顔に不思議な物が浮かぶ。
「いや、あれってうまく説得したって言えるのかなぁ……？」
困惑しながら首を傾げる御風に、これまた二人が首を傾げた。
「まぁいい。……行くか！」
「「うん！」」
後戻りはもうできない。
自分が決めた道。
でも、傍らには友がいる。
背中を預けて共に舞う、相棒と言う名の戦友がいる。
ならば、何を恐れる事があろうか。
そして、少年少女達は、彼らを待つ戦場へ向かった。

盗んだバイクと夜の路（後書き）

短くてすいません。
区切りが良かったので今回はここまでです。
原作の倍の話数である２６話を目指して無印は書いているつもりなので、なんとかそれ以内にまとめます。
それでは、また次回。

謎の総統とリンディの罠（前書き）

感想もちらほらと頂けるようになりました。
皆さんの温かいお言葉に大感謝です。

謎の総統とリンディの罠

「そう言う訳で、高町さんはご家庭の事情で何日か学校をお休みするそうです」
３年１組の担任の言葉を聞いて、アリサとすずかは今はぽっかりと空いた自分達の親友の席を見た。
そして二人は、それがなのは達が行っている『探し物』に関わりのある事を悟った。
学校を休まねばならないほど逼迫した事態なのかと、不安が無い訳でもない。
でも。
「高町さんがお休みの間、ノートとプリントは……」
「はい！私が！」
「アリサさん、それじゃ、よろしくね」
「はい！」
「待つ」と決めたのだ。
なのはが、いつでも笑って、無事に帰って来れるよう、『親友』で待つと。
アリサとすずかは、互いに目を合わせると、くすりと笑った。
「さて。それじゃあ、ホームルームを始めましょう」
そして今日も、変わらぬ一日が始まる。

※

「あー……、そんな訳で、天馬はしばらく学校を休むらしい」
３年３組の担任の言葉を聞いて、かのクラスを中心とする広域組織『Ｈ．Ｒ．Ｄ』の面々は、ぽっかりと空いた自分達の宿敵の席を見た。
彼らにとってリア充は皆、怨敵である。

「これでしばらくは、我が校も平和だ」
「うむ、思う存分美少女を愛でられるという物よ」
会話が既に小学生の物ではないが、そこに突っ込める人材は生憎お休み中である。
その時、メンバーの一人が難しい顔で黙り込む少年――通称『大佐』に気付いた。
「どうしましたか、『大佐』？」
その言葉を受けた『大佐』はしばしの沈黙の後、重々しい口調で言った。
「……高町さんも……お休みであられた……」
「「何……だと……！」」
その言葉に『H・R・D』――特に高町派から驚愕の声が漏れた。
宿敵と己達の女神の同時休学――。果たして、それが意味する物とは。
「ま、まさか、かけおｔ……」
「黙れ！」
『大佐』は自身も考えていた一つの可能性を示唆されそうになって、思わず声を荒げた。
「そのような事があるはずがない！口を慎め！」
「も。申し訳ありません！」
『H・R・D』の鉄の規律は、たとえそれが同い年であっても、同じクラスの仲間であっても関係無いのであり、幹部の言葉はある意味絶対である。
「落ち着くのだ、『大佐』よ」
その時、そのようにいらいらしていた大佐の耳に、そんな言葉が届いた。
「この声は――！」
慌てて声の方を振り向いた『大佐』の目に、頭からつま先まで、全身をすっぽりと黒い布で覆った人物の姿が映った。
「そ、『総統』！」

『大佐』が驚愕を露わにする。
いつの間にか現れたこの人物こそ、『H．R．D』を束ねる首領、通称『総統』である。
「い、いつからそこに……」
「ふふふ……。その様な些事はどうでもいい。それよりも話は聞かせてもらった。『大佐』よ、君は今、我らにとって一番大切な事を忘れているのではないか？」
「た、大切な事……？」
「それは「信じる」と言う事だ」
その言葉に『大佐』ははっと目を見開く。
「我ら『H．R．D』は美少女を疑ってはならない。我らは『H．R．D』として、彼女が無事に帰ってくるのを待てばよいのだ。ましてや、偶然同時期に休学したぐらいの事で、彼女を疑うなどもっての外よ。その様な事があろう筈がない」
どこかの金髪ツンデレと同じような決意を固めながら、彼らは存在その物が残念過ぎた。
そしてそれを聞いた大佐は、目から鱗が落ちたような気分で跪いた。
「『総統』のおっしゃる通りです。……ですが、それでも万が一、億が一、天馬と高町嬢がそのような関係だった場合は――」
「くどい」
『総統』は『大佐』の苦言をぴしゃりと切った。
「もう一度言おう、『大佐』。その様な事実は『ない』」
その時『大佐』は、『総統』の言葉に秘められた意図を悟った。
例えそのような事実があったとしても、『総統』はその原因である少年――天馬御風を、消せ、と言っているのだ。
「――そうですな、確かに、そのような事実はありませんな」
「わかればいい」
己の企図する所を悟った部下に、『総統』は満足気に頷いた。
そして今日も、変わらぬ一日が始まる。
「……ホームルームは……いいや」

最初から異様なほど疲れた様子を見せる3年3組の担任を除いて。

※

○オームゾーン、もとい、広域結界内に封じられた空間で、一羽の鳥が空を待っていた。
と言っても、只の鳥ではない。翼長にして十数メートルはあろうかという、まさに『怪鳥』である。
「如何にも人を取って食いそうな大きさだよな」
御風が『怪鳥』の大きさにげんなりとして言った。
「や、やめてよ、そういう事言うの」
顔を青くするのはユーノである。既に魔力は全快し、フェレットの姿ではないが、元小動物として『怪鳥』の姿はそれなりに恐怖を煽るらしい。
「そうはさせないためにも、はやく封印を！」
そう言ってなのはが気合いを入れる。手にしたレイジングハートも主人に応えるが如くきらりと煌めく。
「だな。それじゃあ、いつもの如く行くぜ！ユーノ、サポートよろしく！なのははとどめだ！」
「「了解！」」
二人の返事を聞くや否や、御風もまた背中に翼を顕現させ、『怪鳥』に向かって羽ばたいた。

※

「状況終了です。ジュエルシードナンバー8、無事確保」
アースラのブリッジにて、オペレーターの一人が告げる。
「お疲れ様、なのはちゃん、ユーノくん、御風くん。ゲートを作るから、そこで待ってて」
『はーい』

対して披露した様子もなく、元気にそう答えたなのはに、リンディが満足そうに頷く。
「う～ん。３人ともなかなかに優秀だわ。このまま内に欲しいくらい。……最も、御風くんだけは特殊だから、どういう扱いになるかわからないけど」
御風達がアースラに赴き、時空管理局の臨時局員と言う肩書きを手に入れて数日が経った。
管理局との連携の元、ジュエルシードに専念する事はなるほど効率が良く、またサポート面でも充実しているため、御風達の探索は飛躍的にその環境を良くしていた。
今だうんうんと頷くリンディの横で、エイミィとクロノが、黒衣の魔導師の情報を洗っていた。
「この黒い服の娘、フェイトちゃんって言ったっけ？」
エイミィの言葉に頷くクロノ。
「フェイト・テスタロッサ……。かつての大魔導師と同じファミリーネームだ」
「へぇ、そうなの？」
「だいぶ前の話だよ」
クロノが当時の事が書かれた資料を思い出しながら言った。
「ミッドチルダの中央都市で、魔法実験の最中に次元干渉事故を起こし追放された大魔導師……。最も、その事故は実は彼女の雇い主である企業が起こしたミスによるもので、彼女自体には何の咎もない事が後でわかり、すぐにその名誉は回復された。でも、その頃には彼女は既に何処かへ姿を消していたそうだ」
「ふぅん……」
「今もミッドに留まってくれていれば、どれ程の技術的躍進があったかわからない。惜しい事をした物だよ」
「凄い人だったんだねぇ。じゃあ、この娘はその人の関係者なのかな？」
エイミィは首を傾げるが、クロノは即断はしなかった。

「さぁね。本名とも限らないし」
その時、フェイトの魔力から現在位置を探ろうとしていたサーチャーが「エラー」の文字を返してきた。
「あちゃー……。やっぱり駄目だ、見つからない。フェイトちゃんてば、よっぽど高性能なジャマー結界を使ってるみたい」
「使い魔の犬……」
クロノが映し出されたアルフのデータを見て難しい顔をする。
「たぶんこいつがサポートしてるんだ」
「おかげで、こっちが見つけたジュエルシードをもう2個も向こうに奪われちゃってる」
そんな風にぼやくエイミィを見てクロノは励ます様に言う。
「しっかり探して捕捉してくれ。頼りにしてるんだから」
「はいはい」

※

しかし、そんなエイミィ以下アースラクルーの努力を嘲笑うかのように、フェイト達は姿を隠し続けた。
その間、御風達が確保したジュエルシードは3個。しかし、それ以降ジュエルシードの反応はぷつりと途絶え、アースラのメンバーはその捜索域を海上にまで広げていた。
フェイト達に奪われた分も数えれば、これまで発見されたジュエルシードの総計は１５個である。
だが、残りの６個もフェイト達も見つからぬまま、１０日の日が無為に過ぎて行った。

※

「今日も空振りだったね……」
「おぉ。これは、思った以上の長丁場になるかもな」

「そうだね」
進まぬ探索に日々の一時、アースラの食堂内で御風、なのは、ユーノは休憩していた。
クッキーを貪りながらぼやくなのは、御風に言葉に応えたユーノは、不意に申し訳なさそうな表情になった。
「ごめんね、なのは。寂しくない？」
「いや、俺には聞かねぇのかよ」
「御風はどうもそんな感じがしなくて」
ユーノにそう言われた御風は、事実、寂しくも何ともなかったので黙ってクッキーにかぶりついた。
「別に、ちっとも寂しくないよ。ユーノくんや御風くんもいるし、一人ぼっちでも結構平気。ちっちゃい頃は、よく一人だったから」
なのはは、その頃の事を思い出して少し悲しそうな顔をした。
「ウチ、私がまだちっちゃい頃にね、お父さんが仕事で大怪我して、しばらくベッドから動けなくなった事があったの」
「……」
「喫茶店も始めたばかりで、今ほど人気がなったから、お母さんもお兄ちゃんもずっと忙しくて。お姉ちゃんもずっとお父さんの看病で」
ユーノも御風も、静かに語るなのはに口を挟まず黙って聞いている。
「だから私、割と最近まで家で一人でいる事が多かったの……。だから、結構慣れてるの、一人でいる事に」
「そっか……」
聞き終えたユーノが嘆息するように言った。
「そう言えば、私ユーノくんや御風くんの家族の事、あんまり知らないね」
問われた御風は難しい顔をした。
「あー……。ウチは父さんが普通のサラリーマンだな。母さんは、その、何だ……。聞くな」
ついこの間まで普通の主婦だと思っていた母のバイオレンスな過去

を知ったばかりの御風は、迂闊なコメントを控えた。
そんな御風を訝しむユーノだったが、気を取り直して己の事を語り始めた。
「僕は、元々一人だったから」
「あ、そうなの？」
「両親はいなかったけど、部族の皆に育てて貰ったから、だからスクライアの一族皆が、僕の家族」
「そう……」
そこで言葉を途切れさせたなのはとユーノは、互いに見つめ合った。
（嫌な予感がする……）
何かを敏感に察知した御風は、とりあえず黙ってその場から離れた。
「ユーノくん、色々片付けたら、もっと沢山、色んなお話しようね」
「うん。色々片付いたらね」
その時、不意になのはが俯いた。
「……でも、もし色々と――ジュエルシードの問題が片付いたら、きっと私達は……」
「なのは」
ユーノはそんななのはの傍らに移動すると、俯くなのはの頬にそっと手をあて、顔を上げさせた。
「あ……」
顔を上げたなのはの目は、涙で濡れていた。
「……すぐに――とはいかないかもしれないけど、この世界への渡航許可を取ったら、また来るから。それに、離れてる間でも連絡も欠かさない」
「ユーノくん……」
「大丈夫。もう、なのはを一人ぼっちにさせないから。僕が、傍にいるから」
その言葉を聞いたなのはは、頬にあてられたユーノの手をそっと握って微笑んだ。
「うん……。ずっと、傍にいてね」

ユーノは静かに、だが力強く頷いた。
一方口の中が甘ったるくてしょうがない御風は。
「え～っと、ブラックコーヒー、凄ぇ苦いブラックコーヒー……って、ここ全部甘いのしか無ぇ！あの艦長の罠か！？」
思わぬ所でかけられたリンディ・トラップに驚愕していた。
その時。
突如警報が鳴り響き、赤い警告灯が激しく明滅した。
「エマージェンシー！捜索域の海上にて、大型の魔力反応を感知！」
それを聞いた3人は、それまでの色々な空気を振り払い、アースラのメインブリッジに駈け出した。

※

「な、何て事してるの、あの娘たち！？」
アースラのブリッジで、レッドアラートとともに緊急事態を告げるモニターを見上げながら、エイミィは驚きの声を上げた。
モニターには海鳴上空の映像が表示され、そこにフェイト・テスタロッサが浮かんでいる。
その足元には、巨大な魔法陣が浮かび上がり、その中心でフェイトはバルディッシュを水平に構え、魔力を練り上げ、呪文を唱えていた。
「アルカス・クルタス・エイギアス。煌めきたる天神よ、今導きの下降り来たれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」
その詠唱に呼応し、魔法陣から金色が海に煌めき漏れる。
「撃つは雷、響くは轟雷。アルカス・クルタス・エイギアス！」
フェイトはバルディッシュを片手に持ち替え、それを構える。それと同時に、フェイトの周囲に眼球を思わせるような強大な雷球がいくつも現れ、それぞれが互いを雷で繋ぎ、あたかも雷の檻を作り出す。
「はぁぁぁぁぁっ！！」

そして裂帛の気合と共に、フェイトはデバイスを振り下ろす。
瞬間、雷の檻は眼下の魔法陣を介し、凄まじい轟雷が海に叩きつけられた。
海上はその膨大な熱量に沸騰し、巻き上げられた水が雨の様に周囲に降り注ぐ。
それ程の大魔法に反応しないジュエルシードではない。直後、６本の蒼い光柱が海から立ち昇った。
「見つけた……。残り６つ……！」
顔を歪め、肩で息をしながら、フェイトは光の柱達を見つめた。
「フェイト……」
そんなフェイトを、アルフが心配そうに見つめた。
（こんだけの魔力を打ち込んで、更に全てを封印して。こんなの、例えフェイトの魔力でも絶対限界超えた！）
「アルフ。空間結界とサポートをお願い！」
「ああ、任せといて！」
しかし、己の主に応える声に、心中の不安は滲ませない。
（だから、誰が来ようが何が起きようが、私が絶対守ってやる！）
ただ、強い決意だけが、アルフの中に刻みつけられただけだった。
そうこうしている内に、現れたジュエルシードは周囲の水を巻き上げ、巨大な竜巻となって荒れ狂い始めた。
その猛威を前にしても、フェイトの目に恐れは無い、
「……行くよ、バルディッシュ。頑張ろう」
己の杖にそう呼び掛けると、フェイトは竜巻の群れに挑みかかった。

※

御風達がブリッジに到着した時、その大型モニターに映し出されていたのは、流の如き６本の竜巻に挑むフェイトの姿だった。
「呆れた無茶をする娘達だわ！」
リンディがその様子を見て呆れと驚きの混じった声を上げた。

「確実に自滅します。あれは、個人で出せる魔力を完全に越えている！」
クロノが鋭い視線でモニターを見つめる。
「フェイトちゃん！」
なのはがたまらず叫んだ。
「あの！私達、すぐ現場に……！」
「その必要はないよ」
だが、クロノはそう言ってなのはの言葉を遮った。
「……あいつが、フェイトがすぐに自滅するからですか？」
御風が静かに問うと、クロノはこくりと頷いた。
「そんな！」
なのはが抗議の声を上げようとした瞬間、クロノはそれを押さえるように言葉を続けた。
「普段ならば放っておけと言う所なんだが……。エイミィ？」
「はいは～い」
クロノの声に応えたエイミィが手元のコンソールを操作すると、転送のためのゲートが青く輝いた。
「！クロノさん」
驚きに目を見張る御風達。そんな3人の様子に少し笑ったクロノは、
「君達が戦っている理由は最初に聞いていたからね。管理局員としてはやっていけない事なんだろうが、協力者を無碍に扱う事も出来まい？」
そしてクロノは、まだ驚きに固まる御風達を促した。
「行きたまえ。伝えたい言葉があるんだろう？」
その言葉に再起動を果たした御風達は、頷きあってゲートに向かった。
「ありがとう、クロノくん！」
「ありがとうございます！」
なのはとユーノがゲートを潜る。
「クロノさん、あんた今最高にイカしてるぜ！俺が女なら一発で惚

れてる所だ！」
「僕にも選ぶ権利ぐらいある」
何気に酷い事を言われた御風は、少々傷つきながらこれもまたゲート潜りフェイト達の元へ向かった。
それを見届けたクロノは、リンディに向き直り頭を下げた。
「申し訳ありません。独断で、このような事を……」
「あら、構わないわ。ちゃんと名目も立ってたみたいだし」
そう言ってリンディはにこりと笑った。杓子定規にしか動けなった息子が、少し精神的に成長していた事が嬉しかったのだ。
「そうそう！格好良かったよ、クロノくん！」
「茶化すな、エイミィ」
囃し立てるエイミィを睨んで、クロノはモニターに改めて目を向ける。
「無論、只のいい人で終わる訳はないさ。あの3人には悪いが、漁夫の利ぐらいは狙わせてもらう。エイミィ、タイミングを測っていてくれ」
「りょ～かい！」
そう言いながら、エイミィはちょっぴりドキドキしていた。
先程のクロノの様子が、自分が知る小さな弟分の物ではなく、ちょっと格好いい『男の子』に見えたからである。

謎の総統とリンディの罠（後書き）

海上決戦は次に持ち越しです。
山場の一つなので、精一杯頑張って書きます。
それでは、また次回。

海上決戦と天から来る雷（前書き）

今夜がヤマだー！

海上決戦と天から来る雷

高速で流れる風が、轟々と音を立てて鼓膜を揺らす。
御風、なのは、ユーノの三人は、フェイト達のいる海上の遥か空の上に転送されていた。
「行くよ、レイジングハート」
己のデバイスに呼び掛けたなのはは、朗々と言葉を紡ぐ。
初めて魔法と出会った時の、契約の言葉を。
「風は空に。星は天に。輝く光はこの腕に。不屈の心はこの胸に！」
流れる言の葉が、魔力を伴い集束する。
「レイジングハート、セーットアーップ！！」
『スタンバイ・レディ』
なのはの胸元で、レイジングハートが眩い輝きを放つ。
それを横目に、御風もまた己の【魔法（マテリアル・パズル）】を解放する。
「【魔法（マテリアル・パズル）】、エンゼルフェザー！！」
次の瞬間、御風の体から立ち上った魔力が、周囲の風を巻き込みその姿を変えていく。
かちゃかちゃかちゃかちゃかちゃかちゃっ！
猛烈な勢いで組み上がるそれは、やがて純白に輝く一対の翼となって御風の背に顕現する。
白と桜の二色の輝きが、海鳴の空を染め上げてゆく――。

※

６個のジュエルシードに挑むフェイトは、上空に湧き上がった膨大な魔力に気付き、天を見上げた。
その視線の先に、天から舞い降りる影が２つ。
白い防護服を纏い、長い杖を手にした少女――高町なのは。
白い翼を背負い、風を纏った少年――天馬御風。

その二人を見た瞬間、フェイトが何かリアクションを起こすよりも早く、アルフが獰猛な唸り声を上げる。
「フェイトの邪魔を、するなぁっ！！」
牙を剥きだして躍り掛かるアルフ。だが、その突進をもう一つの影が止める。
翡翠に輝く結界魔法を展開し、アルフを堰き止めたのは、ユーノ・スクライアである。
「違う、僕達は君達と戦いに来たんじゃない！」
ユーノは止まらぬアルフにそう訴えかけた。
「まずはジュエルシードを停止させないとまずい事になる！だから今は――」
結界を解除したユーノは天高く飛び上がると、印を組んで新たな魔法陣を展開する。
「封印のサポートを！」
その言葉と共に、魔法陣から翡翠色の鎖が伸び、ジュエルシードの竜巻を縛り上げた。
そんなユーノの行動を、アルフは戸惑ったような表情で見つめていた。
一方、御風となのははフェイトの元へと舞い降りる。
「フェイt「フェイトぉっ！」」
なのはが何か言うより先に御風が吠えた。
その言葉に含まれた怒気に、フェイトは体をびくりと震わせた。
「この、Ａ・ＨＯ・ＧＡ！！」
そう叫ぶと同時に、御風はフェイトの頭に鋭い手刀を打ち込んだ。
「へぅっ！？」
短く悲鳴を上げるフェイトに、御風は追撃の手刀を連続で打つ。
「全、然、大、丈、夫、じゃ、ねぇ、だ、ろう、が！」
「へぅっ！」「へぅっ！」「へぅっ！」「へぅっ！」「へぅっ！」
「へぅっ！」「へぅっ！」「へぅっ！」「へぅっ！」「へぅっ！」
びし、びし、びしと音が鳴る度に、フェイトは悲鳴を上げた。

「この――」
御風が更に手を振り上げると、フェイトは予想される衝撃に目をギュッと閉じた。
しかし。
ぽすっ。
予想と違い、その最後の一撃は、今までの物とは比べ物にならないほど弱々しかった。
「……？」
不思議に思ったフェイトが目を恐る恐る開けると、
「あんまり、心配かけさせんじゃねーよ……」
顔を歪め、何故か泣きそうな表情をした御風が、そこにいた。
それを見たフェイトは思わず。
「ご、ごめんなさい……」
そう、謝っていた。
それを聞いた途端、御風は大きくため息を吐き、フェイトの頭に当てていた手刀をそのまま翻し、フェイトの髪をぐしゃぐしゃーっと乱暴に撫でた。
「ぁう」
「もっと色んな事言ってやりたかったけど、これで勘弁してやらぁ」
御風はそう言って笑った。
フェイトは、そんな御風を、半ば茫然と見つめた。
「えーっと、もういいかな？」
それまで完全に蚊帳の外だったなのはがそう聞いてきた。

※

「手伝って！ジュエルシードを止めよう！」
なのははそう言うと、杖を突き出した。すると、そこから桃色の魔力線が伸び、フェイトの持つバルディッシュの宝玉部へ吸い込まれていった。

それを受けたバルディッシュは、根元から白い蒸気を放出して、
『パワー・チャージ』
己に魔力が漲るのを主に告げる。
『サプライング・コンプリート』
レイジングハートもまたそう告げた事で、フェイトはなのはが自分に魔力を分け与えた事を理解した。
何故？といった表情でフェイトはなのはを見やる。
「二人できっちり、半分こ！」
その視線を受けたなのはは、力強く頷いた。
「ユーノくんとアルフさんが止めてくれてる。だから、今の内！」
その言葉に使い魔の方を見れば、アルフは初めて見る少年と共に、竜巻に魔法の鎖を絡め、その動きを封じていた。
「なのは、俺も行く。あの二人だけじゃしんどいからな。……よろしく頼んだぜ、フェイト！」
御風はそう言うと、背中の翼を羽ばたかせて二人の元へと向かった。
言い残した言葉に、フェイトが断ると思う所等微塵もなかった。
「二人で、「せーの」一気に封印！」
なのはもそう言うと、レイジングハートをシーリング・フォームへ変形させ、天高く舞い上がる。やはりその姿からは、フェイトを疑う様子はない。
フェイトの心は、疑問で溢れていた。
何故、あの二人はこうも自分を信用するのだろうか？
何故、自分は、あの二人と行動する事に、嫌な物を感じないのだろうか？
『シーリング・フォーム、セット・アップ』
そんな風に乱れるフェイトを促す様に、バルディッシュがひとりでにシーリングフォームへ変形する。
「バルディッシュ」
愛杖は余計な事を言わず、只宝玉を煌めかせた。
空を見上げれば、魔法陣の上に降り立ったなのはがこちらにウィン

クしていた。
今だ思う所はあれど、フェイトはとりあえず、己の思うままに行動する事にした。

※

「無事か！？ユーノ、アルフ！」
必死に竜巻を押さえるユーノとアルフに、御風はそう呼び掛けた。
「御風！何とか、押さえてるけど……！」
「きついよ、こりゃ……！」
二人は苦しそうに返答を返した。
「なのはとフェイトもやるみたいだ。あいつらの負担を減らすためにも、踏ん張りどころだぜ！」
「フェイトが……！」
アルフが主の行動に驚く。だが、それは決して悪い事ではない。
（少なくとも、こいつらの今までの行動に嘘はないからね）
アルフが内心で頷いている間に、御風は【魔法（マテリアル・パズル）】を構築する。
両の手を合わせた間に、風が唸りを上げて集っていく。それは御風の魔力と混ざり合い、やがて抑えきれぬように白く輝く力の塊になった。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『風陣大突破（ヴィント・ホーゼ・ドゥルフブレッヘン）』！」
次の瞬間、掌から解き放たれた風の塊は、白く輝く竜巻となってジュエルシードの竜巻を2本ばかり貫通した。
それと同時に、風に流れる御風の魔力が、ジュエルシードを封印する。
「やった！」
それを見て歓声を上げるユーノだが、御風の顔は今だ緊張を湛えたままだ。
「あくまでも簡易的な封印だからな。こんだけ魔力が荒れ狂う領域じゃ、そんなに長く保たねぇぞ！」

その言葉通り、封印されたジュエルシードは、他者の魔力の影響を受けないという【魔法(マテリアル・パズル)】の封印を受けたにも拘らず、内側からその力を開放しようとしていた。
びしりと音を立てて弾けそうになっている風の封印は、ジュエルシードに込められた力と、この海域に満ちた魔力がどれ程のモノか物語っていた。
「厄介だね、全く！」
アルフが舌打ちしながら言う。
「同感だ。だが、時間は稼げたみたいだな。見ろよ、主役達の準備は整ったみたいだぜ！」
その言葉に天を見上げたユーノとアルフは、そこに金色と桃色の輝きを見た。

※

なのはとフェイト。
二人の少女から、凄まじい魔力が放出される。
それぞれの足元で回転する巨大な魔法陣から、押さえきれぬ程の魔力光が漏れ出し、周囲を桜と金に染め上げる。
「せーのっ！」
なのはの声を合図に、二人の大魔法が解放される。
「サンダァァァ……！」
フェイトがバルディッシュを天に掲げる。
「ディバイィィン……！」
なのはがレイジングハートを竜巻の群れに向ける。
「レイジィィィッ！！」
フェイトが掲げた杖を足元の魔法陣に突き立てる。
瞬間、周囲を金色に染め上げ、天を割る様な威力の雷撃が竜巻に降り注いだ。
「バスタァァァッ！！」

そしてそれを追う様に、なのはは全力の『ディバインバスター』を撃ち放つ。
爆発したかと思う程の威力の砲撃が、ジュエルシードに突き進む。
一瞬の静寂。
しかし次の瞬間、周囲の轟音の立てて震えた。
大気が鳴動し、二人の魔法の余波で大地が捲れ上がり、岩盤が粉々に吹き飛んだ。
「海鳴市の海の生き物の終了のお知らせ」
「いや、洒落になってないから」
思わずそう呟いた御風に、ユーノが突っ込んだ。
そして、それをモニター越し観測していたアースラのメンバーは、茫然とその結果を見届けた。
「じ、ジュエルシード6個全ての封印を確認しました！」
我に返ったエイミィが報告する。
「な、何てでたらめな……」
クロノが信じられない様に呟く。
「でも凄いわ……」
目を見開いて驚いていたリンディが、漏れるような声色で言った。

※

封印されたジュエルシードの輝きが、なのはとフェイトの間で煌めいている。
（一人ぼっちで寂しい時に、1番して欲しかった事は、「大丈夫？」って聞いてもらう事でもなく、優しくしてもらう事でもなくて）
その輝きを受けながら、なのはは自分の気持ちに気付き始めていた。
（同じ気持ちを分け合える事。寂しい気持ちも、悲しい気持ちも半分こにできる事）
雲間から太陽の光が僅かに漏れ出る。それに呼応するかの様に、なのはの心も晴れて行く。

（ああ、そうだ。やっと解った。私、この娘と分け合いたいんだ）
なのはは確となった心を掴む様に、己の胸に手を当てて、フェイトを見つめた。
「友達に、なりたいんだ」
その言葉を受けたフェイトの目が見開かれる。
静寂の中、二人の少女が空で見つめ合う。
それは、決して冒し難い、1枚の絵画の様な美しさを伴っていた。
故に、御風も、ユーノも、アルフも、何も言わず、只二人を見守った。
その時。

※

警告音と共に、アースラに再びレッドランプが点滅する。
「次元干渉!?別次元から、本艦及び戦闘空域に向けて魔力攻撃来ます!……あ、後6秒!?」
「なっ!?」
クロノが上を見上げた途端、次元の空間を切り裂いて、紫の雷光がアースラに襲い掛かる。
「うわぁぁぁぁぁっ!?」
その衝撃にアースラのクルー達が悲鳴を上げる。
そしてその雷は、御風達がいる海鳴市上空にも降り注ぐ。
大気を揺るがす轟音と共に、紫電の輝きが着弾する。
それを目にしたフェイトが驚きの声を上げる。
「か、母さん……!?」
直後、そのフェイトに向けて紫の雷が降り来る。
「やべぇっ!」
フェイトの危機を察した御風が、咄嗟にフェイトの周囲に何重もの風の結界を張り巡らせる。
だが、しかし。

「ぅあぁぁぁぁぁぁぁっ！？」
紫の閃光はそんな風の盾をやすやすと貫き、フェイトを容赦なく撃ち据えた。
「マジかよ……！」
咄嗟とは言え、かなりの強度を誇る風の結界を、しかも複数まとめて貫通したその雷の威力に、御風は愕然とする。
「フェイトちゃん！？」
呼び掛けるなのはにも、掠める様に紫電が走る。
力を失い海に落ちるフェイトを、人型に変じたアルフが猛スピードで近づき拾い上げた。
そしてアルフは、その勢いのまま天を舞い、今だ宙に浮かぶ6個のジュエルシードを回収しようと手を伸ばす。
だが、その直前で、その手は何者かのデバイスに阻まれる。
状況を見て咄嗟に転移してきた、クロノ・ハラオウンが、アルフの企図を遮ったのである。
「邪魔ぁ……」
アルフは殺気の籠った目でクロノを睨みつけると、S2Uを握りしめたその手に魔力光を宿し、クロノデバイスごと吹き飛ばした。
「するなぁっ！」
吹き飛ばされたクロノは苦悶の悲鳴を上げながら、小石の様に海を跳ねた。
それを憎々しげに睨みつけていたアルフは、視線をジュエルシードの戻した瞬間愕然とする。
「3つしかない！？」
慌てて吹き飛ばしたばかりのクロノを見れば、その指の間に残りの3つが挟まれていた。
クロノはそれをすぐに己のデバイスに格納する。
「ぅぅぅぅっ、うわぁぁぁぁっ！！」
怒りのあまり絶叫したアルフが足元の海に魔力弾を叩きつける。巻き起こった水柱が、アルフとフェイトの姿を覆い隠す。

それを見ていたリンディが、慌ててクルーに指示を出す。
「逃走するわ！位置の捕捉を！」
しかし、クルーから返って来たのは、己の船の機能が一部停止したという無情な宣告であった。
「……機能回復まで、対魔力防御。次弾に備えて」
「「「はい！」」」
「……それから、なのはさんとユーノくん、御風くん、それにクロノを回収します」
突然の事態に、リンディの顔は険しいままだった。

※

全ての事態が終わったあとで、なのは、ユーノ、御風、クロノがその場に留まっていた。
それぞれの胸中には何が渦巻くのか。
全員が全員、晴れぬ思いを抱きながら、静けさを取り戻した空を見上げていた――。

海上決戦と天から来る雷（後書き）

以上、海上決戦編でした。
この物語も残す所後、僅か（かもしれない）。
最後まで頑張りマス！
それでは、また次回。

それぞれの胸の誓いと最初で最後の本気の勝負（前書き）

無印最高のシーンまで来ました。
下手をこかないよう、一生懸命書かせていただきます。

それぞれの胸の誓いと最初で最後の本気の勝負

海上での出来事の後、御風達はアースラへと戻っていた。
そのアースラの会議室内で、御風達は事件の主犯についての詳細を伝えられていた。
「プレシア・テスタロッサ……？」
御風が目の前に浮かびあがった映像データの人物の名を呟いた。
「そうだ。僕達と同じミッドチルダ出身の魔導師。専門は次元航行エネルギーの開発。偉大な魔導師だった人物だ。登録されていた彼女のデータと、攻撃してきた魔力波動が一致している」
「だった？」
過去形で言われた言葉尻を捉え、ユーノが訝し気な顔をした。
「違法研究と、それに伴う事故によって放逐されたんだ」
その時、プレシアの詳細なデータを読んでいたリンディが口を挟んだ。
「でも、クロノ。確かそれは……」
「はい。プレシアが起こしたとされる事故や違法研究は、全て当時彼女を雇っていたある企業が起こした物で、寧ろ彼女自身は最後までその研究の安全性について訴え続けていたと、後になって内部告発によって明らかになっています」
「ひどい……」
なのはがそれを聞いて顔をしかめた。
「それが切っ掛けになってその企業を調べた結果、凄い数の隠蔽工作が明らかになってね。叩けば叩くほど埃が出るような状態だったらしい。もちろん企業のトップをはじめ上役たちは全員檻の中、その会社も解体され、プレシア女史や、それ以外にその企業の犠牲になっていた人達の名誉は回復されている」
「どんな人だったんスか？」
御風が尋ねると、クロノは別のデータを呼び出して読み上げる。

「内部告発をしてきた人物の証言によれば、当時の彼女は研究熱心で人当たりも良く、多くの人達に慕われていたらしいが……、それがどうかしたのか？」
「いや……。フェイトの奴、あの時『母さん』って言ってたんです」
「つまりフェイトとプレシア女史は――」
「親子、ね」
クロノの後を継いでリンディが難しい顔で言った。
そして、なのはもあの時の事を思い出す。
「それに、なんだかフェイトちゃん……」
「怖がってたように見えた、だろ？」
「やっぱり、御風くんもそう思った？」
なのはの言葉に御風は頷く。
「おう。だから何か違和感を感じるんだよな。皆に慕われていたプレシアさんと、フェイトに怖がられていた『母さん』のプレシアさんが、違う人みたいで」
それを受けたクロノが腕を組んで考え込む。
「ふむ、確かに……。だが、彼女はその時の事件以来姿を眩ませていたんだ。地位も名誉も全て地に落とされ、人が変わっても仕方ないんじゃないか？」
「そんなもんスかねぇ」
人の心は移ろい易い物だ、と言うクロノに、御風は一応の納得をする。
「フェイトちゃん、お母さんのために頑張ってたのかなぁ」
なのはがぽつりと呟くのを聞いて、御風は内心で考える。
（お母さんのため、か）
御風は、初めてフェイトと会った時に、彼女が身内のために戦っている事を本人から聞き出している。
故に、先の戦いまでその直向きさからよほどその身内とは深い繋がりがあるのだろうと思っていた。
だが――。

（もしかしたらフェイトのあの必死さは、お母さんのためって言うより、お母さんのせい、って事だったのかもしれねぇ）

「プレシア・テスタロッサ」

御風は誰にも聞こえぬよう、もう一度その名を小さく呟く。

二つの異なる印象を受ける女性。

そのどちらが、本当の彼女の姿なのだろうか。

※

アルフは可能ならば、視線だけで人を殺せそうな程苛烈な眼差しをその扉に向けていた。

その腕の中には傷つき、気を失った己の主――フェイト・テスタロッサの姿がある。

つい先程まで、フェイトはプレシアによって激しく鞭打たれ、ジュエルシードの奪取における不手際を詰られていたのだ。

今までずっと我慢してきたアルフだが、ここにきてもはや堪忍袋の緒が切れてしまった。相手が主の母親である事など、完全に頭から消え失せていた。

自分の大切なご主人さまを傷つけたあの女に、自分が何をしたのかを解らせてやらねば気が済まない。

そっとフェイトをその場に横たえたアルフは、プレシアがいるであろう扉の先に向かって歩き出した。

※

「ぐっ！？ごほっ、げほっ」

プレシアは自身の口に手を当て、こみ上げてくる咳を必死に堪えた。

その手の隙間から抑えきれなかった赤黒い血が漏れてくる。

「もう、時間が無い……」

呻くプレシアの頭上で、９つのジュエルシードが青く輝いている。

その輝きに照らされながら、プレシアは自分の体をぎゅっと抱きしめた。

「後少し、後少しで、私の望みが叶うから……」

その表情は、普段フェイトに見せている様な能面の如きものではなく、生々しい感情の浮かんだ物であった。

「……お願い、もう少しだけ保って頂戴……」

プレシアがそう呟いた瞬間、背後の扉が轟音ともに砕け散った。

口元の血を拭い、表情を元の無貌へと戻したプレシアが振り返ると、そこにはフェイトの使い魔、アルフが怒りを湛えた顔で立っていた。

それを確認したプレシアは、何の興味も無くなった様な態度で、顔を逸らした。

そんなプレシアに構わず近づいたアルフは、一定の距離まで来た瞬間、プレシアに襲い掛かった。

しかし、その奇襲は振り返りもしなかったプレシアの張った紫の魔力障壁によって防がれる。

障壁の圧力に吹き飛ばされるアルフだが、そのまま倒れず堪えると、再びプレシアに躍り掛かる。

「ぐぅぅぅ……っ！」

その指先が後僅かで届く、と言う所まで来ると、アルフは力を込めて無理矢理障壁を破壊した。そしてその勢いのままプレシアの胸倉を掴み上げて叫んだ。

「あんたは母親で、あの子はあんたの娘だろう！？あんなに頑張ってる子に、あんなに一生懸命な子に、何であんなひどい事が出来るんだよぉっ！」

至近距離で怒鳴りつけられているにも拘らず、ピクリとも表情を動かさなかったプレシアの口元が、その時僅かに動いた。

「……るわよ」

「……何？」

それを聞き返そうとした瞬間、アルフは己の腹部にひたりと当てられたプレシアの冷たい手の感触を感じた。

まずい、と思う暇もなく、その手から迸った衝撃波が、アルフの体を貫いた。
悲鳴を上げる事すらできず吹き飛んだアルフは、途中石柱を破壊し、轟音を立てて壁にめり込む形でようやく止まった。
「あの子は使い魔の作り方が下手ねぇ……。余分な感情が多すぎる」
そんなアルフにこつこつと足音を響かせながら近付いたプレシアは、口から血を流し苦しむアルフを冷たい目で見下ろした。
アルフは苦しみながらも、今だ失わぬ強い意志を込めた瞳でプレシアを睨みつけた。
「……フェイトはっ、あんたの娘は、あんたに笑って欲しくて、優しいあんたに戻って欲しくて、あんなに……っ！」
そこまで訴えた時、アルフは全身を走る痛みに呻いた。
アルフの知る限り、昔のフェイトとプレシアは、今の様な関係ではなかった。
何故かどこかぎこちないながらも、共に笑い、共に過ごしていたのだ。
そして、そんなプレシアと一緒にいるフェイトは、本当に嬉しそうだった。
蹲るアルフに、プレシアは何も言わず、虚空から取り出したデバイスを向けた。
その先端に紫の光が灯るのを見たアルフは、咄嗟に足元に魔力弾を打ち込み、床を貫き「時の庭園」から脱出した。
（どこでもいい、転移しなきゃ……！ごめん、フェイト……！少しだけ待ってて……！）
落下しながらオレンジの光に包まれたアルフは、転移魔法を使い、何処かへと姿を消した。
一方、大穴の開いたその場を無表情に見つめていたプレシアは、やがて踵を返すと、フェイトのいる場所へと向かった。
やがて、使い魔の仕業だろう、自身のマントを掛けられて気絶するフェイトの元へとたどり着いたプレシアは、静かにフェイトに呼び

掛けた。
「フェイト、起きなさい、フェイト……」
「はい、母さん……」
静かな声であったにも拘らず、半ば条件反射の様に、フェイトはプレシアの声に応えて目を覚ました。
プレシアはそんなフェイトに9つのジュエルシード弄びながら言う。
「あなたが手に入れて来たジュエルシード9つ……。これじゃあ足りないの。最低でも後五つ、できればそれ以上。急いで手に入れて来て、母さんのために……」
「はい……」
返事をしつつ起き上ったフェイトは、自分の体に掛けられたマントに気付いた。
「アルフ……？」
呟いたフェイトに、プレシアは無情に告げる。
「ああ、あの子は逃げ出したわ。怖いからもう嫌だって」
フェイトは、母の言葉が嘘である事がすぐ解った。これまでずっと一緒に過ごしてきた自分ならばわかる。アルフは、そんな事をする子ではない。
精神リンクが切れていない事から、生きている事は解るのだが、どこにいるのか、何をしているのかは分からない。
俯くフェイトに、プレシアは背中を向けながら、
「……逃げたいのなら、あなたも逃げてもかまわないわ、フェイト」
その言葉を受けたフェイトは弾かれた様にプレシアの方を見た。背中を向けているため、表情は解らない。だから、フェイトはその背中に向かって言う。
「私は、逃げたりしません。ずっと母さんの傍にいます」
それを聞いたプレシアは、
「……なら、行きなさい」
ただ、そう告げた。

※

その日、御風はアースラにて与えられた自室で【魔法（マテリアル・パズル）】の修練をしていた。

風の魔力を練り上げ、より精密に、より深く、より強く魔法を構築していく。

目指すは【魔法】の極致――【奥義】である。

かつての夜において失敗し、大怪我を負ったこの魔法を、御風は暇さえあれば構築し、練り上げていた。

そして、その傍らには、普段ならば共にいる友人達――なのはとユーノの姿はない。

二人は今、リンディの計らいによって、ここ数日なのはの家へと帰っていた。

御風にも帰宅の許可は出たのだが、御風はここに来るにあたって、己の母より賜ったお言葉があるので、中途半端な所で帰るのを良しとしなかった。

そんな訳で、空いた時間をこの様に魔法の修練に当てて、来るべき日に備えているのである。

それは勿論、フェイトとの決着、である。

それがどのような形になるかわからない以上、何が起きてもいい様にしておくのは悪い事ではない。なにせ、海上においてのプレシアからの攻撃の様な一例もあるのだから。

その時、突如備え付けられていた映像通信機からコールが掛かった。

「ん？」

魔法の構築を中断した御風は、その通信に応じる。

「何です？っと、エイミィさんか」

そこにいたのはアースラのオペレーターの一人、エイミィ・リミエッタであった。

彼女の口からは、思いもよらぬ言葉が飛び出してきた。

「御風くん、大変！フェイトちゃんの使い魔のアルフが、今なのは

ちゃんのお友達の家にいるみたい！しかも、怪我をしてるんだよ！」
「何っ！？」

※

御風がアースラのブリッジにたどり着くと、映像モニターの中に怪我の所為か包帯を巻き、檻に入っているアルフの姿があった。
「アルフ？」
御風が呼びかけると、アルフは落ち着いた――と言うより、沈んだ声で答えた。
《あんた――ミカゼ、だったね……》
どうやら念話を使っている様だが、アースラの通信を介しているためか、リンカーコアの無い御風にも音声としてちゃんと聞こえた。
「フェイトはどうしたんだ？」
その途端、アルフは後悔を噛みしめるように体を震わせた。
《あたしは、仕方なかったとはいえ、あの鬼婆の所に、フェイトを置いてきちまったんだ……！》
その時、クロノが一歩進み出てアルフに話しかけた。
「時空管理局、クロノ・ハラオウンだ。どうにも深そうなその辺も含めて、事情を説明してほしい。正直に話してくれれば、悪い様にはしない。君の事も、君の主、フェイト・テスタロッサの事も」
それを聞いたアルフは、縋る様な口調で話し始めた。
《話すよ、全部。だけど約束して。フェイトを助けるって。あの子は何も悪くないんだよ……！》
「やくｓ「そんなの、当たり前だろーが！向こうが嫌だって言っても無理矢理だって助けてやらぁ！」」
何か喋ろうとしたクロノを遮って、御風が断言した。
《……そうだね、あんたはそんな感じで、いつもフェイトを助けてくれてた。……あんたがそう言うなら、信じるよ》
「おう！」

笑って頷く御風の横で、クロノがため息をつきながら、「エイミィ、記録を」と、証言の有用性の証拠作りをきっちりとしていた。

《……フェイトの母親、プレシア・テスタロッサが全ての始まりなんだ――》

アルフは、静かに知りうる限りの事情を話し始めた。

それから数十分後、事情を聞き終えた一同は大きく息を吐いた。

予想以上に劣悪だったフェイトとプレシアの関係。

もはや、他人からは親子とは呼べぬほど歪な物と化しているその絆を必死に繋ぎとめようとしているフェイトの事を思うと、御風は辛くて堪らなくなった。

だが、所詮は赤の他人でしかない御風には、フェイトの気持ちをほんの少しでも理解する事は出来ないのかもしれない。

御風は親子関係も良好だし、それ以外にフェイトの感じている孤独等も想像する事しかできない。

自分は、心配する事しかできない。本当の意味で、フェイトを救ってなどやれないのだ。

もし、それができるとするならば――。

「クロノさん、アースラはこれからどう動くつもりで？」

「艦長の命があり次第、任務をプレシア・テスタロッサの捕縛へと変える事になる。アースラに攻撃を仕掛けた事だけでも、逮捕するにはお釣りがくる」

「じゃあ、フェイトの事は？」

御風の問い掛けを聞いたクロノは、御風をちらりと見やり、

「僕からわざわざ言質を取らずとも、君達が彼女を何とかするのだろう？心配しなくてもいい。全て、君達に任そう」

「ありがとうございます。……聞いたな、なのは？」

御風が別のモニターに映るなのはに聞いた。

《うん》

フェイトの事情を聞いたせいか、なのはの声は固いものだった。

「お前は、どうする？」

その短い問い掛けになのははは。
《私は、フェイトちゃんを助けたい！》
こちらも短く、だが強い意志を込めて答えた。
そう、もしフェイトの事を本当に救ってやれるとするならば、それはなのはにしかできないだろう。フェイトとどこか似通った心を持つ、なのはにしか。
同じ思いを共有し、それでも違う志を持つなのはならば、フェイトの強い意志を曲げる事が出来るかもしれない。
どれ程それが誤った物であろうと、母との絆を信じるフェイトにはそれほどの荒療治で無くては考えを改めさせる事等できないだろう。
なにはの答えを聞いた御風は、予想通りの答えににやりと笑った。
「なら、フェイトはお前に任せるぜ」
それを聞いたなのはは目をぱちくりさせて、
《御風くんは、いいの？》
「俺は、あいつを心配する事しかできねぇ。だから、あいつの思いを変えてやることもできなかった。俺の言葉は、あいつには届かねぇ」
《そんな事無いよ！》
御風の言葉を否定したのは、意外な事にもアルフだった。
《あんたが助けてくれたあの夜以来、フェイトはちょっとずつ変わって行ったんだ。ご飯もちゃんと食べるようになったし、きちんと眠るようにもなった。それに、あんまり無茶もしなくなった。そりゃ、あの海では相当な無理もしたけど、それはフェイトがあんたの言葉を聞かなかったからじゃない。プレシアの奴が無理を言ったからさ！フェイトはね、あんたの事を話す時、少しだけ笑っていたんだよ。だから、自分の言葉が届かないなんて、寂しい事を言わないでおくれよ……》
「そっか……」
その言葉を聞いた御風は、穏やかな笑みを浮かべた。自分のしていた事は、無駄ではなかった。あの少女の心に、少しでもいいように

働いてくれたのなら、それはとても誇らしい事だと、御風は思った。
「……そうだとしても、俺はあの海で言いたい事を全部フェイトに言ってやったからな。次はなのはの番だろ？」
《……フェイトちゃんを助けたいのは、アルフさんの思いと、それから私の意思。フェイトちゃんの悲しい顔は、私も何だか悲しいの。だから助けたいの、悲しい事から》
なのはの言葉を聞いていたアルフは、その眼に涙を湛えた。
《それに、友達になりたいって聞いた、その返事をまだ聞いてないしね！》
《……なのは、だったね？頼めた義理じゃないけど、だけど、お願い。フェイトを助けて……！あの子、今ホントに一人ぼっちなんだよ……》
それを聞いたなのはは、強く頷いた。
《大丈夫、任せて！》
「俺も出来る限りのフォローはするさ。俺の話をする時、フェイトがどんな顔して笑うのか、見てみたいしな」
《……ありがとう。二人とも。本当にありがとう……！》
なのはと御風――二人の言葉を聞いたアルフは大粒の涙をこぼしながら何度も礼を言った。

※

その翌日早朝、なのはから連絡を受けた御風は、海鳴臨海公園へと向かった。
御風がたどり着いた時、そこにはすでになのは、ユーノ、アルフの姿があった。
「なのは、ユーノ、アルフ！」
「御風くん」
「御風」
「来てくれたのかい、ミカゼ」

三者三様の声に迎えられた御風は、朝日の昇り始めた公園内を先の三人と並ぶ。

「……ここなら、いいよね。出て来て、フェイトちゃん！」

なのはが、今だ姿の見えぬ彼女に呼び掛ける。御風達は辺りを見まわし、フェイトの姿を探した。

その時、なのはがゆっくりと後ろを振り返った。

『――サイズ・フォーム』

バルディッシュの声が静かに響く。

朝日を背後に、フェイト・テスタロッサが街灯の上に光鎌を宿したデバイスを手に立っていた。

「フェイト……。もうやめよう？」

主の姿を認めたアルフが、必死にフェイトに呼び掛ける。

「あんな女の言う事、もう聞いちゃだめだよ。フェイト、このままじゃ不幸になるばっかりじゃないか。だから、フェイト……！」

しかし、フェイトは使い魔の言葉に首を横に振った。

「……それでも、私はあの人の娘だから……」

その言葉を聞いたアルフはもどかしそうに唸った。

「ミカゼ！あんたからも何か言ってやっとくれよ！」

アルフに促された御風は、フェイトをそっと見上げる。

その紅い瞳と視線を合わせながら、御風は静かに尋ねた。

「……フェイト。お前は、それでいいのか？」

その言葉にフェイトは、

「……わからない」

そう、答えた。

フェイトの答えを聞いた御風は、ふっと寂しそうに笑った。

「……初めて会った時から、お前って正直もんだったよな」

「……そうだね」

フェイトもまた、悲しそうな顔で微笑んだ。

そんなやり取りを聞いていたなのはは、静かにレイジングハートを起動させると、バリアジャケットに自身の服を換装した。

「……ただ捨てればいいってものじゃないよね。逃げればいいってものじゃもっとない」
なのはは、静かに言葉を紡ぐ。
「切っ掛けはきっとジュエルシード。だから賭けよう、お互いの持ってる、全部のジュエルシード！」
『プットアウト』
なのはの声に応え、レイジングハートが全てのジュエルシードを吐きだす。
『プットアウト』
バルディッシュもまた、ジュエルシードを全て出す。
互いの持つジュエルシードが静かに煌めく。
そんな中で、なのはは初めて自分から相手に杖を向ける。
「それからだよ。全部、それから！」
フェイトもまた、応じる様にバルディッシュを構える。
「私達の全ては、まだ始まってもいない。だから、本当の自分を始めるために」
なのはとフェイト。二人の少女の強い意志を込めた瞳がぶつかり合う。
「……始めよう。最初で最後の、本気の勝負！！」

それぞれの胸の誓いと最初で最後の本気の勝負（後書き）

次回はついにフェイトとなのはが本気でぶつかり合います。
そして主人公はおそらく富樫か虎丸的な位置づけになります（笑）。
それでは、また次回。

天を穿つ雷槍と煌めく星光（前書き）

最大の見せ場です。
無印で一番燃えるシーンでもあるので、下手な物を書いていないか緊張してしまいます。

母さん。
私の母さん。
いつも優しかった、私の母さん。
私の名前を優しく呼んでくれた、母さん。
『ね？とてもきれいね、――ア』
母さんが私に作ってくれた花冠を見せながら微笑んだ。
そうだね、とてもきれいだね、母さん。
『さあ、いらっしゃい、――シア』
うん、わかったよ、母さん。
母さんが私に花冠をかぶせてくれた。
『ほら、可愛いわ。――リシア』
ありがとう母さん。
私、凄く嬉しい。
でも、母さん。一つ聞いてもいい？
《アリシア》って、だぁれ？

※

遠い記憶が蘇る。
あの頃は、毎日が幸せだった。
忙しい筈の仕事の合間を縫って、母さんは惜しみない愛を私に与えてくれていた。
でも、いつからだろう。
母さんが私を見てくれなくなったのは。
母さんが私を傷つけるようになったのは。
でも、その辛い日々ももうすぐ終わる。
母さんの願い、母さんの望みを叶えれば、きっと母さんは前の様に

優しい母さんに戻ってくれる。
だから名前の事なんて、別にいい。
私は、優しい母さんが大好きなんだから。

※

「戦闘開始……みたいだね」
アースラのモニタールームにて、なのは達を見ていたエイミィは少し心配そうに言った。
「ああ、そうだね……」
クロノは、そんなエイミィの頭に揺れる、恐らく寝ぐせであろうアホ毛が気になった。
「しかし、クロノくんもちょっと変わったよね。前までなら、こんなギャンブルめいた事、許可しなかっただろうし」
その言葉の最中にも、アホ毛がふりふりと揺れる。
それに我慢できなくなったクロノは、何故かポケットに入っていた整髪料のスプレー缶を取り出した。
「前にも言ったけど、協力者の意思を無碍にするつもりはないよ。それに、なのはが勝つに越した事は無いにしろ、この際勝敗云々は、あまり関係ないしね」
スプレーをからから振りながら、クロノが言う。
「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれている内に、あの子の帰還先追跡の準備をしておく、ってね」
そう言っているエイミィの頭に、クロノはスプレーの中身を吹き付けた。
「頼りにしてるんだからね。逃がさないでよ」
櫛でエイミィの頭を梳いたクロノは、ようやく落ち着いたその髪に満足そうに頷いた。
「おう、任せとけ！」
元気良く請け負ったエイミィの頭の上で、その気合いに応じた様に

再びアホ毛が立ち上がった。
「あら？」
目を丸くしたエイミィに、クロノは小さくため息を吐く。
「……でも、あの事、なのはちゃん達に伝えなくていいの？」
手櫛で頭を直していたエイミィがクロノに確認する。
「プレシア・テスタロッサの家族と、あの事故の事……」
その言葉にクロノは、少しの沈思の後、
「……勝つに越した事は無いんだ。今は、あの子を迷わしたくない」
そう言って、繰り広げられる激闘の映るモニターを見上げた。

※

早朝の海鳴の空を、金色と桜色の光が彩る。
大輪の如く咲く光の円舞の中心に踊るは、二人の少女。
高町なのは。
フェイト・テスタロッサ。
共に、【魔法】という超常の業を振う子供達である。
何度めの激突か。
なのはのレイジングハートとフェイトのバルディッシュが打ち合い、反発し合う魔力が火花のように散る。
双方が弾かれた様に離れた瞬間、フェイトは杖をデバイスフォームへ変形させると、その先端に電光を纏った金色の魔力弾を形成する。
『フォトンランサー』
対するなのはも杖を掲げ、桜色の光球を生み出す。
『アクセルシューター』
それぞれの魔法を構築し終えた二人の視線が交錯する。
その刹那。
「ファイアッ！」
「シューートッ！」
合図と共に二つの魔法が発射された。

なのはは迫り来る雷球を持ち前の機動性を持って回避し、フェイトは追尾性のある光球をある距離まで引き付けてから、魔力障壁を持って一気に防いだ。
しかしその直後、フェイトは目を見張る。
視線の先で、なのはが再び光球を生み出し、フェイトに構えていた。
「シューートッ！」
杖を振るなのはの動きに合わせ、光球が再度フェイトに襲い掛かる。
『サイズ・フォーム』
フェイトはバルディッシュに光鎌を形成すると、迫る光球に自ら突進した。
一閃、二閃、三閃、四閃。
連続で振り抜かれた鎌は、光球を切り散らし、フェイトはそのままの勢いでなのはに迫った。
一瞬驚いたなのはだが、すぐに掌を突き出し、その先に桜色の障壁を作り出す。
『ラウンドシールド』
その直後、鎌と障壁がぶつかり合う。
拮抗するその最中、なのは精神を集中させる。
すると、先程フェイトの光鎌を逃れていた一つの光球が空中でぐるりと旋回し、無防備な背中を晒すフェイトに迫る。
それに気付いたフェイトは、あわや、と言う所で障壁を作り、その一撃を散らした。
そして視線をなのはに戻した時、フェイトは困惑する事になる。
先程までそこにいた筈のなのはの姿がない。
きょろきょろとあたりを見回すフェイト。
『フラッシュムーブ』
「てぇぇぇぇぇいっ！」
気合いの叫びと共に、なのはは眼下のフェイトに高速で迫る。
杖を大上段に構えたなのはに気付いたフェイトは、咄嗟に杖を翳してその一撃を受け止める。

込められた魔力が爆発したように広がり、一瞬二人の空間が光の中へと消える。
その僅かな瞬間、フェイトは光鎌をなのはに振りかぶる。
『サイズスラッシュ』
「はあぁぁっ！」
裂帛の呼気と共に繰り出された一閃は、なのはの胸元を飾るリボンを僅かに切った程度に終わる。
間一髪で躱したなのはは、距離を置こうとして、目を見開く。
自分の進路を予測していたのだろう。そこにはあらかじめ待機しておいた雷球が浮かんでいた。
『ファイア』
無慈悲に告げられるバルディッシュの声と共に、雷球が発射される。
それを小さな障壁を作り何とか弾いたなのはは、今度こそ距離を取る。
互いを遠くに見える距離において対峙し直した二人は、それぞれ肩で息をしていた。
どちらも、疲労の色は濃い。
（初めて会った時は、魔力が強いだけの素人だったのに）
フェイトは目の前の少女に思う。
（もう、違う。速くて、強い）
驚くべき成長速度で自分に迫る少女は、全力で相対しても勝てるかどうかわからないほどの強敵へと変貌していたのだ。
（迷ってたら、やられる！）
覚悟を決めたフェイトは、自分の中の切り札を切る。即ち、最強の【魔法】である。
バルディッシュを胸元で真っ直ぐ縦に構えたフェイトは、己の魔力を解放する。
足元に巨大な魔法陣が浮かび、油断なく見据えるなのはの周囲にもランダムに魔法陣が浮かんでは消える。
それに幻惑されたなのはは、戸惑ったように周りを見回す。

『ファランクス・シフト』
バルディッシュが告げる。
フェイトの周りで、今までに無い程の雷球の群れが舞い踊る。
それを見て尋常でないと感じたなのはが杖を構えようとした瞬間、
「あっ！？」
なのはの四肢を空中に突如浮かんだ金の環が拘束する。
「ライトニング・バインド……！」
拘束魔法を持ってなのはを封じたフェイトは、まさに必殺の構えであった。

※

「まずいよ！フェイトは本気だ！」
アルフが焦った様に叫ぶ。
しかし、二人の戦いを黙って見つめていた少年達――ユーノと御風は動かない。
「ちょっと、いいのかい！？何かフォローを入れないと、あの子やばいよ！」
慌てて促すアルフだが、二人の返答はこうであった。
「生憎、一対一のタイマンに横槍入れる様な無粋な真似はできねぇよ」
「なのはなら、きっと手を出して欲しくない筈だから」
その言葉にアルフが目を剥く。
「これは喧嘩じゃないんだ！下手をすると、あの子大怪我だよ！あんた達はあの子が心配じゃないのかい！？」
「心配に決まってるだろう！！」
そう叫んだのは、ユーノ・スクライアであった。
今まで大人しかった少年の突如の激昂に、アルフは思わず口を閉じる。
「僕だってすぐにでも助けに行きたい！なのはは本当はこんな風に

戦える娘じゃないんだ！ただ優しいだけの、普通の娘なんだ！でも、そんな娘が自分から戦おうとしているんだ！そんななのはの覚悟を踏み躙る様な事、できる訳ないじゃないか！」

「ま、そういう事だ」

同じ思いの御風もまた、なのはの覚悟を尊重する。

「それによ、俺にはあの天下無敵の頑固もんが、自分の意思も通せないまま墜ちる様な光景が、どうしても思い浮かばねぇ」

御風はにやりと笑うと、

「見てな。ウチの魔法少女は、たぶんだがちょっと凄いぜ？」

そう言いながらも、やはり心配なのか、御風は組んだ腕にギュッと力を込めた。

両者の言葉を聞いたアルフは、そのまま何も言えず、視線を再び戦いの場に移す。

三人は無言のまま、二人の魔法少女の決闘の行く末を見守った。

※

「アルカス・クルタス・エイギアス。疾風なりし天神よ、今導きの元、撃ちかかれ。バルエル・ザルエル・ブラウゼル」

詠唱を続けるフェイトの周囲には、帯電した雷球が互いに干渉し合い、さながら嵐の様に渦巻いていた。

「フォトンランサー・ファランクスシフト！」

フェイトが掲げた手を合図に、無数の雷球は鋭利な雷の槍となり、その穂先を揃えた。

それが向かう先は一点。空中に四肢を拘束された少女――高町なのは。

「撃ち砕け！ファイアッ！！」

フェイトが手を――振り下ろす。

瞬間、空気を切り裂き、なのはに雷槍の群れが殺到する。

着弾、着弾、着弾。

一人に注ぐ物とは思えぬ程の攻勢が、なのはに向かいその存在を蹂躙する。
なのはがいるであろう空間には、雷撃が飽和し、巨大な光の球の様になっている。
それでも尚、雷の槍は止まない。そしてそれは、フェイト自身にしてみても、制御できる限界ぎりぎりの事であり、その顔は苦悶に歪んでいる。
そして止む、雷槍の雨。
フェイトは肩で息をしつつ、その手に残っていた雷球を集め、もしもの場合に備える。
或いはこの時、フェイトにはどこかで解っていたのかもしれない。
果たして煙が晴れた時、フェイトは驚愕に顔を強張らせた。
纏う空気は帯電し、与えられた攻撃の凄まじさを物語っている。
障壁に注いだ魔力だけでも大きく消耗し、全身に疲労を滲ませている。
純白であった防護服はすすで汚れ、いくつもの焼け焦げた穴が開いている。
処理能力の限界に近かったレイジングハートも、赤い宝玉を不規則に瞬かせている。
防御重視であった筈の防護服をこれ程穿った攻撃は、彼女自身にも大きなダメージを与えている。
――それでも、高町なのははそこにいた。
「……撃ち終わると、バインドってのも解けちゃうんだね」
着弾の瞬間、制御の離れたバインドを解除したなのはは、咄嗟に張った魔力障壁に注げるだけの魔力を注ぎ、雷槍の群れを何とか凌いだのである。
「今度は、こっちの……！」
なのははふらつく体を堪え、レイジングハートをフェイトに突き付ける。
『ディバイン』

その先端に桜色の灯が宿る。それはみるみる内に巨大化し、発射の時を今か今かと待ちわびる。

「番だよ！！」

『バスター』

轟音。

空気を突き破る音と共に、桜色の砲撃が、フェイトに向かって突き進む。

「ぅあああああっ！」

半ば恐怖に突き動かされるように、フェイトを掲げていた巨大な雷球を解き放つ。

しかし、雷球は桜の砲撃と衝突した瞬間、一瞬の遅滞も見せずそれに飲み込まれてしまった。

「なっ……」

絶句するフェイトの体が一瞬硬直する。

その一瞬の内にフェイトの元に到達した砲撃は、その華奢な体を呑みこまんと容赦なく襲いかかった。

先のなのはと同様に、フェイトは咄嗟に金色の魔力障壁を展開し、そこにありったけの魔力を注ぎ込んだ。

そいて激突する、砲撃。

（直撃……！でも、耐えきる！あの子だって、耐えたんだから！）

途切れることなく圧力を掛けてくる桜色の砲撃は、例え障壁越しであってもフェイトにダメージを与え続けていた。

「くぅぅぅっ……！」

苦悶の声が思わず漏れる。

翳した掌のグローブが弾け飛び、たおやかな指はへし折れそうな程押されている。

マントは端が千切れ、速度重視の薄い防護服はあちこちが裂け始めていた。

しかしフェイトは耐えていた。偏にそれは、自分の必殺を凌いで見せた少女への意地もあったのかもしれない。

やがて途切れる砲撃の圧力。その影響が完全に無くなった所で、フェイトは障壁を解除し、荒い息を吐く。
その視界の端に、はらりと桃色の欠片が過った。
（さく……ら……？）
季節は夏だ。桜が咲く様な時期ではない。ではこれは一体――。
そこまで思い至った瞬間、フェイトは弾かれた様に天を見上げる。
そこに、桜の花弁を想わせる魔力が逆巻き、ある一点を目指して集まっていた。
掲げたデバイスの先に桃色の光を宿した魔導師――高町なのはがそこにいた。
集う光は、なのはが展開した魔法陣の元、太陽の如き輝きを持って膨れ上がっていく。
太陽に集う星――集束していく魔力に、フェイトはそんな感想を抱いた。
「受けてみて！ディバインバスターのバリエーション！」
明らかに、先の一撃を上回る威力の魔法。
あんな物を受けたら、今度こそ確実に落ちてしまう。
そう思ったフェイトは、なのはがそれを撃つ前に何とかしようと動こうとした。
その瞬間、フェイトの右腕が拘束される。
驚愕に顔を歪める暇もなく、四肢の全てが拘束されてしまった。
「バインド！？そんな、一度見ただけで……！」
フェイトはその瞬間、改めて高町なのはと言う少女の異常とも言える才能を知った。
戦う度に、そして戦っている間にも、この少女は強くなっているのだ。
桜色の拘束を振りほどく事も出来ぬまま、フェイトは星の集う様を見ている事しかできなかった。
「これが私の全力全開！」
フェイトに『フォトンランサー・ファランクスシフト』と言う切り

札があったのと同様に、なのはにもまた最大の切り札が残っていたのだ。
それは、術者がそれまでに使用した魔力に加えて、周囲の魔導師が使用した魔力をもある程度集積する事で得た強大な魔力を、一気に放出する攻撃魔法。
フェイトが抱いた印象通り、流星が集うが如く魔力が集束していく様から、なのははこの魔法にこう名付けていた。
「星よ煌け！」
集った星の光がなのはを照らす。自身の最大の魔法を、なのはは今解き放つ。
「スタァァァライトォッ！ブレイカァァァァッ！！！！！！」
桜色の光芒が、閃く。
刹那、空間すらも撃ち抜く様な轟音が響き渡る。
なのはの最大魔法『スターライトブレイカー』は、身動き取れぬフェイトを呑み込み、海に着弾。その破壊力を余す所なく撒き散らした。

※

「なんつーバカ魔力……！」
クロノがその常識外れの破壊力に唖然とする。
「ふぇ、フェイトちゃん、生きてるよね……？」
エイミィの疑問は、最もであった。

※

「ふぇ、フェイトぉぉぉぉぉぉっ！？」
アルフが星の光芒に呑まれた主に絶叫する。その顔は真っ青であり、下手をすればそのまま気絶してしまいそうな有様である。
「す、スゴッ……！」

ユーノがその威力に顔を引き攣らせた。
あれを成したのは、自分の彼女なのだ。
（なのはとは、極力喧嘩しないようにしよう……）
この瞬間、ユーノが将来確実に尻に敷かれる事が決定した。
その時。
ばさり、と言う羽音共に、ユーノの傍らから何者かが飛び上がった。
無論それは、天馬御風である。
宙を舞い、真っ直ぐフェイトに向かって飛んだ御風に、ユーノは苦笑いした。
「なのはもだけど、御風のスタンスも変わらないよね……」
空中で少女を受け止めている自身の友達を見て、ユーノはそう一人ごちた。

※

落ちて行く。
体に力が入らない。
手からバルディッシュが毀れ落ちるのが解る。
ああ、私は――。
その時、フェイトの体が何者かに受け止められた。
ぼんやりとした視界に映ったのは、純白に輝く翼。
（ああ、やっぱり、来てくれたんだ）
「ミカゼ……」
「おう」
フェイトの体を優しく抱きかかえたのは、天馬御風であった。
この人は、いつも自分を助けに来てくれるなぁ、と、フェイトは今だ淀んだ思考の中で思った。
そして、そのまま思った事を目の前の少年に話す。
「あのね、ミカゼ」
「おう」

「私ね」
「おう」
フェイトは、何故かすっきりした心持ちで、そっと告げた。
「負けちゃった……」
「ああ。なのはの勝ちだな」
御風はそう言って、フェイトに笑いかけた。
「あいつの話、ちゃんと聞いてやれよ？」
「うん……」
いつもよりずっと素直な心で頷いたフェイトは、こちらに飛んでくるなのはを見ながら、御風にしばし、自分の体を預けた。
二人の魔法少女の最初で最後の本気の勝負は、こうして幕を閉じた。

天を穿つ雷槍と煌めく星光（後書き）

なのはＶＳフェイト、完全決着な回でした。
少し更新が遅くなりました事、まずお詫びします。
一番燃えるシーンだけあって、何回も見直し書き直ししてたら、すっかり遅くなりました（それでも出てくる誤字脱字ｏｒｚ）。
なのはのセリフはもちろんアクア様のセリフのアレンジです。
……この二つの魔法って、撃ち合ったらどっちが勝つんでしょうね？
それでは、また次回。

少女の涙と母の涙（前書き）

に、２６話以内に納まるのか、これ……？

少女の涙と母の涙

「フェイトちゃんっ、大丈夫っ！？」
飛んできたなのはが開口一番にフェイトに尋ねた。。
「横で見てた俺らはフェイトが消し飛んだかと思った」
頷くフェイトを横目に、御風が『スターライトブレイカー』のは威力を思い出しながら言う。
「はぅ～」
その言葉になのはが目を白黒させる。正直な所、自分でもやりすぎたと思っていたのである。
「ま、それはともかく……」
御風がこほん、と一つ咳払いをして、
「お前の勝ちだぜ、なのは」
「あ……」
なのはがフェイトに目をやると、フェイトも御風の言葉に頷いていた。
『プットアウト』
御風が代わりに手にしていたバルディッシュが、主が負けを認めたのを確認してジュエルシードを排出する。
その状況を見ていたクロノが、アースラから通信をなのは達に送る。
「よし、なのは。ジュエルシードを回収して彼女の身柄を……」
「！いや、来た！」
観測を続けていたエイミィが緊迫した様子で告げる。
それと同時に、雲一つなかった空が俄かに蠢き、歪んだ空間の果てから紫電の雷が三人に――正確に言えばフェイト目掛けて降り注いだ。
「やべぇ！」
御風は咄嗟に腕の中にいたフェイトをなのはに押し付けると、その体を思いきり突き飛ばした。

その直後。
「ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」
轟、と言う音と共に、御風の体を雷が撃ち貫く。
防御用の風の結界を張る暇もなかった御風は、全身を走った激痛に絶叫を上げる。
手にしていたバルディッシュ耐え兼ねたかの様に砕け、待機状態に強制的に戻った。
「御風くん！？」
「ミカゼ！？」
なのは達は目の前で傷つく御風の姿に、悲鳴混じりの声を上げる。
やがて紫電の嵐が止むと同時に、御風の体は力を失って海に向かって落ちて行った。
「ミカゼ！」
フェイトがボロボロの体に鞭を打って、その後を追う。
その真上を、排出された9個のジュエルシードが空の歪みの中に消えていく。
なのははそれに一瞬躊躇したが、自分もまた、すぐに御風とフェイトの後を追った。

※

「ビンゴ！尻尾つかんだ！」
エイミィが歓声を上げる。
「よし、不用意な物質転送が命取りだ。エイミィ、座標を！」
「もう割り出して、送ってるよ！」
エイミィが瞬時に割りだしたプレシアのいる『時の庭園』の座標データを、リンディのいるメインブリッジへと送る。
それを受けたリンディが、直ちに武装した時空管理局局員に命令を下す。
「武装局員、転送ポートから出動！任務は、プレシア・テスタロッ

サの身柄確保です！」
「「「はっ！」」」
十数人から成る武装局員たちは揃って唱和する。それと同時に開かれた転送のゲートが、彼らをプレシアの元へと送る。
一連の動きがなされるまで、ほんの数分という早業であった。
「御風くんをすぐに治療室へ。……フェイトさん、貴女も来てくれるわね？」
リンディが御風を救い上げたなのは達に通信を入れる。
半ば確認に近い様子で尋ねたリンディに、フェイトは小さく、
「はい……」
と、了承の意を返した。

※

素っ気ない白い服に着替えさせられ、腕に拘束具を付けられたフェイトが、なのは達に付き添われて、アースラのブリッジに入って来た。
「お疲れ様。御風くんの具合は、どう？」
出迎えてくれたリンディが、皆をねぎらうと同時に尋ねて来た。
「あ、はい。大丈夫みたいです。後、数時間もすれば目を覚ますって医療班の人が言ってました」
ユーノは答えると、リンディは安堵したように一息ついた。
「それは良かったわ。ただ、ここまで関わってくれて悪いけど、目を覚ます頃には事件は解決してるかもしれないわね」
リンディの言葉に、フェイトの体がピクリと揺れる。
事件の解決――即ちそれは、フェイトの母、プレシア・テスタロッサの逮捕という事になる。
気持ちの沈むフェイトに、リンディが声を掛ける。
「フェイト・テスタロッサさん、よね？初めまして」
しかし、フェイトは俯いたまま、手の中の傷ついたバルディッシュ

はきゅっと握りしめただけだった。
そんなフェイトの様子を哀れに思ったのか、リンディは念話で、
《母親が逮捕される所を見せられるのは忍びないわ。なのはさん、彼女をどこか別の部屋に》
なのはは頷くと、ここから出るよう、フェイトを促した。
「あの、フェイトちゃん、よかったら私の部屋に――」
その時、フェイトが俯いていた顔を上げる。視線の先には大型モニター。
そこ映し出されていたのは、武装した局員に取り囲まれたまま、悠然と玉座に座っている母の姿だった。
「プレシア・テスタロッサ！時空管理法違反、及び管理局艦船への攻撃容疑で、貴女を逮捕します！」
武装局員の一人がプレシアに告げる。だが、当のプレシアは黙ったまま周囲を睥睨するだけである。
「……武装を解除して、こちらへ」
局員が促すも、プレシアはやはり動かない。ただ、相手を小馬鹿にした様な冷笑を浮かべただけであった。
そんなプレシアの様子に業を煮やしたのか、武装局員たちは更に詰め寄り、怪しい所がないか調べ始める。
その内の数人が、プレシアの玉座の裏に回り込んだ時、プレシアの目がぎょろりと動いた。
「！こっちに何かあるぞ！」
局員が玉座の後ろに隠されていた扉を開けると、そこには驚くべき光景が広がっていた。
古代の遺跡を思わせる意匠の細長い通路。そしてその先に――。
「……え？」
それを見た瞬間、フェイトは思わず声を漏らした。
「わた……し……？」
細長い部屋の奥に設置され、液体で満たされた透明のシリンダーの中に膝を抱えたまま、眠るように浮かぶ裸体の少女の姿――それは

少し幼いものの、フェイトと瓜二つであった。
その時。
「私のアリシアに……近寄らないで！」
プレシアの叫びと共に、武装局員が吹き飛ぶ。
いつの間にかその場に現れたプレシアは、武装局員達を憎々しげに睨みつけた。
一瞬その瞳に気押されたものの、局員達はすぐに己の使命を全うすべく、杖をプレシアに向ける。
「う、撃てぇ！」
素早く横並びに整列すると、隊長の号令と共にデバイスから一斉に魔力弾を撃ち出し、プレシアを無力化しようとした。
しかし、それは構えすら取らなかったプレシアの張った不可視の障壁の前に虚しく散る。
「五月蠅いわ……」
呟いたプレシアの翳した掌に、魔力が渦巻く。
「危ない、防いで！」
リンディが局員達に注意を促すも、迸った紫電の奔流は、局員達を容赦なく打ち据えた。
「「「ぐわぁぁぁぁぁっ！」」」
悲鳴を上げてその場に倒れ伏した局員達を見下ろして、プレシアは高笑いを上げた。
「いけない！局員たちの送還を！」
「り、了解です！」
リンディの指示を受け、エイミィは慌ててコンソールを叩きだす。
そんな緊迫したブリッジの様子など目に入らない様子で、フェイトは茫然とモニターに映る母と己そっくりの少女を見つめた。
「アリ、シア……」
その名は、遠い記憶の中にある、母が呼んだ名前だった。
やがて送還された局員達が消え人気のなくなった室内で、プレシアは少女の浮かぶシリンダーに愛おしそうに指を這わせた。

「……もう駄目ね。時間が無いわ。たった9個のジュエルシードで、アルハザードに辿り着けるかどうか解らないけど……」
プレシアは背中を向けたまま、言葉を吐き続ける。
「でも、もういいわ……、終わりにする。この子を亡くしてからの暗鬱な時間も。この子の身代わりの人形を、娘扱いするのも」
その言葉を聞いたフェイトが目を見開く。
「―聞いていて？貴方の事よ、フェイト。せっかくアリシアの記憶を上げたのに、アリシアにそっくりなのは見た目だけ。なのに役立たずで、ちっとも使えない、私のお人形……」
その時、エイミィが俯きながら告げた。
「……最初の事故の時にね、プレシアは実の娘――アリシア・テスタロッサを亡くしているの」
「えっ？」
その場にいたなのはが声を上げた。では、ここにいるフェイトは、一体誰なのか。
その困惑をよそに、エイミィは更に続ける。
「彼女が最後に行っていた研究は、使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成」
その言葉にユーノとアルフが驚く。
「そしてもう一つが、死者蘇生の秘術。『フェイト』って名前は、当時彼女の研究につけられた開発コードなの」
エイミィの言葉を聞いたプレシアが哂う。
「……よく調べたわね？そうよその通り。だけど駄目ね、ちっとも上手くいかなかった。作り物の命は所詮作り物。失ったモノの代わりにはならないわ」
プレシアは、相変わらず後ろを向いたまま、フェイトの事を一瞥すらせずに言葉を吐き続ける。
「アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ」
その言葉がフェイトの心を傷つける。
「アリシア時々我儘も言ったけれど、私の言う事をとてもよく聞い

てくれた」
その言葉がフェイトの心を抉り出す。
「やめて……」
その様子に耐えられず、なのはが思わず小さな声で哀願する。
しかしプレシアの吐く毒は止まらない。
「アリシアはいつでも私に優しかった……」
シリンダー越しに愛娘を撫でながら、プレシアは言う。
「フェイト……やっぱり貴方はアリシアの偽物よ。折角あげたアリシアの記憶も、貴方じゃ駄目だった」
「やめて、やめてよっ！」
なのはの懇願の声が響く。だが、やはり構わずプレシアは言葉を止めない。
「アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使うだけのお人形……。だから貴方はもういらないわ。何処へなりとも消えなさい！」
その完全なる拒絶に、フェイトは俯き、体を小刻みに震わせたまま目に涙を浮かべた。
その脳裏に優しかった頃の母の記憶、そして自分を痛めつける母の記憶が過る。
この優しい記憶の中に、本当に自分だけの思い出は、存在しなかったのか。
フェイトにはもう、何を信じればよいのか解らなかった。
そんなフェイトに、プレシアはやはり背を向けたまま、最後の断絶を告げる。
「いい事を教えてあげるわ、フェイト。貴方を造り出してからずっとね……、私は貴方が――」
「大嫌いだったのよ」
「……っ！」
無慈悲に紡がれたその一言を引き金にして、力を失ったフェイトの

手から待機状態のバルデッシュが滑り落ちる。
床に衝突したバルデッシュが、フェイトの心を象徴するかのように甲高い音共に破片を散らす。
（母……さん……）
それと同時にフェイトの瞳から一筋の涙が伝い、彼女は崩れるようにしてその場に倒れた。
「フェイトちゃんっ！？」
「フェイト！？」
なのは達がフェイトを抱き起こすも、フェイトの瞳からは光が失われ、プレシアの言葉通り人形の如く虚ろな物になっていた。
「大変大変！ちょっと見て下さい！」
その時、エイミィの慌てた声が響き渡った。
「屋敷内に魔力反応、多数！」
「何だ！？何が起こっている！？」
声を荒げるクロノが睨みつけるモニターに映し出されたものは、次々とプレシアの居城の床から浮上して来る、西洋甲冑の様な物の群れだった。
それと同時に時の庭園全体が振動を発し、唸りを上げる。
「庭園敷地内に魔力反応！いずれもＡクラスの傀儡兵です！」
「総数六〇、八〇……まだ増えています！」
「プレシア・テスタロッサ……！一体何をするつもり！？」
ブリッジに警報が鳴り響き、オペレーターが次々と報告を述べていく中、モニターの中のプレシアへ向け、リンディが鋭く問いかけた。
プレシアはアリシアの眠るシリンダーを魔法で浮かび上がらせると、それを連れて天井から瓦礫が落下してくる中をゆっくりと歩き出す。
「私たちの旅を、邪魔されたくないのよ……」
そのまま玉座の間まで戻って来たプレシアは、９個のジュエルシードを顕現させる。
「私たちは旅立つの……。忘れられた永遠の都――アルハザードへ！」

狂気で輝く瞳を中空で回転するジュエルシードへ向け、笑みを浮かべるプレシア。
「――まさか！」
その狂える姿に、クロノが目を剥いて叫んだ。
「この力で取り戻すのよ……全てを！！」
その叫びと共に回転を止めたジュエルシードがモニターを埋め尽くす程の凄まじい輝きを発した。
その瞬間、アースラのブリッジが振動し、レッドアラートが鳴り響く。
「次元震です！中規模以上！」
その報告に驚愕しながら、リンディは矢継ぎ早び指示を出す。
「振動防御、ディストーションシールドを！」
「ジュエルシード9個発動！　次元震、更に強くなります！」
「転送可能距離を維持したまま、影響の薄い空域に移動を！」
「りょ、了解です！」
俄かにざわめき始めたブリッジの後ろで、なのはは力無く倒れるフェイトをそっと抱き締めた。
「波動係数域拡大！このままだと、次元断層が！」
「アル、ハザード……」
「馬鹿な事を…！」
怒号が飛び交うブリッジの中で、茫然と呟いたエイミィに対し、クロノは怒りを露わに吐き捨てると踵を返して駆け出す。
「クロノくん！？」
「僕が止めてくる！ゲートを開いてくれ！」
エイミィの問いに短く答え、クロノはブリッジを飛び出して行った。
「邪魔をするなら、容赦しないわ」
その時、それまで狂笑を上げていたプレシアは、不意にそう告げると、サーチャーの接続を無理矢理切った。
結局、彼女は最後までフェイトを見ようとしなかった。
「再接続……できません！」

「プレシア・テスタロッサ……！」
リンディは険しい顔でその名を呟いた。

※

アースラからの通信を無理矢理切断したプレシアは、生きる者が自分しかいない、寒々とした空間にしばし佇んだ。
その顔は、先程まで激情を発していた人物とは思えぬ程、静かで、感情の欠片もない様なものである。
その表情のまま、プレシアはスッ、と一筋の涙を流した。
「これで、よかったのよ……。『フェイト』……」
自らが人形と称した少女の名を呟いたプレシアは、そのまま少しだけ泣いた。

※

「……またここかよ」
御風は、夢の樹の前に立っていた。
「それにしても、めちゃくちゃ痛かった」
自身が受けた雷撃を思い出して御風が顔をしかめた。
「君は無茶をしないといられないのかな？」
そんな御風に声を掛けたのは、いつもの人影であった。
「いや、そんなつもりはなかったんだけど」
あっけらかんと言う御風に、人影はため息を吐いた。
「……まぁ、いい。それよりも、外は大変な事になってる様だよ？」
その言葉に、御風の表情が鋭い物へと変わる。
「聞かせてくれ」
何故そんな事が解るのか、等と野暮な事は聞かない。御風はただ、事情の説明を求めた。
そして、人影から今起こっている事が語られる事しばし。

フェイトの事。
プレシアの事。
アリシアの事。
次元震の事。
全てが語られ、それを聞き終えた御風がすぐに踵を返し、夢の世界から出ようとした。
「行くのかい？」
「当たり前だろ」
人影の短い問いに、御風は同様に短く答えた。
「前々から聞きたかったんだけどね」
「あ？」
「君はどうして、そんなに彼女に――フェイト・テスタロッサに構うんだい？」
「む……」
その言葉に、御風は思わず黙り込んだ。
「君達が出会って、実質まだ一月と経っていない。しかも、毎日という訳でもない。君があれほど体を張る理由が見当たらないんだけど？」
人影の問いに、御風は――。
「わからん！」
と胸を張って答えた。
「は？」
人影が思わず間の抜けた声を出す。
「俺も色々考えたんだけど、やっぱりわからなかった！だから、とりあえず自分の思った通りに動いてりゃ何か解るかと思ったけど、今でもやっぱりわからねぇ！」
御風は堂々と告げる。
「それを知るためにも、俺は行く！」
途端、人影は吹き出していた。
「ふはっ！あははははは！わからないって、ほんとに君は……。く

ははははっ！」
「……笑うなよ」
大爆笑された御風が憮然とした表情になる。
「はーっ、おかし……。まぁいいよ。君は、そのままやってみるといい」
「言われんでもそーするよ」
「わからない、か……。まだ１０歳だしね。最も、向こうは憎からず、という感じかもしれないけどね」
「？何言ってんだ？」
不思議そうな顔をする御風に、人影は何でもない、と返す。
「それじゃあ、行くといい。怪我しない程度に、頑張りなよ」
「保障はできねぇな」
にやりと笑って返すと同時に、御風の意識は暗転する――。

※

「お？」
目が覚めると、御風はアースラの治療室のベッドにいた。
室内に人影はない。どうやら、ちょうど出払っている様だ。
「さて、皆どうなってるのかね」
起き上った御風は、手早く身なりを整えると、部屋を出て状況を確認しようと歩き出した。
すると、すぐに意外な人物と出会った。
「あ……、ミカゼ……？」
「お？フェイト」
それは、フェイト・テスタロッサであった。
手には修復されたバルディッシュ。纏うは黒の防護服。御風がいつも見ていた、魔導師としての姿であった。
「もう、大丈夫なの？」
「おうよ、ばっちりだ。……聞いたぜ、お前の母さんの事」

その言葉に、フェイトは思わず顔を伏せる。
「お前は、そんな成りで、これから何をするつもりだ？」
「……母さんの所に行く」
フェイトの言葉に、御風は軽く頷いた。
「そっか。じゃ、俺も一緒に行くからよ、早く行こうぜ」
フェイトは思わず目を丸くした。
「何も、聞かないの？」
「何を、言やいいんだ？」
御風は逆にフェイトに問いかける。
「そいつはお前が何とかしなきゃならねぇ問題なんだと思う。俺が、軽々しく何か言う事はできねぇよ。それに、お前の心はもう決まってるみたじゃねぇか」
御風は、フェイトの瞳に宿った強い光を指して言う。
「それでも、何か言いたいなら聞いてやる」
御風の言葉に、フェイトは少し考えた後。
「私、母さんに言いたい事があるんだ」
「何を？」
「まだ、何を言っていいのか、私の中でも纏まってないんだけど、このまま母さんと別れるのは、いやなの」
「そいつを、お前の母さんは聞いてくれるのか？」
「わからない……」
フェイトは首を横に振った。
「……私見になるがよ。このままじゃ、駄目な気がする」
「え……？」
御風の言葉に、フェイトの顔が曇る。
「今のお前の母さんは、少し前のお前と同じじゃねぇかと思う」
「私と？」
「おう。自分のやるべき事に囚われて、人の話なんかてんで聞いてくれねぇ状態だ」
なぁ？とフェイトを見やると、フェイトは恥ずかしそうに顔を伏せ

た。
しかし、すぐに顔を上げ、不安げに御風に尋ねる。
「じゃあ、どうすれば……」
その言葉に御風は、
「忘れたのかよ?そんな状態だったお前に、あいつがどうやって思いを届けたのかを、よ」
「あ……」
「先達に習うのは、悪くねぇと思うぜ?」
そう言って、御風はにやりと笑った。

少女の涙と母の涙（後書き）

ここまでです。
何か、この話は物凄い難産でした。
遅くなりまして、申し訳ないです。
それでは、また次回。

御風の無双とフェイトの挑戦（前書き）

今気付いたんだぜ。
これ、２６話で終わらないんだぜ。
ｏｒｚだぜ。

御風の無双とフェイトの挑戦

円筒状の広い空間内にて、なのは、ユーノ、アルフの3名は遅いくる傀儡兵相手に激闘を繰り広げていた。
なのはが魔力弾を持って数多の敵を撃ち砕けば、ユーノはバインドを持って相手を封殺する。そしてアルフは獣の形態となって、爪牙を振って傀儡兵を壊していく。
当たるを幸いに次々に傀儡兵の数を減らしていくなのは達であったが、敵は減るよりも早く増援を送って、彼女等を押し潰そうとしていた。
「くっ、数が多い！」
アルフが吠えた。
「だけならいいんだけど……っ！このぉっ！」
なのはが連続で魔力弾を射出する。大半はその魔弾の前に砕かれるのだが、内数体はそれを避け、襲い掛かってくる。傀儡兵達は大魔導師と謳われたプレシアの作なだけあって、只の木偶と言う訳ではないのだ。
「何とかしないと……！」
ユーノが翡翠色のバインドで傀儡兵を縛り上げながら呻いた。
しかしその時、翡翠の鎖が耐えきれず弾け飛び、一体の傀儡兵が解放されてしまった。
そしてそれが手にした斧を振り上げる先には――なのはの姿。
「なのはっ！」
ユーノがなのはに注意を喚起するも、既に傀儡兵ははその刃圏内になのはを捉えていた。
迫り来る斧に思わず目をつぶるなのは。
だが次の瞬間。
『サンダーレイジ』
無骨な男の声と共に、天から金色の雷が降り注ぎ、傀儡兵を撃ち砕

いた。
「「「！？」」」
驚いた3人が上を見上げると、そこには閃光の戦斧を構えた黒の防護服の金髪の美少女――フェイト・テスタロッサがいた。
フェイトは先の雷に加え、更に駄目押しとばかりに周囲の傀儡兵にもう一撃を喰らわせる。
「サンダァァッ！レイジィィィッ！！」
空気を切り裂き、再び雷が躍る。傀儡兵達は一瞬で砕かれ、哀れな鉄屑へと姿を変えた。
フェイトは悠然と天から舞い降りると、なのはの前で止まる。
二人の少女がそれぞれ何か言いたげな顔で見つめ合う。どちらかが口を開こうとした瞬間、壁を突き破って大型の傀儡兵が現れる。
巨大傀儡兵は両肩に付いた巨大な二つの大砲の砲口をがしゃりと二人に向けた。
「大型だ。バリアが強い」
驚きから瞬時に立ち直ったフェイトが冷静に言う。
「うん。それにあの背中の……！」
なのはもまた敵の戦力を見極めんと、油断なく見つめる。
そんな二人の眼前で傀儡兵の砲口に光が集い始める。大型の魔力砲撃。当たれば無事では済まないだろう。
しかしフェイトは更に続ける。
「でも、二人でなら！」
「！」
その言葉になのはは驚きに目を見張らせてフェイトを見た。しかし、すぐにとても嬉しそうな顔で何度も頷く。
「……うん！うんうん！」
そして二人の魔法少女が杖の向きを揃える。
「バルディッシュ！」
『ゲットセット』
フェイトが杖を傀儡兵に突き付ける。

「こっちもだよ、レイジングハート！」
『スタンバイレディ』
同様になのはも杖を傀儡兵に向ける。
二人の足元で桜と金、二つの魔法陣が唸りを上げて回転する。
そして先に仕掛けるのは――フェイト。
掌に浮かべた魔法陣を空中に投げると同時に、バルディッシュをそれに突き立てる。
「サンダァァァッ……、バスタァァァッ！！」
空気を震わせて金色の雷砲が放たれる。
しかし同時に、巨大傀儡兵の砲撃も放たれた。
それぞれの砲撃がぶつかり合い、互いの魔法を喰らい合う。
「ディバィィィン……、バスタァァァッ！！」
そこに放たれるのは、高町なのはの桜の砲撃。
桜は金と混じり合い、二つの砲撃はあっさりと巨大傀儡兵のそれを貫くと、本体に向けて突き進む。
傀儡兵はバリアを張りそれに抵抗するが、砲撃の威力に押されじりじりと押されていく。
「「せーのっ！！」」
なのはとフェイトは声を合わせると、砲撃に更なる魔力を注ぎこむ。
膨れ上がった砲撃は傀儡兵を呑み込み、更には背後の壁すらも貫いて時の庭園を揺るがせた。
だが――。
「！まだ動く！？」
巨大傀儡兵は体の半分を削り取られながらも、軋んだ音を立ててまだ動いていた。
そして残っていた一門の砲口を再びなのは達に向ける。
その時。
「ヒーローは遅れて現れるってなぁっ！」
上空から翼をはためかせて、凄まじいスピードで舞い降りる影。
【魔法使い】――天馬御風である。

「御風くん！？」
驚くなのは達を尻目に、御風は巨大傀儡兵に向けて魔法を発動させる。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『超大切断（シュタイエクライセン）』！！」
御風が腕に纏わせた風の刃を一閃させると、巨大傀儡兵は一瞬の沈黙の後、ずるりと音を立てて真っ二つに切り裂かれ、崩れ落ちた。。
「……今度なのはに突っ込みを入れる時は、これで行こう」
「割れちゃうよ！？」
想像したのか、なのはが頭を押さえて猛抗議した。
「御風、もう大丈夫なのかい！？」
ユーノが御風に駆け寄りながら声を掛けた。
「おうよ。ばっちりだぜ」
びしっと親指を立てる御風の横では、フェイトが人型に戻ったアルフに抱きつかれていた。
「フェイト……！フェイトぉ……！！」
フェイトはそんなアルフの頭を撫でながら、穏やかな口調で言った。
「アルフ……。心配かけて、ごめんね。ちゃんと自分で終わらせて、それから始めるよ。本当の私を……」
「うん、うんっ……！」
アルフは涙を流しながらフェイトの言葉に頷く。
そしてなのはは、それを暖かい目で見守っていた。
「なぁ、ところでクロノさんは？」
状況が落ち着いた頃を見計らい、御風はなのは達に尋ねる。
「クロノくんは元凶を叩くって、一足先にプレシアさんの所に向かったよ」
「ん？じゃあ、お前らはどこに向かってるんだ？」
御風が首を傾げると、今度はユーノが応えてくれた。
「僕達はこれから、この『時の庭園』の最上部にある駆動炉を止めに行くんだ」
「なんでまた？」

「この『時の庭園』の駆動炉は、ジュエルシード同様、ある種のロストロギアらしいんだ。プレシアはそれを暴走させて、足りない分のジュエルシードの代わりにしようとしてるんだ」
「は～ん、なるほどね。まずは次元震の脅威を取り除こうって訳だ」
ユーノの言葉に頷いた御風は、
「よし、じゃあ俺がそっちへ向かう。なのは、ユーノ。お前らはフェイトに付いて行ってやってくれねぇか？」
その言葉に、一同は驚く。
「そんな、一人だけじゃ危ないよ！」
「そうだよ！向こうも駆動炉の重要性は承知してる筈だから、きっと警備も厳重だよ！」
「ミカゼ、無茶な事言わないで」
「そうさ！何言いだすんだい、いきなり！」
「うるせー！」
口々にかけられる否定の言葉に、御風はたまらず叫んだ。
「無理も無茶も承知の上だよ！！だけどよ、フェイトはこれから母親と――プレシアさんと大事な『話し合い』しなきゃならねぇんだよ。なのはとユーノには、どうしてもそれを見届けて貰いてぇ！」
「ミカゼ……」
ただ一人、御風の言葉の意味を知るフェイトが不安そうな顔をする。
「なのは達に見守って貰えりゃ心強えだろ？大丈夫さ、フェイト！言いたい事言ってやれ、全力全開でな！」
「……うん！」
フェイトは力強く頷くが、なのは達には意味が解らないので、揃って首を傾げた。
「じゃあ、そういう事だ！よろしく頼んだぜ！」
「あ、ちょっと！？」
止める声も届かぬ間に、御風は翼を広げて最上部めがけて飛んで行ってしまった。
「もう、御風くんのバカー！後で『ディバインバスター』だからね

ー！」

怒るなのはの言葉に、ユーノは密かに未来の御風の冥福を祈った。

※

何だか途轍もなく恐ろしい言葉を言われた気がした御風だが、とりあえず、今はこちらに向かってくる飛行型の傀儡兵の群れに集中する事にした。

「はっ、おいでなすったな！」

笑う御風は全身に魔力を漲らせる。

同時に、返還された風の魔力が組み替わり、御風の全身を白い羽のオーラで覆う。あたかもそれは、純白のドレスを纏ったかのような姿である。

「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『疾風怒濤（シュトゥルム・ウント・ドランク）』！！」

純白の鳳と化した御風がそのまま速度を上げて傀儡兵達に突っ込む。

迎え撃つ傀儡兵達だが、御風に触れた瞬間、紙切れの様にその装甲が引き裂かれ無残な姿を晒して墜ちて行く。

御風は一気に上昇すると天井をぶち破って最上部に侵入した。

見ればそこには、無数の傀儡兵に加え、先の大型の傀儡兵も多数。

ユーノの言う通り、駆動炉前の警備はがっちりと固められていた。

「……上等！」

不敵な笑みを刻んだ御風は、床に降り立つと同時に魔法を発動させる。

「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『鋭利なる風の剣（シャルフ・ヴィントシュベート）』！」

変換した魔力を鋭い風の剣に換えた御風は、それを横薙ぎに振るう。

すると、振り抜かれた先の傀儡兵達が上下に分断され、爆発を起こす。

そこで初めて御風に気付いた傀儡兵達が、大挙して御風に襲い掛かって来た。

手にした剣を振りかぶった傀儡兵相手に、御風は拳を固く握る締め、

真っ直ぐに突き出す。
すると、御風の小さな拳は固い傀儡兵の装甲を易々と貫いた。
「『嵐の拳（シュツルムファウスト）』！」
それを良く見れば、高速で渦を巻く風が拳を覆っていた。
「おぉぉぉっ！」
雄叫びを上げて、御風は当たるを幸いに拳を次々に振るう。その度に、傀儡兵達が鎧を砕かれて崩れ落ちて行く。
その時、一体の巨大傀儡兵が、その巨体に相応しい戦斧を掲げて、御風目掛けて振り下ろした。
御風は咄嗟に斜め後ろに飛んでこれを回避する。
凄まじい轟音と共に叩きつけられた戦斧は、他の傀儡兵をも巻き込んで、地面に大きなクレーターを作り出す。
空中の御風は、動きの硬直した巨大傀儡兵に構成した魔法をお返しとばかりに繰り出す。
「【魔法（マテリアル・パズル）】エンゼルフェザー、『巨人の衝撃（ギガント・アウフプラール）』！」
ハンマーの如く組み合わされた両拳を、眼下の巨大傀儡兵に振り下ろす。そこから発生した不可視の衝撃波が、巨大傀儡兵を縦に押し潰した。
「はぁっ、はぁっ、はぁっ……」
魔法を連発したせいで息を荒げる御風だが、傀儡兵の群れはまだまだいる。それどころか、小型の物になると、何処からか現れて、その数を更に増やしつつあった。
しかし、御風の口元に浮かぶ不敵な笑みに翳りはない。
「……いいぜ。御代は見てのお帰りだってなぁ！」
咆えた御風が、再び傀儡兵達に挑みかかった。

※

時の庭園最深部。
外殻の岩が剥き出しになり、所々には虚数空間――魔法の使う事が

出来ない、言わば魔導師にとってブラックホールの様な空間が覗いている。
そこに、プレシアは物言わぬ己の娘、アリシアの浮かんだシリンダーと共にいた。
自身の居城が震動し、あちこちで轟音を上げている最中、プレシアはジュエルシードの連動励起を見守っていた。
だが。
「――これは……！？」
彼女は次元震による振動が自身の想定より弱い、いや、弱くなり始めている事を感じ取り、疑問の声を上げた。
《――プレシア・テスタロッサ》
「ッ！？」
その時、彼女の脳裏に凛とした女性の声が響いた。
《終わりですよ。次元震は私が抑えています。駆動炉は、じきに封印。貴女の元には執務官が向かっています》
アースラ艦長、リンディ・ハラオウンは、その背に蝶のような美しい、淡い緑に輝く透明な羽を背負って、プレシアに語り掛ける。
《忘れられし都アルハザード。そしてそこに眠る秘術は、存在するかどうかすら曖昧な、ただの伝説です！》
「……違うわ！」
プレシアは否を唱える。
「アルハザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が砕かれた時、その狭間に滑落していく輝き……。道は、確かにそこにある！」
《随分と、分の悪い賭けだわ……。貴女はそこに行って、一体何をするの？失った時間と、犯した過ちを取り戻すつもり？》
「そうよ。私は取り戻す…私とアリシアの過去と未来を……！」
言いながら、プレシアはシリンダーの表面を指先で優しくなぞり、狂気と慈しみが入り混じる視線を愛娘へと向ける。
「取り戻すの……。『こんな筈じゃなかった』、世界の全てを！！」
その時、轟音と共に蒼い閃光がプレシアの頭上を貫く。

驚いたプレシアがそこへ目をやれば、もうもうと立ち昇る黒煙の中から、黒衣の執務官――クロノ・ハラオウンが現れた。
ここまで来る際に負ったのだろう、頭部の怪我より流れる血にも構わず、クロノは鋭い眼差しでプレシアを睨みつけた。
「世界はいつだって、『こんな筈じゃない』事ばっかりだよ！ずっと昔から、いつだって、誰だってそうなんだ！！」
クロノは叫ぶ。自身にもまた、かつてあった悲劇の過去がある。しかし、クロノはそれを、母や仲間達と共に乗り越えて来たのだ。
そのクロノからすれば、今だ過去に目を向け続けるプレシアの在り方は、許せるものではなかった。
「『こんな筈じゃない』現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ！だけど、自分の勝手な悲しみに、無関係な人間を巻き込んでいい権利は、どこの誰にもありはしない！！」
しかし、プレシアはそんなクロノの主張に、どこか憐れみすらも混じったような瞳を向ける。
「……なら、そんな現実に立ち向かった挙句、敗れた人間はどうすればいいのかしらね？」
「……何？」
クロノは、プレシアの言葉に眉を顰める。
「覚えておきなさい、執務官殿。そんなみじめな人間でも、何に換えても――それこそ命に換えても守らねばならない物があるのよ。だから、私はここにいる」
「プレシア・テスタロッサ……、貴女は一体……？」
その狂気とは違った、悲しみと何らかのの強い決意が込められた瞳に、クロノが問い質そうとした瞬間、
「――っ！？」
プレシアの目が大きく見開かれる。驚愕に彩られた瞳の先には、音もなくその場に降り立った４つの影。
なのは。ユーノ。アルフ。そして、フェイト。

プレシアの視線は、そのフェイトに向けて固定されていた。
「フェイ、ト……？」
棒立ちになったプレシアの口からその名が毀れ落ちる。その様子は、フェイトがこの場にいる事が、本当に予想外である事を示していた。
そんなプレシアに、フェイトは一歩ずつ歩き始める。
「……！止まりなさい！」
その距離が数メートルまで来た時、漸く我に返ったプレシアが鋭い声で言った。
その言葉に従って、その場で足を止めたフェイトに、プレシアは更に詰問する。
「何を、しに来たの……！？消えなさい。もう貴女に用は無いわ！」
プレシアの言葉に、フェイトはしばしの瞑目の後、ゆっくりと目を開けて、言葉を紡ぐ。
「……貴女に、言いたい事があって来ました」
「……？」
「でも、ある人が言ってくれたんです。今の母さんじゃ、私の言葉は届かないだろうって」
「あなた何を……」
声を上げたプレシアに構わず、フェイトは言葉を続ける。
「昔の私もそうでした。やるべき事に囚われて、他の誰の言葉も聞こえなかった」
プレシアだけではない。その場にいた誰もが、フェイトの言葉の真意を測りかねていた。
「そんな私に、自分の言葉を必死に届けてくれた娘がいました」
フェイトはちらりと後ろを振り返り、なのはを見た。
なのはは、フェイトの言葉の中の人物が自分である事に気付き、驚いた顔をしていた。
「だから、私もその娘のやり方に習ってみようと思います」
再び顔を母に戻したフェイトは、そう告げた後、驚くべき事に、手にしたバルディッシュをプレシアに向けた。

「「「!?」」」
プレシアを含め全員が驚く中、フェイトは迷いのない瞳をプレシアを向ける。
「私と戦って下さい、母さん。私は、あなたに届けたい言葉があります!」
フェイトの言葉を受けたプレシアは茫然となったが、やがて肩を震わせ始めた。その震えはやがて大きくなり、プレシアの口から笑い声になって漏れだした。
「あはははははははっ!面白いわ、フェイト!この期に及んでどんな戯言を聞かされるよりも、ずっと素敵な言葉だったわ!」
そんなプレシアの嘲笑にも、フェイトの視線は揺るがない。
今だ哂いを滲ませたまま、プレシアは手にしていたデバイスを同様にフェイトに向けた。
「いいわ、やってあげる。この場であなたを打ちのめして、私とアリシアは何の憂いも無くアルハザードへ向かわせて貰うわ!」
親子の視線が交錯する。
一同が固唾を呑んで見守る中、フェイトが動く。
「……行くよ、母さん!」
宣言して、フェイトは真っ直ぐプレシアに向けて飛翔した。

御風の無双とフェイトの挑戦（後書き）

更新遅れて申し訳ありませぇぇぇん（ジャンピング土下座）！！
前話も難産でしたが、今回も輪を掛けて捻りだすのに苦労しました。
作中において御風が何だか強くなってるのは、一応修行の賜物です。
【奥義】には至ってないものの、主人公も一応のパワーアップを果たしたと言う事で一つご理解ください。
次回は初めての親子ゲンカ決着編です。
色々ななのは二次創作を見てきましたが、フェイトとプレシアが一対一で戦ってるのは見た事無い（知らないだけかもですが）なぁと思いまして、書いてみました。
それでは、また次回。

初めての親子喧嘩とプレシアの告白（前書き）

親子喧嘩、開始。

初めての親子喧嘩とプレシアの告白

「行きます！」
フェイトは宣言と共にプレシアに向かって飛翔した。
後方に風を置いてくるような速度でプレシアに迫ったフェイトは、バルディッシュの光鎌を振り被り、今だ反応しないプレシアに向かって降り下ろそうとした刹那――。
『ブリッツ・アクション』
フェイトの姿がかき消える。『ブリッツ・アクション』による高速起動を以って、フェイトはプレシアの真後ろに回り込んだ。
Sランクと言う肩書きを持つ魔導師である母に正面から挑むほど、フェイトは考えなしではない。故にこそのフェイント。
フェイトは無防備なプレシアの背に今度こそ光鎌を振り下ろした、かに見えた。
しかしその瞬間。
「！？」
バチバチと言う音と共に紫電の瞬きによって、光鎌は受けと止められていた。プレシアが、振り向きもせずに魔力障壁を張ってフェイトの一撃を受け止めたのだ。
（完全に不意を突いた筈なのに……！）
「不意を突いた、と思って？」
驚愕に顔を歪めるフェイトに、プレシアは淡々と告げる。
「背面は人間にとって最大の死角の一つよ。何の対策も講じてない筈がないじゃない。一つ、勉強になったわね？」
言葉と共に、障壁からの圧力が強まり、フェイトは後方に吹き飛ばされる。
「くっ！」
くるりと空中で反転して着地したフェイトは、すぐさまプレシアに向かって顔を上げた瞬間。

「……え？」
プレシアの周囲に浮かぶ無数のスフィア。その数もだが、何よりも驚異的なのは、魔法の展開スピードである。まさに瞬き一つする間に、強力な魔法を構成しているのだ。
「フォトンランサー、連弾」
『フォトンランサー・フルオート・ファイア』
プレシアの手にしたストレージデバイスから無機質な合成音が流れる。それと同時に、紫の雷矢がフェイトに向かって無数に発射された。
「バルディッシュ！」
『サイズ・フォーム』
瞬時に光鎌を出したフェイトは、迫り来る雷矢を叩き斬る。
（重い！）
が、その際に走った衝撃の予想外の重みに、フェイトの柳眉が歪む。そこに込められた魔力も、構成の緻密さも、自分やなのはが使う物とは一線を画している。
「くぅぅぅっ！」
それでも、フェイトは何とか全ての矢を叩き落とす事に成功していた。
だが、それに一息吐く間もなく、
『フォトンランサー・フルオート・ファイア』
再び、紫電の矢がフェイトに向かって襲い掛かる。
先の攻防の際に腕がしびれていたフェイトは、今度は叩き落とす事が出来ず、矢の群れを持ち前の機動性で躱していく。
だが、その途中。
「あっ！？」
疲労からか足を滑らせたフェイトは、そのまま無防備に転んでしまった。そこに容赦なく迫る矢群。
フェイトは咄嗟にその場で頃かがる事でそれらを回避する。
フェイトを逃し地面に突き刺さった紫電の矢は、紫色の火花を飛び

散らせて爆発した。
転がる勢いで起きあがったフェイトは、一度プレシアから距離を取る。
息を荒げるフェイトとは対照的に、プレシアは涼しい顔である。そもそも、プレシアは戦闘開始直後から、一歩もその場を動いていない。
（これがSランク魔導師……！母さんは、こんなにも強かったのか……！）
直接対峙する事で初めて目の当たりにする母の実力。
フェイトは戦慄を覚えながらも、今だ衰えぬ戦意のままに、バルディッシュを強く握りしめた。

※

「やはり無謀すぎる！」
フェイトとプレシアの戦いを見ていたクロノが声を荒げる。
クロノ自身、魔力の量、ランクの違いで魔導師同士の戦いが決定するとは思っていない。
しかし、この場合は違う。
フェイトは確かに天才だろう。あの幼さであれほどの戦闘技能、魔法構成、どれをとっても一流である。
しかし、プレシアはその上を行く。
学者肌の研究者と言っても、それだけでSランクの称号を授かる事等できない。
プレシアはも今に至るまで、かなりの経験を積んでいるのだ。ただ魔力の量が違う相手と戦うのとは訳が違う。
故にクロノはフェイトに加勢するためにと動こうとした。
しかし。
「駄目っ！」
それを止めたのはなのはだ。

「なのは！？」
「絶対に手を貸したりしちゃ駄目！もしそんな事したら、フェイトちゃんは本当にプレシアさんに何も伝えられなくなっちゃうよ！」
真剣な表情で訴えるなのは。
なのは自身、かつて今のフェイトのとった方法で本当の思いを伝えたのだ。
言葉だけでは伝わらない。
言葉にしなければ伝えられない。
矛盾する思い。相反する気持ち。
だからなのははは戦ったのだ。言葉でも伝わらないなら、思いでも届かないなら、魂を持ってぶつかるしかない。
何とも精神的な理論だ。クロノ達からすれば訳が解らない物である。
しかし、あの時のなのははそれしかないと思った。そうでなければいけないと思った。
そしてそれは伝わった。理論も何もかも越えて、フェイトの心を動かした。
だから。
「大丈夫！」
なのは断言する。
「気持ちも思いも伝わらない内に、フェイトちゃんが負けるはずがない！」
フェイトの戦いを見るなのはの瞳には、信頼の思い。
そしてそれは、ユーノ、アルフにしても同じだ。
二人は、今ここにいないもう一人と共に見ていたのだ。頑なな心に届く、魂の篝火を。
だから、二人も動かない。
「……君達の言ってる事は無茶苦茶だ。何の整合性も無い、勢いだけのセリフにしか聞こえない」
でも、とクロノは続ける。
「何故だろうね？僕も、それを信じてみたくなる」

クロノはそう言って、手にしていたデバイスを下げた。
そんなクロノに、なのはは笑顔で頷く。
そして４人は、再び親子の戦いを見る。

※

（距離を取れば、逆に危ない）
フェイトは思う。プレシアはフェイトの様な能動的な戦闘方法をとらない。どちらかと言えば、なのはのそれをより特化させた、完全な遠距離砲撃タイプの魔導師である。
ならば、そんな相手の距離で戦う愚を犯す訳にはいかない。
しかし、それを見越して接近しても、プレシアの張る魔力障壁が全ての攻撃を防いでしまう。
（母さんの張る障壁以上の攻撃を与えなければ、ダメージは通らない）
フェイトは考える。では、それを為すにはどうすればよいのかと。
しかし、それを律義に待つプレシアではない。
「動かないわね？ならば、こちらは好きにやらせてもらうわ」
にやりと笑ったプレシアは、杖を突き出す。
『サンダースマッシャー』
デバイスから放たれるのは、紫の雷光。
空気を焼きながら迫るそれを、フェイトは慌てて躱す。
しかしその瞬間、足をもつれさせたフェイトが悲鳴を上げてまた倒れる。
「へぅっ！？」
うつ伏せに倒れたフェイトの頭上を『サンダースマッシャー』が唸りを上げて通過する。
（まずい！）
思わず身を固くするフェイトだが、何故か追撃は来ない。
不審に思いつつすぐに起きあがり、プレシアに向かい合ったフェイ

トが見た物は、何故か笑いを堪えている母の姿だった。
「へぅっ、て、ふふふ……。さっきから、くふっ、コロコロと転び過ぎよ、ふっ……フェイト、ぶふっ」
この状況下で妙なツボに入ったらしい。
思わずカーッと顔を赤らめたフェイトに、漸く笑いを収めたプレシアは更に言う。
「ふぅっ……。相も変わらずドジね、あなた。まぁ、よく何もない所で躓いていたくらいなんだから、しょうがないわよね？」
プレシアの言葉に、羞恥から頭に血が上っていたフェイトはつい反論する。
「か、母さんだって人の事言えないよ！」
「私が何だって言うの？」
むっと眉をしかめるプレシアにフェイトは続ける。
「いつもそんなずるずる長いドレス何か着てるから、たまに裾をふんづけて顔面からこけてたでしょ！？」
「ぶっ！？」
プレシアが思わず噴き出した。
「声を掛けた方が何か傷つきそうだったから、何も言わなかっただけなんだからね！」
自分の醜態をこっそり見られていた事を知ったプレシアの頬が、先のフェイトの様に赤くなる。
「い、いまだに砂糖と塩の区別がついてないあなたの方がやっぱりドジよ！」
「料理の事を言うなら、２回に１回は鍋を割ってたようなおっちょこちょいも母さんに言われたくない！」
「一人でお風呂に入れないでしょ、あなた！」
「シャンプーハットをまだ使ってるくせに！」
「大体あなたは……！」
「母さんだって……！」
ポカンとするギャラリー達を尻目に、フェイトとプレシアは今まで

溜まっていた諸々を吐きだす様に盛大にお互いの事を罵り始めた。

※

「何故こうなった……」

クロノはいきなり方向が転換した親子喧嘩を見て、思わずこめかみを押さえた。

「ふぇ、フェイトも言うねぇ……」

アルフが顔を真っ赤にしてプレシアに文句を言っているフェイトに、呆れ半分、関心半分と言った様子で呟いた。

その時。

「面白い事になってんな」

ばさり、と言う羽音と共に、そのような呟きが一同の耳に届いた。

「あ、御風！」

いち早気気付いたユーノが嬉しそうに呼び掛ける。

４人の視線を集めて現れたのは、天馬御風である。

「何か……凄い事になってるね……」

ユーノが降り立った御風の姿を眺めて言った。

御風の今の姿は、服はボロボロ、全身はすり傷だらけと言う中々凄惨な格好であった。

「心配すんな。全部かすり傷だ」

御風が手をひらひらさせて言う。

「君が今ここに居るという事は、駆動炉の封印は――」

クロノの問いに、御風はにかっと笑ってサムズアップした。

「ばっちりっす！それにしても……」

御風は今だ口喧嘩をしているフェイトとプレシアを見やる。

「よく見てるよなぁ」

そう言って感心したように頷いた。

「それって、フェイトちゃんの事？」

なのはが尋ねるが、御風は首を横に振る。

「違う。フェイトの母さん――プレシアって人の事だ」
その言葉に驚いた一同を尻目に、御風は続ける。
「ちゃんとフェイトの事を見てなきゃ、あそこまで細かい事でフェイトの事を言えやしないだろ？」
因みに、今プレシアは「嫌いな人参をこっそり自分の皿に移した事がある」と言う旨をフェイトに言っている。
「なぁ、アルフ。あの二人って、昔はどんな感じだったんだ？」
突然話を振られたアルフが目を白黒させながら、
「あ、うん。あたしがフェイトの使い魔になったばかりの頃は、あの二人はもっと仲良かったよ。プレシアはフェイトに魔法や勉強を教えたり、一緒に料理したり、リニス――プレシアの使い魔だった人やあたしと一緒に旅行に出かけてたりしてたよ」
「そっか。やっぱ、ちゃんとあるんじゃねぇか。あいつだけの楽しい記憶って奴は」
御風が感じ入った様に言う。
「そうじゃなきゃ、あそこまでフェイトがプレシアさんを慕う理由にならねぇさ。今の二人を見てみろよ。ちょっとしたもんだろ？」
「……うん、そうだね。フェイトちゃんもプレシアさんも、なんだか嬉しそうにしてる気がするよ」
なのはが御風の言葉を肯定する。
お互い派手に言い合うフェイトとプレシア。その表情は真っ赤で、いかにも怒っているように見えるのに、どことなく楽しそうでもあった。
「きっと、自分で言ってた事よりも、何か理由があんだよ。プレシアさんが、フェイトに辛く当たっていたのには」
だからって許される訳でもねぇけどな、と御風は言葉を締めた。
その言葉を聞いた他の４人は、何も言えず押し黙った。
※

声が枯れそうになるほど言い合っていたフェイトとプレシアは、今お互い肩で大きく息をしていた。
その時。
「ぐっ！？」
苦悶の声と共に、プレシアが口元を押さえる。その手の隙間から溢れだした血が、地面にぼたぼたと音を立てて落ちた。
「母さん！？」
フェイトが思わず駆け寄ろうとした瞬間、その足元にプレシアの魔力弾が撃ち放たれる。
「何をしているの！？」
たたらを踏んだフェイトに、声色を怒りに染めたプレシアの言葉が聞こえた。
「少し妙な事になったけど、今の私とあなたは戦っているのよ！あなたは本来、今の隙に攻撃を仕掛けるべきだった筈よ！」
「そんな、母さん……」
「あなたの伝えたい言葉と言うのは、その程度の物なの！？」
プレシアの激しい言葉に、フェイトははっと表情を強張らせる。
その間に、何とか呼吸を落ちつけたプレシアが、口元の血を拭って背筋を伸ばす。
「……悪くない時間だったわ。でも、私の方はそろそろ限界みたい。これ以上時間はかけられない。だから――これで決めさせてもらうわ！」
そう言うなり、プレシアは手にしていたデバイスを真っ直ぐ縦に構えた。
その構えを見た瞬間、フェイトは弾かれた様に後方に飛び、同様にバルディッシュを真っ直ぐ縦に構えた。
「「アルタス、クルタス、エイギアス！」」
二人の詠唱が重なる。
（そうだ、この魔法は、母さんが教えてくれた物だった）
その思い出を皮切りに、フェイトの脳裏に次々とかつての出来事が

雪崩れ込んできた。
勉強を教えてもらった事。
魔法の練習を頑張って、頭を撫でてもらった事。
一緒にお料理した事。
誕生日をお祝いしてくれて、大きなケーキを焼いてもらった事。
自分と母さん、リニスとアルフ。４人で旅行に行った事。
次々と。次々と思い出が蘇る。
（ああ。ちゃんとあったんだ。私の、私だけの大切な思い出）
そう思えば、アリシアの記憶など、ほんの一握りしかない事に、フェイトは気付いた。
（ねぇ、母さん。母さんは、私を本当に人形だと思ってるの？もしそうだとしても私は――）
「「疾風なりし天神よ、今導きの元、撃ちかかれ。」」
（本当に強くなったわ）
プレシアは思う。あの引っ込み思案で甘えん坊だった娘が、今こうして自分と渡り合う程に。
（あなたはもっと凄い魔導師になれるはず。もっと、幸せになれるはず。だから、私は居てはいけない）
プレシアは密かに唇を噛み締める。
（許しは請わないわ、フェイト。独り善がりなのは解っているけど、せめて、あなたのためと思わせて）
「「バルエル・ザルエル・ブラウゼル！」」
フェイトとプレシア――二人の周囲には、金と紫の帯電した雷球が、嵐の様に渦を巻く。
「「フォトンランサー・ファランクスシフト！」」
フェイトとプレシアがそれぞれ手を掲げる。それを合図に、それぞれ雷球は鋭利な雷の槍となり、その穂先を揃えて睨みあう。
「「撃ち砕け――」」
そいて、二人の手が同時に振り降ろされた。
「「ファイアッ！！」」

轟音と共に射出される、金と紫の雷槍群。フェイトの思いに応えたのか、それらはプレシアの一方的なパワーゲームにならず、むしろ互いに食らい合い、互角のぶつかり合いになった。
たちまち辺りは煙に覆われ、親子二人の姿を覆い隠していく。
「わわっ！」
「くっ！」
「ふぇ、フェイトは！？」
「……何も見えないな」
４人がそれぞれ悲鳴を上げる中、御風は厳しい視線のまま、煙の先にいるであろうフェイトとプレシアの姿を待つ。
やがて音が止み、辺りは静寂に包まれる。
「……どうなった？」
クロノが呟き、なのは、ユーノ、アルフも固唾を飲む。
その時、御風が手をすいっと動かした。それだけで風が流れ、周囲の煙を晴らしていく。
そしてその先にあったのは――。
「あっ！？」
「ええ！？」
「そんな……！」
「これは……」
「……」
プレシアの懐に飛び込み、バルディッシュの光鎌で斬りつける、ボロボロのフェイト、そしてそれを手にしたデバイスで受け止めているプレシアの姿だった。
「……驚いたわ。まさか、あの中を真っ直ぐ駆けて来るなんて」
そう。あの瞬間、フェイトは雷槍同士がぶつかり合う中を、プレシアに向かって走ったのである。
無論そんな事をすればタダでは済まない。その代償は、あちこちに傷を作り、纏ったバリアジャケットもボロボロのフェイトの姿が物語っている。

しかし、それでもフェイトはそれに成功した。持ち前の機動性を最大限に生かし、見事プレシアの元まで辿り着き、一太刀浴びせんとしたのだ。
しかし。
「でも残念だったわね？」
フェイトの決死の一撃は受け止められてしまった。プレシアにしても、フェイトの一撃は完全に予想外であった故に、受け止められたのは偶然に近い。
この瞬間、敗者と勝者が決定した。
即ち――。
「……私のデバイスじゃ、あなたの一撃を受け止めるのが背一杯だったみたいね」
ぴしり、と乾いた音を立てて、プレシアのデバイスに亀裂が入る。
そして両断されたデバイスの上半分がからりと地面に落ちた。
デバイスの補助が無ければ、いかなプレシアとて、今までの様な精密かつ強力な魔法を行使する事は出来ない。
「――私の、負けね」
フェイトの、勝ちである。
プレシアはそう呟くと同時に、糸が切れた様にその場に崩れ落ちた。
「母さん！」
フェイトが慌ててその体を支える。
プレシアは、その手を振り払わなかった。
そして、娘の腕の中でぽつりと呟く。
「本当はね、わかってたのよ。どんな魔法を使っても、どんな技術に頼っても、死んだ人間を蘇らせる事なんてできないって」
それは、今までの自分の全ての望みを捨て去る、驚愕の一言であった。

初めての親子喧嘩とプレシアの告白（後書き）

また更新が遅れた……ｏｒｚ。
遅くなって申し訳ありません。フェイトＶＳプレシアの親子喧嘩は、何とかフェイトの勝利です。
次回は、プレシアの告解がメインとなります。
それでは、また次回。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7510x/

風の魔法使い

2011年12月7日01時45分発行